
Destiny・Wars

梅院 暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D e s t i n y ・ W a r s

【Nコード】

N 2 7 1 8 L

【作者名】

梅院 暁

【あらすじ】

人は、生きていく中で多くの出会いを重ねていく。それはひよっとしたら偶然なのかもしれない。だが、もしたった一度の出会いが生きる道さえ変えたのなら、その？偶然？を人はこう呼ぶだろう……？運命？と。これは、ひたすらに王道を目指した、剣と魔法のファンタジー小説です。

序章

奇怪な玄室だった。

床にも、壁にも、樹の根のような——あるいは血管を彷彿とさせるような、ぬめりのある筋が縦横に網目を描いている。静寂に包まれていながら、地鳴りの如き胎動を錯覚させる異様な空間。感覚の鋭敏な者なら、即座に逃げ出すであろう禍々しさをはらんだ場所であつた。

その、あからさまに不吉な玄室の中央には、金属製の箱が安置されていた。部屋を覆う血管状の筋も、全てはこの箱に収束しているようにも見える。

その箱の前に立つ男——サムベルトは、箱の蓋にゆっくりと手をかけた。

やがてその呪われた棺は抵抗を止め、重々しい金属製の蓋が外れる。

人間の歴史を遙かに越える永き封印を解かれ、^{おり}澱のように濁った空気が噴出した刹那、箱の中の暗がりで何かが飢えた獣の眼ように光ったものの、幸か不幸かサムベルトは気付かなかった。

いや、仮に気付いたとしても、彼には人生を激変させる、幸運の合図としか感じられなかっただろう。

確かに、サムベルトの人生はこの時を境に一変する。

——金属の墓所に収められていた、一本の杖によって。

序章（後書き）

どうも、お初にお目にかかります、梅院暁です。

この小説について、ちょっととした説明を。

この小説は、元々はRPGツールというゲームで作っていたものを、自分なりに文章化して載せたものです。

まだまだ至らない点も多くありますが、温かい目で見守りながら、時には意見をくださると嬉しいですよ。

登場人物紹介（前書き）

ここでは、?Destiny・Wars?に登場するキャラクターを紹介していきます。

なお、極々たまにネタバレを含むことがあるので、本編をまだ読んでない人はご注意ください。

登場人物紹介

<主要キャラ>

ボルス・ヴァージナル…17歳

この物語の主人公の一人。

傭兵紛いの仕事で路銀を稼ぎながら旅をしている。とある理由から一箇所に留まることを好まないために、まとまった金が稼げず、いつも路銀に四苦八苦している。

茶髪に、青い目が特徴で、青い革鎧レザーアーマーを身に着けている。

直感に頼って突き進む直情的な人間で、物事を考えることが苦手であり、深く考えずに行動を起こす。特に、戦闘時にその性格が現れることが多く、やや力任せな傾向がある。

無愛想で粗暴な言動とは裏腹に、料理が得意という、家庭的な一面も持つ。

武器は自分の背丈ほどの大剣。先に挙げた性格も伴い、両手で振り回しては積極的デステイニーに敵に斬りかかって行く。

謎の剣？Destiny？を手にしたことで、彼の運命は大きく変わっていく……

パーシヴァル・ライトナイツ…18歳

この物語のもう一人の主人公。

物語当初はザミウル帝国の兵士だったが、ある事情から第十五騎士団に配属替えとなる。

重度の女好きで、たとえ相手が幼女だろうが将来を見越して声を掛けたりするため、たまに変態扱いを受ける。

かなり前向きな性格であり、たとえ何度女性に振られようが、酷い目に遭あおうが決して挫けることがない。ただし、悪く言えば楽観的でもあり、その性格がトラブルの元となることもしばしばである。

本職の合間に、鍛冶屋で鍛冶作業を手伝っており、その腕は職人達からも認められている。

長い黒髪に碧眼の整った顔立ちで、身長が高いのにも関わらず線が細い体型と相まって周りからは侮られがちだが、剣術の腕は中々のものである。

<ザミユル帝国>

親方…年齢不詳

大陸北部地方で鍛冶屋を営む。通称？おやっさん？。

髪には白髪が交じり始めているが、長年の鍛冶仕事で鍛え上げられたその身体は伊達ではなく、その力は片手だけでパーシヴァルを軽々持ち上げるほど。

性格は豪胆で、たとえ相手が国の有力貴族だろうが啖呵たんかを切る熱いおっさん。また、細かいことはあまり気にしない性格。

パーシヴァルとは古くからの付き合いで、彼の良き理解者でもある。

フォラーズ…16～18歳ぐらい

鍛冶屋の親方の息子。パーシヴァルとは年齢が近いために、職人衆の中では一番打ち解け合っている。

まだまだ未熟ながらも、父に恥じぬ鍛冶職人になるため日々修行をしている。

一方で、物知りな一面も。

アムビション・フェルナンド…30代後半

ザミユル帝国が有する騎士団のうち、第十五騎士団を束ねる騎士団長。

パーシヴァルを第十五騎士団に勧誘した張本人である。

ミライナ・ハフスター…20代前半

第十五騎士団所属の女騎士。

淡い褐色の髪と目を持ち、多くの男を魅了するほどの美貌を持つが、パーシヴァル曰く「少々お堅い」印象を抱かせる雰囲気を持つ。

アフティ・ヴィルジニア…年齢不詳

有力貴族の一角にして、代々騎士団団長の職を承るヴィルジニア家の現当主パスメノス・ヴィルジニアの子。

有力貴族の血筋という自身の立場を利用して、数々の悪行を行った。

その性格は、自己中心かつ残虐で、偶然ぶつかっただけの子供ですら斬り殺そうとする。

パーシヴァルを謹慎に追い込んだ張本人でもある。

登場人物紹介（後書き）

物語が進めば、徐々に更新していく予定です。

用語集（前書き）

D・Wに登場する用語をまとめました。
物語が進むごとに更新していく予定です。

用語集

【カ行】

> 教団<

グラン大陸にて、もっとも巨大な勢力を誇る宗教団体。
人間誰もが持つ魔力を「神から与えられた力」と説き、莫大な支持を受け巨大な組織となった。
その立場上、魔法が使えない魔法不能者たちを人間として扱っていない。

> グラン大陸<

D・Wの舞台となっている大陸。

【サ行】

> ザミユル帝国<

グラン大陸北部地方の大部分を支配する軍事大国。
元々北部地方は一年の大半を氷雪に覆われる地域性のため、作物が育ちにくく、その住民にとって最大の悩みは飢えである。そのため人々は食物を求めて争い続けた。
ザミユル帝国はその永き戦いの末に生き残り、北部地方にて覇を唱えるまでに至った。

> ザラン<

グラン大陸における貨幣単位。

【タ行】

＞デステイニー＜

ボルスが手に入れた謎の剣。

大きさは人一人に匹敵するが、実際は見た目ほど重くなく、それなりに力があれば片手で振り回すことも可能。

その秘密は刃にあり、大抵斬るための剣は折れないように厚いつくりになっているが、この剣は一般のものと比べ刃が薄く、それにより凄まじい切れ味を生み出す。

銘の由来は、刀身に？ D e s t i n y ? の文字が彫られており、そこからボルスが命名した。

【マ行】

＞魔装具＜

魔力を増幅させるための触媒。

装飾品や杖といった様々な形状を持つ。

ただし、材質には高純度の金属や宝石といった希少な鉱石が使われるため、一般人には程遠いほど高価な品でもある。

＞魔法・魔術＜

魔力を利用し、様々な力を行使する戦闘法および術式のこと。

ただし、使用には力を増幅させる魔装具と、威力を安定させる術式の詠唱が必要であり、片方あるいは両方が無くとも使用は可能だが、威力そのものは低くなる。

＞魔法不能者＜

本来、魔法は誰にも使えるのだが、魔力が極端に低い、あるいは魔力を持たないために魔法が使えない人間も存在する。

彼らはかなり少数なために他の人間からは蔑称で呼ばれる。それが魔法不能者である。

基本的に彼らは魔法が使えないだけで普通の人間となんら変わりはない。

しかし、教団の威光が強くなるにつれ、魔法不能者蔑視の風潮が高まったために、彼らは教団を憎んでいる。

第一話（前書き）

序章から大分間が空きましたが、第一話です。

第一話

青年は森の中を彷徨^{さまよ}っていた。

肌寒い冷気が吐く息を瞬く間に白く染める。

——こんなことだったら、ちゃんとした装備を整えるべきだったか。

青年——ボルス・ヴァーヅナルは自分の浅はかさを呪った。

現在ボルスがいる森は、普通なら誰も通ることがない。ほとんどの人間は、この森を迂回するように整備された街道を通る。この？ グラン大陸？の北部地方は陸地の大半を凍土で覆われており、冬にもなれば完全に雪に閉ざされてしまう。そんな土地柄ゆえ滅多なことでとは街道を外れるなどという愚を冒す人間はいない。さらにいえば、人の手の入っていない森は所謂^{いわゆる}獣の巣窟……命がいくつあっても足りない。

だが、ボルスはその愚を冒した。

今の季節は夏だ。いくら寒冷な地方といったって雪は降らまい。だったら、わざわざ回り道する必要もない。獣などに出くわす前にはるかに短い行程で済む森を通ってしまえばいい——

しかし現実には、そうは甘くなかった。

人の手が入っていない森は、予想だにしないほどに歩き辛かった。地面に生い茂った草が、森中を覆わんばかりに枝を伸ばす木々が、地表に網目を廻^{めぐ}らす太い根が、視界を狂わせ、森全体を暗くし、足の自由を奪い、動きを制限する。嫌でも歩みが鈍る。

さらに誤算があった。気温である。

夏なのでさすがに雪は降っていないのだが、森に吹く風は冷たく、自身の肌に針で突付くような微かな痛みを与えてくる。

ボルスの装備はお世辞にも寒冷地に適した装備とは言えない。直前にいた街で買ったマントを羽織ってはいるが、中に着ているものは数年前から着たきりとなっている青を基調とした革鎧^{レザーアーマー}である。こ

れは、以前いたとある街で自警団員として雇われた際に——もつとも、ある事情からすぐに辞めさせられたが——支給されたもので、傷や解れが目立ち始めていた。

そしてマントの上から、右肩と左腰を繋いでソードベルトを斜めがけにし、背中で鞆を斜めに固定している。その中にはボルスの身の丈ほどの長さの大剣が収まっていた。

利き手である右手がすぐに背負った剣の柄に届くよう自由にさせ、左手で荷を担いで森の中を歩く。着ているものが薄いために体温がどんどん奪われてはいるが、とにかく前に進むことだけを考えて。

日が傾いてきてはいたが、幸いにして視界が開けてきた。これ以上進めなくて野宿する羽目に陥ったとしても、なんとか周囲が見渡せるような場所なら、夜の警戒もそれほど苦にはならないだろう。

そんなことを考えながらボルスは歩き続けるが、その目にある光景が飛び込んだできた途端、ハッとして足を止めた。

「なんてこった……」

ボルスは荷物を下ろすと急いで倒れている男に駆け寄った。
「しっかりしろ！ おいっ！」

ボルスはその男の身体を揺さぶるが、まったく反応がない。見れば、その男は大きな包みを両腕で抱えていた。その包みは男の背丈ほどの大きさであったため、一瞬何が入っているんだと思ってしまうが、一先ず男の首筋に手を当てる。脈はすでになく、体はだいぶ冷たくなっていた。そして、視点を変えたことでようやく気付く。

男の背中には、斜めに走った刃傷が深々と刻まれていた。左肩の近くには短剣が突き立っている。このどちらかが致命傷を与えたに違いない。

このことから、獣に襲われたのではなく、人間の手によって殺されたというのは間違いない。

ボルスは男の抱える荷に視線を戻した。数瞬の躊躇の末、包みを開く。この大事そうに抱え込まれた荷物こそ、この男が殺された理由が隠されているのではないか——直感的に思った。

包みの布を解いた瞬間目に映ったのは、握りに幾重も古い布が巻かれた柄ヒルト、全体が十字型に見せるために前後に伸びた鐔ガード——そして柄と鐔がちょうど交わった部分に埋め込まれた、青白い輝きを放つ小さな宝石。まだ布に包まれた部分には、鞘に納まった刃が存在することは容易に想像できる。そう、これは——

——背後から草を踏む音が聞こえた。

振り向くとそいつは口からうなり声を漏らす。余計な肉を削ぎ落とし、灰色の体毛に覆われ、鋭い牙と爪を生やした獣——森林狼が、次の瞬間には大地を力強く踏み出し、こちらに飛び掛ってきた。

そのとき、あまりに突然の事態に自身にまともな思考が働いていなかったのか、咄嗟とつさの判断だったのかは分からない。

ボルスは遺体の抱えていた剣を抜き放ち、振り向き様に片手で一闪させた。

ボルスはその剣を持った瞬間、見た目からは想像できないほどの軽さに驚いた。

さらには、片手で振ったのにも関わらず、その剣は易々と狼の下顎あごを斬り落とし、そのままの勢いで首を斬り分け、骨ごと前足の腱けんを断つ。顎たから前足まで斬り裂かれたそいつは着地することもないままに樹に激突——鮮血を撒き散らした。

ボルスはその斬れ味に目を見張る。

剣というものは、大きく分けて二種類に分類される。

一つは「斬る」ことを主目的とした剣。この手の剣は刀身が長く、厚く、そして大型なものが多い。というのも、冶金ちぎんか金属加工の技術が未熟なために刃の硬さと軽さを両立出来ないからだ。悪戯いたずらに軽く薄くした剣で、相手の防具や骨を斬ろうとしたら折れた、などということになれば剣の意味を成さない。

今でこそ鍛冶技術の向上で、ある程度細くても切れ味のよい剣が作られ始めているが、大抵は斬る剣と聞けば刃がやたらと大きな剣

を連想するのである。ただ、それらは刃が分厚いために用法は「斬る」よりも「叩く」といった方が正しい。

今、ボルスが持っている剣も、どっちかと言えば「叩く」方に分類されてもおかしくはない形状に見える……よく見れば、刃が普通より薄いのだが。

そして、もう一つは――

あまりの凄まじさに呆然としたボルスではあったが、それも僅か数秒のこと。

今度は右手に持った剣の切っ先を虚空に向け、柄頭に左の掌を添える。左手で押すようにして突きを放った。

それと同時に、襲いかかろうと宙に跳んでいた森林狼の口内から刃は突き刺さり、頭蓋骨を貫通し、そいつの脳を破壊する。赤い体液に濡れた切っ先が、後頭部を突き破った。

――もう一つは、「突く」ことを主目的とした剣である。これは先程とは逆に細くて軽いものが多い。これらの剣は針のように鋭い切っ先でもって狙った場所を的確に刺し貫く。中にはわざと刃を潰して円錐とか三角錐状の刀身を持つものもある。これらは極端な例ではあるが、「突く」ことを考えると「斬る」方はどうしても御座なりになってしまう。

いわば、二つの特性は反発してしまうのだ。

ボルスは、もはや困惑を通り越していた。身体が、震える。

もう一体狼がいたことに気付いたときには、そいつは高く跳躍していた。接近を防ぐために切っ先を突き出したが、まさかあそこまで深く刺さると思っていなかった。

その剣は自分の常識など超越していた。ここまでの斬れ味を持ちながら、刺突にも優れている。こんな業物、自身の十七年の人生において一度も見ただことなかった。

そして、その剣に対して、畏怖^{いふ}とは別のある感情が心の奥底にあることにも気付く。

この剣に、自分は魅了^{みりよう}されているのだということに！

この数年間傭兵紛^{まが}いのことをして糊口^{こう}を凌^{しの}いできた。時には危ない橋も渡った。

いずれの場合も自分は剣一本で危機を脱^{だっ}してきたのだ。自分にとって剣とは、もはや捨て去ることの出来ない存在であった。

だからこそ？ 自分はこの剣の威力に恐れながらも、こんなに惹^ひかれているのだろうか？

ボルスは狼の顔を踏みつけ、刃を抜く。そのとき、剣腹の表面に文字が彫^ほってあることに気付いた。そこへ流れた血が赤く文字を浮かばせる。

そこには、こう記してあった。

――?Destiny?と。
デステイニー

第一話（後書き）

感想、意見等お待ちしております。

第二話（前書き）

調子に乗って書き連ねていたら、5000字を軽く越えてしまい
そうだったので、分割しました。

第二話

静寂に包まれた森の中、石で囲んだ焚き火で薪が弾ける音だけが響く。

ボルスは荷物からフライパンや包丁といった調理器具と、街で調達してあったパンやベーコン、チーズなどの食材を取り出した。

まず、ベーコンを一口サイズに丁寧に切り、チーズを薄くスライスする。フライパンを火に掛け、熱を帯びた段階で木製の円筒状の小さな容器を取り出した。蓋を開け、中に入っている食用油をフライパンに少量垂らす。フライパンを傾けて油を広げると、先ほど切ったベーコンをぶち込んだ。

ジュー、と油が跳ねる音。

焦げないようにフライ返しを駆使して炒め、程よいところでスライスしたチーズをベーコンの上に敷いた。後はチーズが溶けるまで熱を加え、出来上がったものをパンに乗せるのである。

ボルスは料理を続けながらも、剣を二本とも手がすぐに届く距離に置き、油断なく周りを眺める。暗闇の中では動き回る獣はおろか足音一つしない。

あの後、ボルスは男の遺体が肉食獣に喰われたりしないように自分の剣で穴を掘って埋葬した。掘った土を元に戻した時には日没寸前だったので、野宿をすることにした。

ただし、自分が襲われては話にならない。

野宿を行うにあたり、手頃な石を拾っては円形に並べ、その中央に細い木の枝を十数本積み上げて火打石で火を付けた。

問題になったのは、自分が返り討ちにした二頭の狼である。いつそのことこいつらを夕食に……と考えなくもなかったが、狼という奴は素早く獲物に喰らい付くために、動きを妨げるような肉がない。言い換えれば、食べれる部分が極端に少ない。

食べる以外で何か有効活用出来ないものかと考え——毛皮を剥ぎ

取ることにした。昔、毛皮で出来た衣服をどこかで見た記憶があるからだ。ひよっとしたら、売れば少しは金になるかもしれない。

そんなことを思っ毛を剥はごうとしたが――結構苦戦した。食用の鳥肉なんかの皮は何度も剥はがしたことはあるが、狼なんて初めてである。どうにか苦勞して毛皮を剥はぎ取り、残った肉なんかは大した量でもないので骨ごと焚き火の中に放り込んだ。肉の焦げる臭においが気になったが仕方がない。むしろ、血の臭いで獣を呼んでしまう方が厄介である。またさっきのような立ち回りをするのは御免ごめんだ。

さて、フライパンに目を戻すと、丁度良い頃合だった。チーズがトロリとしてなんとも美味うまそうだ。フライ返しを手にし、フライパンからパンへ盛り付けようとした、その時――

――パキツ、という音が背後からした。

ボルスはすぐそばに置いてある剣に手を伸ばす。音の正体は察しが付く。地面に落ちている枝を踏んだ音だ――問題は何が踏んだのか、だが。

右手で剣の柄を掴もうとすると、後ろから声がした。

「動くな」

ピタリと手を止める。

「よし、ゆっくりとこっちに振り向け……おっと、抵抗なんか考えるなよ」

ボルスは言われたとおりにした。

振り向くと、そこには黒や茶といった地味な色の革鎧レザーアーマーを着た男達レザリアーがいた。その数はざっと九人ほどか。それぞれが剣や斧といった武器を持っている。

しまった、血の臭いは獣を引き寄せるが、焦げた肉は山賊を引き寄せるのか……などと考えていると、その内の一人が近づいてきた。そいつは頬ほおに大きな傷跡があり、その手に短剣ダガーを持っている。切っ先を常にこちらに向け、こちらの動きを牽制けんせいする。

「一つ聞きくぞ」

黙^{だんま}りを決め込んでみると、その男はある一点を注視しながら聞いてきた。

「なんだ」

「その剣、どこで手に入れた？」

ボルスは思わず自身の手元を見てしまった。

奴が言っているのは、自分の剣のことではない——もう一本の剣のことであることは理解できた。

「拾った」

「拾っただ？ どこでだ？」

「ここで、だ」

すると、別の男がこちらに歩み寄ってくる。その男は、他の連中に比べると、かなりの筋肉質で一回りも二回りも巨体だった。体格と同じぐらいの巨大な剣を背負っている。

「近くに男がいなかったか？ 特徴は——」

「背中に斬り傷があって、短剣が刺さっていた男か？」

ボルスは男の問いを途中で遮った。

男は目を見開く。

「どうやら、こいつ知ってるようですね！」

「そのようだな」

また別の声。声のした方を見ると、やたら貫禄のある男が両腕を組んでこちらを見据えている。

直感的に、こいつがリーダーだと感じた。

「で、そいつはどんな状態だった？」

ボルスは肩を竦^{すく}めながら、

「状態も何も、見つけたときには息はなかった。だから埋葬したんだが、何か問題でもあったか？」

と答える。

目の前の短剣を持った男が、

「なに、そいつはせっかく俺達が手に入れたその剣を勝手に奪ってトンズラこきやがってな。俺達はそれを雇い主に渡さないと困っ

たことになるってのに……」

と、説明し始めた。

なるほど、仲間割れか。

「そういうことだな。その剣、とつとこつちに渡してもらおうか……なに、渡せば命は助けてやる」

そういうことを言う奴に限って命の保証はしてくれないんだぜ？
そんなことを思いながらも仕方なしに左手で剣を取ろうとして――
あることを思い付いた。

「なあ、あの背中に刺さってた短剣って、ひょっとしてあんたのか？」

「おっ、よく気付いたな」

そいつはニタリと嫌らしい笑みを浮かべ、

「あいつも馬鹿な奴だぜ。俺達から逃げれると思ってやがったのか……あ、別の傷はあそこの……」

と、饒舌に捲くし立てながら、視線を大男の方へ少し向ける。

それが、その男の致命的なミスだった。

ボルスは、自分に短剣を突きつけている方の手首を右手で掴み、さらに左手で男の肘を掴む。筋肉の薄い部分に触れる指に力を込め、曲がる方へ下に引くようにして無理矢理曲げた。肘の間接を男の意思と関係なく曲げると、右手で男の喉下目掛け、男の握る短剣を突き刺す。

自分の功績を高らかに謳い上げていた男は、自分に何が起こったのすら認識できず、「ひゅ、ひゅっ」と声にならぬ声を出した。やがて、呼吸も止まる。

突然の事態に、他の連中も一瞬何が起きたか理解できない。

ただ一人、あの巨漢だけは、

「よくもジーンを！」

と叫んで、剣を抜き放つ。

ボルスはその大男に、ジーンと呼ばれていたであろう亡骸を投げつけた。そいつが怯んだ隙に、剣のある場所まで後退する。焚き火

の熱が、背中に伝わる。

「殺せえ！」

衝撃から立ち直ったか、リーダー格の男が叫んだ。その命令を受け、ボルスから見て左側にいた男二人が武器を構えて突っ込んでくる。

先頭の男が斧を右手で大上段に振り上げて殴りかかってきたが、はつきり言って、あまりにも大振りで緩慢な動きだった。

爪先で剣を蹴り上げると、鞘から抜かないまま、そいつの鳩尾を鞘尻（鞘の先端）で突く。その男は身体をくの字に曲げて吹っ飛んだ。

さらに、後ろから続いていた男が剣を横薙ぎにしてきた――が、そいつも大振りな上に、振る位置が高すぎる。ボルスが姿勢を低くすると、刃が髪の毛の先端を巻き込んで頭上を通り過ぎた。ボルスはそいつの両足を鞘で払う。

すると、その男は勢い誤ってボルスの背後の焚き火に頭から突っ込んだ。焚き火から火の粉が宙に舞う。

「う、うぎゃああああああああ！！！」

絶叫が響き、男は顔を両手で抑えてのた打ち回った。

この一瞬で起きたことに驚き、他の男達は足を止める。

ここでボルスは剣を抜き、状況を確認する。見る限り、リーダーとあの巨漢以外の奴らは特に問題ないと思った。態度や武器の構え方を見れば、大まかな経験や力量というものが分かる。

「どけ、お前らあ！」

あの大男だ。他の連中が止まったと見るや、そいつは剣を振りかぶりながら突進してくる。

さすがにぶつかったら確実に力負けするので避けるのだが、ここで予期せぬことが起こった。

避けた方向では、未だに顔を火傷した男がのた打ち回っていて、

その男の足が偶然にもボルスの足を払う。

いきなりのことにバランスを崩したボルスは尻餅を着いてしまい、そこに巨漢の剛剣が迫った。

「ちいっ！」

柄を両手で握り締め、ボルスは剣でその斬撃を受け止める。が、あまりの衝撃に少し手が痺れた。

力を込めて押してくる大男。負けじと渾身の力で押し返すボルス。一時的に互いの力が拮抗し、剣を挟んで睨み合う。

しばらく続くかと思われたそれは、ある男の一言に終わらせられる。

「下がれ！ こいつを試す」

ボルスは自分と熾烈な鏖迫り合いを繰り広げる巨漢の身体越しにそれを見た。

ずつと命令して見ていただけだった男が、組んだ両腕を解き、右手をこちらに向けて突き出す。

男の手首には、銀で出来た腕輪が装着されていた。それには、火の粉を反射して光る宝石が埋め込まれている。

ボルスはギョツとした。彼は知っている——それが、ただの装飾品などではないことを。

咄嗟に大男の腹を蹴り飛ばし、近くに置いていた鞘に納まったままの剣を拾い——その間に男は詠唱を終えようとしていた。

「炎よ、我が意志に応えよ！」

向けられた右手に炎が生まれ、球を形成する。まるで、周りに飛び交う火の粉を吸収し、固めるかのよう。

ボルスは必死にその場を離れようとするが、間に合わない——

「？ファイアボール?!」

ついに、コマンドワードが発せられ、完成した炎の球が、勢いよくこちらに放たれた——

第二話（後書き）

特に書くことが思いつかないので、後書きには前の話の制作秘話や反響や意見といった裏話でも書いて見ることにしました。

<D・W第一話作成秘話および裏話>

序章から二週間もかかってやっと書きあがった第一話。

一応、私の友人にも読んでくれているのが数名いるので、その方々の意見を載せてみる。

「あらすじ文で爆笑したのは、絶対僕だけじゃない」

「あらすじが無駄にロマンチック」

「なんか、普段の梅院のイメージにかみ合わない」

「君の見た目から、あのあらすじは想像付かないよ」

「知らない人が読んだらともかく、普段の梅院を知ってる身としては笑うしかない」

ちよっ、あらすじについてばっかかよ！ しかも、私の見た目と合わせて判断してるし！

で、改めてストーリーについて聞いて見た。

「グロい（即答）」

.....

まあ、こんな小説ですが、末永い御付き合いをよろしくお願い
いたします……

第三話（前書き）

予定よりも大分遅れましたが、第3話です。
前回に引き続き、バトル……だといいな（願望かよ）。

第三話

「?ファイアボール?!」

男の口から、コマンドワードが発せられた。完成した炎の球が、勢いよくこちらに放たれる――

その時、ボルスは地面に落ちているものに気付き、間髪入れずに左の踵で蹴り上げた。

蹴られた衝撃で蓋が開き、中に入っていた液体がぶちまけられる。そこへ火球が迫り、空中にばら撒かれた可燃性の液体――油に衝突して盛大な爆発を起こした。

ボルスは背中に爆発の煽りを受け、飛び込むように樹の後ろに隠れる。

迂闊だった……まさか、あいつらがあんなものまで用意してるとは――

「しかし、本当に凄かったですね、さっきの魔術は」

「だろう? いつもだったら、どんなに力を込めて詠唱しても、あそこまでのでかさにはならんからな」

男は自身が身に着けている腕輪――?魔装具?を見下ろしながら言う。その声には、少なからず歓喜の響きがあった。

「あの時は驚いたもんだ……雇い主の野郎が『今は金が無い。その代わりにこれを受け取ってくれ。使うなり売るなり好きにすればいい』だなんて言ってこれを差し出した時にはなあ」

魔装具――それは、極々一部を除いた人間誰もが宿す?魔力?に着眼して作られた武具である。

人々は魔力を意図的に自身の体内、あるいは体外に働きかけ、「

火を起こす」「風を発生させる」などといった力を行使することが出来る。

ただし、限界はあった。そこでより大きな力を求め、その限界を上げ、さらなる威力を誇る力を引き出し、増幅させる――そのために作られたのが魔装具である。

それらは、指輪や腕輪といった装飾品、あるいは杖といった様々な形状を持ち、材質や大きさによって、その作用の度合も変わってくる。

そして、強化された？魔力？を用いることで編み出された戦闘法や術式のことを、人は？魔法？あるいは？魔術？と呼ぶ。

ただし、本来なら魔装具はそんなに簡単に手に入るものではない。大抵は材料に宝石や純度の高い金属が使われるので、庶民の手には届かないほど値が張る。

しかし、男は手にしたのだ――この強大な力を。力は、時に人を惹きつけ、時に人の心さえ変貌^{へんぼう}させる。

彼の脳裏にあるのは、標的^{ボルス}をこの力で焼き尽くすことと、相手の持つ剣を奪い、早急に雇い主に届けることだった。

「奴はまだ生きているぞ！ 囲んで殺せ！」

大男の怒号。駆け足で草を踏む音。

ボルスは危機に瀕^{ひん}してしていた。

左腕に痛みが走る――どうやら、先の攻撃で火傷を負ったようだ。ボルスは、もう一方の剣――彫^ほってあった文字から？デステイニ―？と名付けた――を抜く。

男の遺体を埋めるとき、最初はこの剣も一緒に埋めようと思っていた。だが、埋葬が終わってみると、無意識の内にこの剣を自分の手元に残していた。

その理由は分かり切っている。自分はこの剣に魅了されてしまった。

だが、何故？

何がここまで自分の心を釘付けにするのだろうか？

（ああ、そうか）

ようやく気付いた。自分が剣を手放せないわけ、それは――

段々、自分に近づく足音が大きくなってきた。

すでに自分は包囲されている。たとえ出て行っても、あの男の魔術を喰らうのがオチだろう……

（せっかくデステイニーがあるのに、何の手出しも出来ないまま死ぬのか）

今、自分は（これまでに見た中で）最高の剣を持っている。

だが、結局魔法というものに自分は勝てないということか。

（ふざけるな）

自身の中で、何かが沸々と煮え滾る。^{たぎ}

（こんなところで、死んでたまるか）

柄を強く握り、状況を整理する。

相手は八人……その内一人が魔術でこちらを狙っている。樹の陰に隠れているから当たりはしないが、こちらも同じことだ。樹を隔^{へだ}てている限りこちらも攻撃できない。斬りかかれば狙い撃ちされるだろう。

今、こうしている間にも他の連中が包囲網を縮めている。樹を盾にするのは間違いだったかもしれない。この樹さえなくなれば……

ここで、ボルスにある考えが浮かんだ。

デステイニーの刀身を見つめながら、左腕を動かして怪我の具合を確かめる。

腕の火傷は深刻だった。少し振っただけで、熱を伴^{ともな}った痛みが全身を駆け巡^{めぐ}る。

この剣があればなんとかなるかもしれない。だが、それは自分が万全だったときの話だ。こんな状態で、果たして出来るのか、もし失敗したら……

一瞬、否定的な考えが頭を過ぎったが、首を振ってその考えを捨てる。

（考えるだけ無駄か）

ボルスは口に笑みを浮かべながら、ゆっくりと立ち上がる。相変わらず火傷が痛みを訴えてくるが、無視してやることにする。

あんな馬鹿げたことを考えるとは、自分らしくなかった——そもそも、考えをまとめてから行動を起こすこと自体、性に合わない。失敗したら死ぬ？ 上等じゃないか。第一、何をしなくても殺されるのを待っただけだ。

その場凌ぎであつてもかまわない……動けるうちに何かしなければ。少しでも可能性があれば、たとえば、その場凌ぎであろうとも、全力を注ぐ！

「うおおおおお——」

両手で剣を振り上げる。激しい痛みに襲われるが、歯を喰い縛り、耐え、そして……

「——りやあああああああああ！」

と、腹の底から叫び、樵が斧を打ち付けるように、樹に向かって剣を振り下ろした。

刃が幹とぶつかり、両腕に振動が伝わる。叫び声以上に全身に響くはずの痛みを忘れ、樹を切り倒すことに全神経を傾けた。

あまりにも突然すぎるボルスの行動に、男たちは包囲していることも忘れたかのように棒立ちしている。

肝心の剣は——樹の直径の四分の三まで切って止まった。しかも、完全に喰い込んで、どう力をかけても抜けない。

やはり、怪我のせいで力の入れ具合が足りなかったか。

「ば、馬鹿め、気でも狂ったか！」

リーダー格の男の声で、ようやく我に返ったらしい。男達が一斉にこちらに向かってきた。その様子に、先ほどのような慎重さは、ない。

樵の真似をしても駄目だったか……ならば！

「熊の真似でもすればいいんだろうが！」

ボルスは柄から手を離すと、樹に右肩から体当たりをぶちかました。

骨が砕けたかと思えるほどの衝撃。

それがきつかけとなったかのように、樹がボルスとは反対側——つまり男達がいる方へ少し傾いた。その後は呆気なかった。切れ目から折れて、樹の重さで勝手に倒れる。

倒れてくる巨木を目の前にして、男達は慌てふためいてその場から逃げ出した。

樹が轟音とともに地面に倒れたときには、樹が折れたと同時に宙に舞った剣を掴み、走り出す。目指すは、この男達の首領。

男達は突然の事態に狼狽^{ろうばい}し、誰もボルスの前に立ち塞がろうとしなかった——ただ一人を除いて。

「嘗^なめた真似をお！」

あの大男だ。そいつが、そいつ自身の体格ほどの大剣を頭上まで振りかぶり、こちらに突進してくる。

ボルスは柄を両手で握り、右足を後ろに退いて剣を右腰の位置に保持する。

大男がボルスの脳天目掛けて剣を振り下ろすと同時に、ボルスも横一文字に剣を一閃させた。

虚空から落ちる剛剣と地を這^はうように繰り出された一撃。

互いの剣が激突し、闇夜に火花が散る。金属同士の衝突による低い音が鳴り、相手の大剣が根本から折れた……否、折れたのではない。

切^き断されたのだ。

大男の目が驚愕に見開かれる。

次の瞬間、ボルスの手には、肉を抉^{えぐ}る鈍い感触が伝わった。剣を両断した勢いそのままに大男の胸に刃が達したのだ。すれ違いざまに振り切ると、斬り割った傷口から鮮血が弾け飛ぶ。

「炎よ！」

ボルスがリーダー格を見据えると、男は再び詠唱を開始していた。二人の距離は、まだ遠い。

「わが意志に……」

男の手に、炎が収束する。このままでは、撃たれる……

ここで、ボルスは何かを蹴った。

見ると、それは焚き火に放り込んであった狼の骨だった。それは先端が鋭く尖り、ずっと火の中に入れられてたからか、熱を保って薄っすらと赤い。どうやら、先程男達の一人が焚き火に突っ込んだときにここまで飛んできたようだ。

ボルスはそれを左手で拾い——魔術で受けたものとは違う痛みに襲われた。骨の持つ熱が容赦なく掌の皮膚を焦がす。

あまりの痛みに手を放しそうになるが、

「まだだあああああああああ！」

と、ボルスは三度吼え、骨を男に向かって投擲する。

そして——骨は男の右目に突き立った。

——眼球というのは、ほとんど液体である。正確に言えば、網膜など薄い外皮で覆われた中に体液が詰まっているのだ。

今、男の目に骨が刺さると、骨自体が熱を持っていたために、傷口が火傷に似た症状を起こして塞がり、体外への体液の流出は防がれる。

しかし、その熱が別の効果を生んだ。中の体液そのものを急激に熱し始めたのだ。

温度が膨れ上がり、内部が沸騰した湯と同じ状態になった眼球はやがて破裂し、男の脳をズタズタにする——

男は声を上げることもなく、くたくたとその場に崩れ落ちた。手に集まっていた炎がその虚ろな表情を照らす。一拍遅れて、炎は霧散した。

（終わったか……）

連中には、首領がいなくなっても立ち向かうほどの度胸はあるまい。

そう思い、緩みかけた気を――背後から微かに聞こえた、草を踏む音で再び引き締める。

振り向く時間も惜しく感じ、左肩越しに右手の剣を突き出した。

肉を刺す感触と共に、「ぐっ」と押し殺した声。

重さに押しつぶされそうになりつつも、両手で剣を保持した状態で振り向くと、串刺しになったあの男が血走った目でこちらを見ている。右手には、短剣が握られていた。飛び掛ってきたか両足が宙に浮き、自重でずぶずぶと刃が喰い込む。

「まだまだあ！」

恐るべきことに、胸を斬られ、腹を刺し貫かれたこの男は短剣を逆手に持ち、両手で握り締め、頭上からこちらに振り下ろそうとした。

ボルスは自ら身を投げた。地面に背中が達する寸前に男の体に右足を掛け、剣から手を放し――男を投げ飛ばす。

ボルスの頭を越え、男は地面に身体を打ち付けた。短剣を手放し、手足が痙攣し――やがて動かなくなった。

辺りに、血の臭いが漂う。

ボルスは身を起こすと、男に歩み寄って剣を抜いた。

今度こそ、終わりだ――そう思いながら、鏢を軽く叩いて血を落とす。

鞘に収めて左腕に抱き、右手で自分の剣を持つ。

すると、声が聞こえた。

「た、助けてくれえ……」

声のした方を見ると、男が一人、倒木に足を挟まれている。どうやら、こいつは逃げ遅れたらしい。

ボルスが近づくと、その男は「ひいつ」と怯えた声を出した。

「ま、待ってくれ！」

ボルスは足を止めない。

「頼まれただけなんだ！ 剣を奪って来いって！」

男の近くには、彼の首領が顔中の穴という穴から血を流している。男はその亡骸を指差して叫んだ。

「そ、それに俺はまだ入ったばっかなんだ！ 金に困ってて、そんな中その男に誘われて……この仕事が初めてだったんだ！」

まだ微かに燃える焚き火の炎の光が、抜き身の刃に反射する。ボルスとその男との距離は、あと二、三步といったところだ。

「う、うわあああ！」

ボルスはその男に近寄り——思いっきり素通りした。鞘を拾い、もう一本の剣を収める。

男は「えっ？」と間拔けな声を出した。

ボルスは剣を地面に置くと、倒木に手を掛ける。力を入れるが、一人の力では到底持ち上がらない。

「おい、お前ら！」

ボルスは、傍観していた他の男達に向かって叫んだ。

「仲間ほっとく気か？ 命は助けてやるから、手伝え！」

男達は顔を見合わせると、武器を放り捨て、倒木に駆け寄った。

「ふう……酷い目に遭った」

ボルスは倒木の上に腰を下ろした。

あの後、仲間を助けた男達は、死体を運んで立ち去っていった。

「それにしても、腹が減ったなあ……」

思わず呟き……ようやく思い出す。

ボルスが焚き火の傍そばに戻ると……無惨な光景が広がっていた。散乱する調理器具、そして——

「俺の飯があああああああああああああああああああああ！」

——静寂に包まれた森の中、ボルスの悲鳴だけが響き渡った。

第三話（後書き）

< D・W 第二話作成秘話および裏話 >

気付いた方も多いと思いますが、第二話は一旦更新した後、一部書き直しています。

大学で友人との間にこんなやり取りがあったからです。

友「なあ、この料理シーンなんだけどよお……」

私「なんだ？」

友「この表現、いらなくね？」

一応、私はノートに原文を書き、それを推敲してからアップしているので、書いている途中でも友人に意見を求めたり出来ます。

で、友人が指し示した箇所というのが……

『フライパンを火にかけ、熱を帯びてきた段階で木製の円筒状の小さな入れ物を取り出した。蓋を開け、中に入っているドロリとした液体——食用油をフライパンに少量垂らす』

私は、心底不思議になって尋ねました。

私「？ この表現になんか問題でもあるのか？」

友「大有りだ！」

突然怒る友人。

私「おいおい、どこが問題なんだよ？ 単なる料理シーンだぜ？」

友「料理なんざどうでもいい！ 問題は、ここだ……」

友人は「ドロリとした液体」の部分を指した。

友「この表現はいらん！ 第一……」

私「第一？」

友「十八禁になるぞ、この小説！」

私「ならねえよ！」

友「いや、なるって！ なんせ『ドロリ』だぞ、『ドロリ』！ 油

って言いたいなら最初から回りくどい表現すんなよ！

考えてみる！ 健全な男が『ドロリとした液体』と聞いて思い浮かべるものを！ もしこの液体がし（ピー）かったらどうする！ さらにいうと油じゃなくて生クリ（ピー）だったらしたら、最早大問題だぞ！

少なくとも貴様は社会から抹消される！」

私「んなこと考えるのお前だけだよ！」

友「うるせえ！ 力ずくでも止めさせてやる……止めさせて見せる！」

私「上等！」

……その後、激しい拳と拳の語り合いの末、削除が決定されました。

（不適當な表現があったため、音声の一部変換してお送りしております）

（また、一部誇張表現が存在します。鵜呑みにしないでください）

ちなみに、友人達の他の感想はといえば……

「後書きがとても面白かった」

……では、次回をお楽しみに……

第四話（前書き）

間が開きすぎたので、ちょっと前回までのあらすじを振り返ってみる。

<これまでの？Destiny・Wars？は！>

「この剣は、いったい……」

森の中を進んでいたボルスは、一本の剣を拾う。

その剣は、彼の知る中は最も優れた業物であった。

「ファイアボール！」

そして、その剣を狙い突如襲ってくる盗賊達。

ボルスは辛うじて退けたものの、その代償は大きかった……

「俺の飯があああああああああ！」

……うん、こんな感じだった気がする（待て）。

第四話

「ただ今を持って貴様に謹慎を命じる」

男はそう言って一枚の紙を見せた。

ここは、一般の兵士達が寝泊りする兵舎の一室である。この部屋の住人である青年は朝早く起こされ、冒頭の言葉を言い渡されたのだった。

「理由をお聞かせ願えますか？」

青年は、普段とは打って変わって真面目に尋ねた。

もっとも、理由は察しが着くのだが。

紙を突きつけて来た男は溜め息を吐くと、

「パーシヴァル、貴様の凶行には目に余るものがある。まさか、ヴィルジニア卿の御子息に手を上げるとは……」

と、苦々しく吐き捨てた。

ヴィルジニア卿。この国の有力貴族にして、代々騎士団長の位を勤める家柄だ。

「城中でヴィルジニア卿から貴様のことを聞いた時は肝を冷やしたわ。御子息に一方的に暴行を加えたそうだな」

「お言葉ですが、私は一方的に暴行に及んだ覚えはありません。あれは、向こう側が……」

「言い訳をするな、パーシヴァル」

冷え切った上官の声。

「貴様がどう弁明しようと勝手だ。だが、一番の問題は貴様がよりにもよってヴァルジニア卿の怒りに触れるようなことをしたということ……貴様は事の重大さが分かったのか！」

次々と捲くし立てる上官の声を聞きながら、パーシヴァルは齒軋りする。

この男は自分が目を点けられるのが嫌なのだ。早い話が、自分の出世のために保身に走っている。そのために、事実を揉み消す。

一応、誰だって自分の身は大事だから、そのことを責めるわけにもいかないということは理解は出来る。ただ、それに嫌悪を覚えるのとは全く別の話だが。

だからこそ、パーシヴァルは黙って上官を睨み付けるだけに止めた。

「何だその目は？ 命令が聞けぬというのなら、さっさとここを出て行ってもいいんだぞ？」

それは暗に「軍を辞めろ」と言っているも同じだ。

思わず手を出しそうになったが、何とか自制する。

怒りに高ぶった感情を何とか沈め、パーシヴァルは上官の前に肩膝を着き、恭しく頭を垂れる。

「謹んで……拝命いたします」

上官が出て行った後、パーシヴァルはしばらく扉を凝視していたが、それを止めると寝巻きから着替えることにした。

今は夏なのだが、大陸北部に位置するこの国では、季節はほとんど関係ない。せいぜい雪が降るか降らないかの違いだけだ。要は、夏なのに肌寒い。

生憎、自分はこの辺りの出身ではないから、寒さに対して耐性を持っていない。

黒を基調としたアンダーウェアの上から厚手のジャケットを羽織る。色は濃い目の紫だ。

鏡で自分の格好を確認し、髪を整える。朝早くから叩き起こされたために、自慢の一つである黒髪が見事に跳ねまくっている。しかも、大分長くなっているから、梳かすのも一苦労だ。苦戦しつつも櫛を通し、滑らかに仕上げる。

「よし」

と、衣装棚近くの壁に立て掛けた湾刀に手を伸ばそうとしたところで、

（謹慎中に武装するのは避けるべきか）

と考えた。

謹慎を命じられた場合、原則として自室待機が求められた。当然、外出は控えるべきだが、素直に従うつもりは毛頭ない。

それどころか、パーシヴァルはこの謹慎を利用して久々に骨休めをしようと考え始めた。先程の上官の言葉を思い出すと、怒りを覚えな^いわけではないが、済んだことは仕方がない。今は、この休^レ暇^ヲを有意義に過ごすべきである。

そんなことを良く言えば前向き、悪く言えば楽観的に考えたパーシヴァルであった。

第四話（後書き）

一部の友人は後書きしか読んでないみたいですが、気にせず続けてみました。

< D・W 第三話作成秘話および裏話 >

第二話の前書きを読んでいた人は気付いたと思いますが、元々第二話と第三話は二つまとめて同じ話として更新する予定でしたが、あまりにも文字数が多かったので、分割しました。

実を言えば、第二話の冒頭と第三話の最後の文章は微妙にリンクしています。

第二話冒頭で、

「静寂に包まれた森の中――」

で始まり、第三話の最後で、

「静寂に包まれた森の中――」

で終わっています。皆さん、気付いていただけましたか？

これは、第二話の戦いのシーンで、盗賊の一人が焚き火に頭から突っ込んだシーンを書いていた時に、「そうだ！ 最後はこんなオチにしよう！」と考えた結果です（最後のボルスの絶叫は、ギャグのセンスが皆無な作者が必死に考えたネタでした）。

まあ、結局分割しちゃったんで誰も気付かず仕舞いだと思っていますが……

ちなみに、第二話のタイトルは「火炎」、第三話のタイトルは「魔装具」としましたが、分割前は当然「魔装具」で考えてました。しかし、分割後、一番困ったのはやはり第二話のタイトルでした。で、友人に相談したところ、こんなやり取りが……

友「そう言えば、第一話は『剣』だったっけ？」

私「そうだけど？」

友「うゝん、じゃあ、いっそのこと第一話の読み方を『ブレイド』にして、第二話のタイトルは『響k』」

私「言わせねえよ！」

……分かる人には分かる。

（注…この会話は事実に基づいたものです）

追記…サブタイトル変えちゃったので、今話の後書きはあまり意味のなさないものになりました。ご了承ください。

感想、意見等心よりお待ちしております。

第五話（前書き）

大学の夏季休業も、あと二週間程で終わり。

……風邪引いたり、利き手火傷した自分が悪いけど、あまり進めること出来なかったなあ……

第五話

平民街の一角のとある店に着くと、すでに初老と思える男性が、店開きのための点検を行っていた。

初老とはいっても、そのことが確認できるのは、白髪が半分混ざった短い髪だけだ。夏でも肌寒い地域に店を構えているのにもかかわらず、長袖を捲り上げてあるその腕は、岩の如きゴツゴツとした分厚い筋肉で覆われている。初見の人間は、必ずや彼の職業を聞けば耳を疑うであろう。

実際に、パーシヴァルは初めて会ったとき、子供達が読む冒険譚の戦士が現世に現れたのか、などと思ってしまった。

彼は、パーシヴァルが店の入り口に立つと、

「聞いたぞパーシヴァル、お前めえ謹慎になったらしいな？」
と、聞いてきた。

店先に顔を出して第一声がこれだ。こういった噂は予想よりも早く広がるようだ。

「……おやつさん、その情報の出所は？」

「んなもん聞いてどうすんだ？」

「そういった流言出す奴つてのは、時々他の国からの間諜かんちようだなんてこともあってね。下手したら国内で反乱なんかを誘発することもあるし、怪しいところは片っ端から潰しとかなないと後が怖いんだよ」

ま、謹慎は事実だけど、と付け加えパーシヴァルは店の中に入った。

奥の作業場から伝わる熱気のおかげで店内は暑く、額に薄っすらと汗が浮かぶほどだ。熱の他にも律動的に槌で叩く音や刃を研ぐ音が響いてくる。

ちょうどそこに、パーシヴァルと同じ年代の男が剣や湾刀を数本抱えて来た。それらの刃は店内に入る陽光を鈍く反射し、出来立てであることを窺うかがわせる。

その男は、パーシヴァルの話を聞いていたか、

「今朝研ぎ上がった剣を受け取りに来た兵士が言っていましたよ。どうやら城の方でも結構話題に上がってるようですぜ」

と、教えてくれた。

「ただ、あの何とかって貴族の方はまったく罰せられなかったようですぜ」

そのことは、あの上官の言い方から大体予想が付いていたことだ。しかし、予想してなかったのか、店頭で品物を並べていた親方が、「ちょっと待て！　なんでそいつだけ罪になんねえんだ？」と尋ねてきた。

「まあ、貴族の特権って奴っスよ」

「ふざけんなよ。そもそも街中で喧嘩だ何だって騒ぎ起こしたら身分問わず両方罰す、つてのがお上の定めた法じゃねえか。それをなんだ、貴族だ何だって勝手に捻じ曲げやがって！」

「親父、あっちは喧嘩じゃなくて一方的に殴られたって言ってるそうだ。だからあっちの主張じゃ、パーシヴァルさんだけが罪人だ。法を犯したことはないなんねえとよ」

「フォラーズ！　お前は城の連中の方を持つってのか！」

「んなこと言ってねえだろ。だけど、俺ら下々の人間が騒いだって、あっちは意に介さんだろうよ」

言い合いを始めた親子の会話が、徐々に険悪になり始める。

「まあまあ、おやつさんもフォラーズも落ち着けて。別に俺はそこまで深く気にしてないから……」

さすがに、これ以上は不味いと思い、パーシヴァルは二人を止めた。

だが、親方の方は憤懣ふんまんやる方ないようで、

「お前はそう言うがな。パーシヴァル、俺あ情けなく思うよ。貴族だ何だつって事実捻じ曲げてよ、罰受けなきゃいけねえ奴を野放しにしておいて、お前だけ罰受けるなんざ馬鹿げてやがる。そんなの悪党以下だ。そんな世の中が、俺あ悲しい」

最後の方は弱々しい声で呟き、親方は悄然と肩を落とす。まるで自分のことのように嘆き、心配してくれる親方の心が、パーシヴァルは嬉しく感じた。

完全に手を止めてしまった父親に代わり、フォラーズが店頭に品物を並べている。

すると、フォラーズが突然パーシヴァルらと呼んだ。何事かと顔を向けると、フォラーズは通りを見ながらニヤリと笑みを浮かべ、「世の中、まだまだ捨てたもんじゃないぜ」と言った。

パーシヴァルは首を傾げながら通りに目を向けると、女性が女の子の手を引いて歩いてくる。二人とも地味な色合いの簡素な服装——もっとも、大陸北部特有の寒冷な気候から、厚めに重ね着はされているが——をされていて、貴族街から程遠いこの地域を歩いていることから、平民であろう。二人の顔にパーシヴァルは見覚えがあった。

パーシヴァルが店先に立つと、その姿に気付いたか、彼女らは足早に駆け寄り、

「先日は娘が危ないところを助けていただき、ありがとうございますました」

と、深々と頭を下げた。一緒にいた女の子も舌足らずながらも「ありがとうございます」と言って頭を下げる。

パーシヴァルは慌てて、

「頭を上げてください。俺はそんな礼を言われるようなことをした覚えは——」

「いえ、貴方は娘の恩人です。あの時、貴方が通りかからなかったら、娘はどうなっていたことか……」

「いやいや、そんな大げさな……」

と、パーシヴァルは頭を掻きながら、隣に立っている少女へ視線を移す。

すると、女の子はパーシヴァルを見上げながら微笑んだ。

パーシヴァルも笑みを浮かべ、膝を曲げると目線の高さを女の子に合わせた。

「君、名前は？」

パーシヴァルは少女の頭を撫でる。

「ソフィア」

「ソフィアちゃんか。もうあんな怖いおじさん達に近づいちゃ駄目だぞ」

「うん、おじちゃん」

「おじちゃん、じゃなくてお兄さん、だ」

苦笑しつつ、修正してあげていると、後ろからフォラースが、

「この子、将来きっと美人になりますよ」

と言った。

「何、本当か！」

パーシヴァルが思わず声を上げると、

「この子の顔立ちは母親に似かよったものがありますからね。母親も中々の美形ですし……」

と、なんとも心躍らせることを言うではないか。

少女の顔と母親の顔を見比べてみる。確かに、大きな瞳や、小ぶりでスツと通った鼻筋などは母親の面影がある（一方の母親の方は、フォラースの物言いに照れている）。

毎度のことながら、フォラースは自分が気付かないところに着眼点を置くものだから、いつも驚かされる。

「そっか、だとしたら十年もしたら——グエツ！」

突然、パーシヴァルの頭に鋭い痛みが走った。それと同時に、頭が上に引っ張られるような感覚——いや、実際に引っ張られているのだ。その力に逆らうことが出来ず、しゃがんでいたパーシヴァルの腰と膝が伸びていく。

立ち上がりながらも首を捻り、背後を覗けば、まず見えたのが厚い筋肉に覆われた太い腕と、その向こうで爛々（らんらん）と眼光を放つ目——間違いなく親方のものだ。

「こんな時まで、ナンパのことを考えるな！」

たぶん、親方が頭を掴み上げているであろう手に力を込めたのであろう、両側のこめかみの辺りに金鋏かなばさみで挟んだような圧力がかかった。さらに恐ろしいことに、身体全体がびしっと伸び切った状態で、足が地面から離れ、浮き始める。

「ちょ、親父それ以上は不味いって！」

フォラーズが止めに入ったようだが、肝心の親方は開放する気配がない。

仕方がなく、パーシヴァルはある事実を親方に教えることにした。

「なあ、おやつさん……」

「なんだ？」

「ソフィアちゃんが怖がってんだけど……」

それを聞いた途端、親方は即座に手を放し、パーシヴァルは尻を思いつきり地面に打ち付けた。

母親の方は呆然と、女の子の方は完全に怯えて母親の足を掴んでいた。よっぽど親方の形相が怖かったと見える。

さすがの親方もそのことに気付いたらしく、気まずいといった感じで、

「いけねえ、驚かせちゃったようだな……すまねえ」

と謝り、

「まあ、こいつにこれ以上の礼はいらんよ。というより、これ以上いたら、娘さんにより質たちの悪い虫が付く」

と、パーシヴァルからすれば、なんとも自分の人格を疑われるようなことを言って親方は締め括くくった。

おやこ
母親がその説明に納得したかどうかは分からないが、最後に「本当ありがとうございます」と母親が再び頭を下げ、娘の方は「バイバイ」と手を振って、二人は店先から去っていった。

とりあえずパーシヴァルは手を振り返し、未だにクラクラする頭を抑えながら立ち上がる。

「さて、仕事に取り掛かるぞ。今日中に仕上げんといかん品もある

しな」

親方が作業場へ入っていくと、フォラーズがパーシヴァルの様子を見て、

「大丈夫か、パーシヴァルさん？ 親父も容赦ようしゃつてもんを知らねえし、今日のところは帰って休んだ方がいいんじゃない？」

と、心配そうに声を掛けてきた。

「いや、大丈夫だよ。慣れてるし……」

「そうっすか？ じゃ、作業服はいつもどこにあるんで、お願いしますわ」

「任せろって」

そう言っていると、パーシヴァルは一回背伸びをし、

「じゃ、本職が休みな分、精々働くかね」

と呟き、作業場へと向かった。

第五話（後書き）

今回は、製作秘話および裏話を休載します。

代わりに、ようやくこのサイトでの投稿も慣れてきたので、梅院暁という人間について少し分かって頂こうかと。

実を言いますと、今書いている小説「Destiny・Wars」はブログで書いていたものをリメイクして載せているんです。

以前後書きに書いたとおり、元々「Destiny・Wars」という作品は、「RPGツクル」というソフトでRPGとして作っていました。

あるとき、友人から「携帯のホームページの自由投稿コーナーで、そのRPGを小説化してみないか」と言われ、早速書いてみました。しかし、自由投稿コーナーなので、他の人が面白おかしく作り変えた偽物などを載せたためにかなり困ったことになりました。

そこで、自分でブログを作り、書き始めました。今から、五年ほど前のことです。

ただし、小説の書き方なんかをちゃんと勉強したわけではないので、お世辞にも私の文章能力は良いとは到底言えるものではありませんでした。

でも、途中で投げ出すのも良くないと思い、書き続けてました。その成果か去年の頃には、少しだけ文章力は上がっていたものの、ここで困ったのが過去に書いた話です。

よくよく読み直してみると、話に矛盾が出来ていたりして、書き直したい、という欲求に駆られました。

しかし、書き直そうにもすでに百話を越えていたために、簡単に書き直せるはずがなく、途方に暮れながら無駄に話を書く日々が続いていました。

そんなとき、この「小説家になろう」サイトに出会い、「そうだ、文章のおかしなところや物語の矛盾点を直してこっちに載せよう」

と考え付いて、早速登録して書き始めました。

今までちゃんと設定してなかった世界観や登場人物などの設定をし直し、パソコンで書く前にノートに書いてから推敲して載せるというやり方で、今まで以上に時間を掛けて、この「Destiny Wars」という作品を作ることに情熱を注いでいます。

とはいえ、まだまだ未熟なところが多いので、温かい目で見守ってもらいながら、時には意見等を下さると嬉しいです。

長くなりましたが、これからよろしく願います。

P・S マイページの方に、一応ブログで書いたものをリンクしておきました。もっとも、最近はごくごく偶に日記を書いてるだけですが……

第六話（前書き）

昨日、私は二十歳を迎えました。

昨日中に更新しようと頑張ったのですが……何故か書けば書くほど切りのいいところに辿り着かず、気が付いた時には、八千字を越えてました（てへっ♪）。

でも、よく考えたら、第四話と五話が結構短めだったので気にしないことにしました。

第六話

「よし、これが終わったら休憩にするぞ。気合を入れろ！」

親方の掛け声に「おうっ」と短く答え、パーシヴァルは両手で持つ槌を頭上まで高く振り上げた。

パーシヴァルの身長程もある長い柄の先に円柱状の鉄塊を付けたそれは、慣れない者が扱うと重心を上手く取ることが出来ず、振り回すのもままならない。

しかし、長年触れ続けてきたパーシヴァルにとって、それはすっかり手に馴染んだものだった。左足を前に出し、どっしりと両足を固定して上半身を支える。

親方が炉に金鋏を突っ込んだ。燃え盛る炎の中から取り出されたものは、真っ赤に発光する直方体の物体。その正体は、炉の中でずっと熱されていた鉄塊だ。

親方は左手に持つ金鋏で掴んだままの素材を金床の上に運び、右手に金槌——こちらは、片手で扱える大きさである——を握り締め、「叩け！」

と、命じた。

パーシヴァルは勢いよく槌を振り下ろした。金属同士が衝突し、高い金属音を響かせながら火花を散らせる。

パーシヴァルの腕が上げられると、すぐさま親方の槌が数回、金属を叩く。親方が叩き終えたときには、すでにパーシヴァルは先程とまったく同じ姿勢に戻っていた。再び槌を振り下ろし、親方がさらに金属を叩く。

何度か同じことを繰り返すと、高熱の中でも直方体を保っていた金属の形状も少しずつ変形していく。薄く、細長く、そして先端は鋭く。

形が整うと、親方は叩くのを止めて、張った水の中に金属を入れた。熱してあった金属は急激に冷却され、逆に水が熱されて蒸気が

発生する。

あとは、出来上がったものを砥石で砥ぎ、刃を形成するのだ。ただし、金属から完全に熱が抜けるまでに時間が掛かるので、今のところ作業はここまでである。

パーシヴァルは槌を床に下ろし、頭に巻いている布を取った。布の中に収まっていた黒髪が下ろされ、炎が反射して橙色に光る。額の汗を布で拭^{ぬぐ}うが、作業場は熱気に包まれ、立っているだけで次々と汗が流れてくる。

「よし、先に昼飯済ませるぞ」

道具を整理していた親方が宣告し、立ち上がった。

二人が作業場から出ると、すでに何人かの職人達が食べ始めている。彼らは二人の姿を認めると、「お疲れ様です」「先に頂いてます」などと言って出迎えた。

パーシヴァルが定位置に座ると、料理が並べてあった。料理とはいっても、少し硬く焼かれたパンとチーズ、そしてカブやニンジンといった野菜を干し肉と一緒に煮込んだスープという簡素な内容だ。とはいえ、味は決して悪くなく、むしろパーシヴァルは結構気に入っていたりする。

料理を口に運んでいる間、職人衆から今回の謹慎についていろいろ聞かれた。

「そういや、この間の喧嘩が原因なんだって？」

「まあね」

と、パンを千切って口に放り込む。

「でも、相手の方は特に何も言われてねえらしいじゃねえか。おかしくねえか？」

「それがよ、そいとお偉い貴族の息子らしくてな。父親に泣き付いてもみ消してもらったらしいぜ……なあ、パーシヴァル？」

「そこまでは知らないよ。ま、可能性としてはありだけどな」と、スープを啜^{すす}る。

「だとしたら、そいつは随分な腰抜けじゃねえか。てめえでやった

ことぐらい、てめえで責任持てよ」

「それに親も問題ありだぜ。自分のガキ甘やかしてんじゃねえよ」

職人衆が言い合う中、パーシヴァルはのんびりとチーズをかじる。

「なあ、いつそのこと軍なんか辞めて、本格的にこっちで働かねえか？」

突然の言葉に、パーシヴァルは驚いて食べる手を止めた。

「そうだぜ。筋は良いんだしよお、あんなとこ辞めちまえよ」

パーシヴァルが何かを言う前に、

「馬鹿野郎ども！ そんな半端なことではこの仕事が出来ると思ってるのか！」

と、親方が怒鳴りつけた。

「で、でもよお、パーシヴァルの熱意も腕前も本物だぜ」

「そうだよ。軍隊なんかで報われることなく働くぐらいなら、こっちで身を立てた方が……」

職人達が言い返すものの、

「でもも、しかしもあるか！」

いいかお前めえら、こいつ（パーシヴァル）の本職は金床で鉄相手に槌振るうことじゃねえ、戦場で剣振るうのがこいつの仕事よお！

そいつがいきなり職人に鞍替え出来るもんか。住む世界が違わあ、そのことを忘れんじゃねえ！」

住む世界が違う……その言葉にパーシヴァルは頭をがつん

と殴られるような衝撃を受けた。

「さあ、お前めえらいつまでダラダラ飯食ってんだ！ とっとと食って仕事に取り掛からねえか！」

その声に慌てて職人衆は残りを平らげると作業場に戻っていった。フォラーズはパーシヴァルに気遣わしげな目線を送ってきたが、

「……店の様子見てくるわ」

と言に残し、店頭へ向かった。

親方とパーシヴァルの二人だけがその場に残った。

パーシヴァルも作業場に向かおうと立ち上がると、

「すまねえな」

と、親方がポツリと漏らした。

親方の方を向くと、バツが悪そうに俯いていた。

「気にしてないですよ」

本当のことだ。第一、親方の言葉が間違っているわけでもない。

それでも親方は、

「あいつらはお前の^{めえ}実力を認めている……いや、実力だけじゃあないな。皆、お前の^{めえ}ことを本当に仲間だと思ってる」

と、ここで親方は一旦言葉を切ると、

「だがよお……仮に軍辞めて、それがお前^{めえ}にとって本当に良いのかと思っちまってよ。」

なあパーシヴァル、覚えてつか？ 八年も前だったか……お前^{めえ}が初めて弟子入りしてえって俺のところに来たとき、俺が言った言葉をよ……」

パーシヴァルはすぐに思い出した。

その頃は、まだ故郷を離れていなかった。母も生きていたし、二歳年下の弟が父から剣術を習っている横で、自分も木刀を振っていた。

しかし、いつからだろうか、剣術よりも、剣そのものに興味を持ち始めた。いったい、どのようにすれば、あの流麗な形状と、宝石すら霞^{かす}ませる輝きを放つ刀身が出来上がるのか——十歳になったばかりのパーシヴァルはそのことばかりを考えていた。

初めて剣を打つ光景を見たとき、まだ精神的にも幼かった自分はまだ圧倒された。槌で熱した鉄を叩くだけであの形を生み出すことに驚き、見入った。槌を振るう動作を見てるだけで、あつという間に一日が過ぎ去った。鍛冶職人になりたいのだと、真剣に思ったものだ。

そのことを訴えると、今まさに自分の目の前にいる人間は言ったものだ。

パーシヴァルは、覚えていたその言葉を唱えるように口に出す。

「人には天が定めた生き方がある。鍛冶職人の子は鍛冶職人に、騎士の子は騎士に、それが天の定めた道……」

「覚えていたか。パーシヴァル、お前が本当にこの道で生きていくってんなら俺あ止めん。だが、俺は常日頃から思ってたんだよ……お前をこんなちっぽけな鍛冶屋の職人として、一生を終わらせちゃまわいいのかと。こんなところに閉じ込めて、お前の才を、器を潰しちゃまわいいのかと……」

「……買いかぶり過ぎですよ、おやっさん」

そう言いつつも、パーシヴァルは内心では親方の言葉を嬉しく感じていた。

それと同時に、圧迫感を。

この世界中どこを探しても、自分にここまでの期待を寄せてくれるのは、きつと親方だけだ。父だってそんなことを言わない……いや、言うはずがない。そのことが、パーシヴァルの心に重く^の押し掛かる。その重圧が、自分に知らしめる。

自分は、誰かの期待を受けていい人間ではないということ。

そう、自分は――

「何しやがる！」

店先で悲鳴が上がった。

パーシヴァルはその声に我に返った。

パーシヴァルと親方の二人が店先に出ると、店頭に並べてあった刀剣が床に散乱していた。そして、フォラーズが、左肩を押さえている。

彼の近くに落ちていた剣の先端が赤く染まっていた。

「おい、大丈夫か！」

同じように先程の声を聞きつけたか、奥から職人達が出てきた。

「へえ、掠り傷でさ……」

フォラーズの声は弱々しかった。顔も、苦痛に歪んでいる。

「誰がこんな真似を……」

パーシヴァルが店の外に目を向けると、四人の男達が立っていた。彼らは見て分かるほどに上質な布で出来た服を身に着けていた。どれもこれも派手な色に染められており、その上羽織っている防寒用のコートは間違いなく毛皮だ。ここまで金のかかる格好の出来る人間など、そう多くはいない。

「こんなところにいたか、パーシヴァル」

相手が自分の名前を呼ぶことに、パーシヴァルは一々驚かなかった。何故なら、自分も相手を知っているからだ。

「てめえ、よくもフォローズを！」

職人の一人が殴りかろうとするのを、「よせ」とパーシヴァルは片手で制した。

「ヴィルジニア卿……でしたっけ？ 何のつもりでしょうか？」

パーシヴァルは口調だけは丁寧にし、この国の有力貴族の御子息とやらの聞いた。

「惚^{とほ}けんなよ……この間、貴様に付けられた傷がシクシクと痛んでなあ」

と、ヴィルジニアは自分の右頬を指差した。そこが微かに赤みを帯びている。

数日前、パーシヴァルが殴った箇所だ。

「私が悪いとおっしゃるんで？ ご冗談を。私は罪無き民に乱暴を働いた暴漢どもを成敗したに過ぎません。いわば、一兵士の務めを全^{まっ}うしたまで……どこに責められる理由があるのやら」

パーシヴァルは鼻で笑い飛ばしてやった。当然、連中に示してやる敬意など持ち合わせてなどいない。

すると、ヴィルジニアの周りの男達が、

「貴様、無礼であろう！」

「その格好で兵士の職務を語るなど笑止！」

「第一、貴様謹慎中であろうが！」

と、罵詈雑言を浴びせてきた。

パーシヴァルは作業をするにあたって黒いズボンと長袖の白いシヤツに着替えていた。理由は簡単、火を使うために煤すすなどで汚れるからだ。

「それに貴様、罪無き民だと？ 暴漢だと？ 戯言ざれごとを言うな！

あのガキはなあ、事もあるうにこちらのヴィルジニア殿に狼藉を働いたのだぞ！ 我らが罰して何が悪い！」

パーシヴァルは思わず絶句した。もはや、上辺だけの敬意など込める気にもならない。

「……偶然ぶつかっただけの、年端もいかない子供に、あんな仕打ちをするのか！」

——数日前、パーシヴァルが市街地の見回りの合間に親方を尋ねた際、この男が五歳くらいの少女を突き飛ばしているのが目に入った。さらに驚いたことに、この男は剣を抜いたのだ。母親が急いで駆け寄り謝罪をしたが、ヴィルジニアはそのことを意にも介さずに、なんと母親ごと少女を斬ろうとした——

「当然だ！ 僕は貴族だぞ！ それをあの下賤げせんなガキめ……この僕に、この偉大な僕に対してあのような……決して許されるものではない！」

ヴィルジニアがヒステリックに叫ぶのを聞き、パーシヴァルは呆然とした。立ち直ったときには、暗い思念がパーシヴァルの内に宿った。

この男の理不尽さに対する憤りと……明確な、殺意。

この男は今なんと言った？ 許されるものではない？ なら、こいつのしたことは許されることとでもいうのか？ 許しを請う相手を……それも、子供を斬ることが当然だと？

視線を巡めぐらすと、フローーズが傷の手当を受けているのが見えた。その周りに散乱している刀剣も。きつと、こいつらが刀剣類を置いた台を引っくり返し、それがフローーズを傷つけたのだ。そのこと

を考えると、さらに怒りが増す。

「ふざけるな！」

パーシヴァルは思わず叫んでいた。その一言に込められた怒気に、取巻き達が一瞬怯んだが、当のヴィルジニアは、

「黙れ、貴様も同罪だ！ 我が剣の錆さびにしてくれる！」

と、腰の剣に手を掛けた。

いつの間にか店を囲むように集まっていた野次馬達が騒ぎ出した。パーシヴァルも腰に手を伸ばしたところで、今帯刀してないことに気付いた。

「おいおい、そんな無体が通るとでも思ってたのかよ」

パーシヴァルの背後から、親方が声を張り上げた。

「何だと？」

「頭冷やしてよく考えろよ……元はといやあ、お前めえさんが街中で剣を振り回そうとしたのが原因じゃねえか。どんだけ言い繕つくろっても、そのことは変わんねえよお」

「ええい、部外者が余計な口出しをするな！」

「部外者、ねえ……いいか、その耳かっぽじってよく聞きやがれ、世間知らずのクソガキども！」

突然響き渡った大声に、ヴィルジニアやパーシヴァルはおろか、野次馬も押し黙った。

「お前めえらが剣抜いたとき、近くにはパーシヴァル以外の兵士も何人かいたさ。だが、皆が皆てめえが貴族って事を知ってて手を出そうとしなかった……こいつも、そのことを知ってたはずだ。手え出そうものなら自分も上からお叱りを受けるかもしれねえってことも！ それでも、こいつは助けることを選んだんだ！ 自分の身がどうなろうとも、目の前で殺されそうになってる人間を助けたんだ！」

それに比べて、てめえはどうだ？ てめえの親に泣き付いて、てめえの罪を帳消しにしたはかりか、ただ人間として当然のことをしたこいつを謹慎に追い込んだんだ！ 恥ずかしいとは思わねえのか！」

その言葉を聴き、パーシヴァルは幾分か胸の空く思いになった。逆に相手は顔を紅潮させ、

「おのれ、許せん！　まず、貴様から血祭りに上げてくれるわ！」と、ついに剣を抜いた。

だが、親方はそれに臆することもなく、

「ほう、俺を斬るってか、面白おもしろえ！　だがな、俺を斬ったところで青い血なんぞ出ねえよ。俺の身体にゃ赤い血しか流れてねえんだ！

さあ、それでも斬るなら斬れ、斬りやがれ！」

と、啖たんか呵を切った。

助勢のつもりか、他の職人達が槌や剣を持って親方の周りを固めた。

先程の親方の言葉で、冷静さを取り戻していたパーシヴァルは慌てて両者に割って入る。

「よせって、おやっさん」

「止めるな、パーシヴァル！」

「止めにも入るって。こいつらは俺に突っかかってきたのに、おやつさんに叩き殺されたら可哀想だろ！」

一瞬、辺りが静まり返った。

「……何だと？」

「おいおい、お前俺を心配したんじゃねえのか？」
「ヴィルジニアと親方が同時に言った。」

「まさか、むしろ心配なのは向こうだよ」

そう言ってパーシヴァルはヴィルジニア達の方を指した。

「待て、貴様どういう意味……」

「黙ってろ！　あんたらの命が助かるかどうかの瀬戸際なんだよ！」
「なおもパーシヴァルは親方を説得しようと言葉を紡ごうとした。そこに、」

「数々の侮辱、もう許さん！」

と、取巻きの一人が剣を抜くと、大上段に構えて斬りかかってきた。

パーシヴァルもまた動いた。両手で相手の右手首と左の二の腕を掴むと、左足で相手の足を払う。

パーシヴァルが手を放したときには、相手は宙を舞い、やがて陳列棚に衝突した。

それを見たパーシヴァルは「あちゃー」と頭を抱え、

「す、すまん、おやっさん、店が……」

「気にすんな。暴れるんなったら、存分にやれ！　もし軍辞めさせられたら俺が責任持って鍛冶職人にしてやる！」

と、親方が鞘に納まったままの湾刀を投げた。

「そいつは心強いことで！」

パーシヴァルは右手で受け取る。

この刀は大陸南部地方でよく使われている種類のもので、柄頭が刀身の反りとは真逆の方向に曲がっていた。その地域の言語で「獅子の尾」を意味するシャムシールと呼ばれる。大陸共通語では、「シミター」という名が一般的だ。

パーシヴァルは右手で鞘を握った状態で、左手を柄に添えた。

また一人、剣を構えて突っ込んできた。

振り下ろされると同時に、数センチほど刀を鞘走らせ、その斬撃を刀身で受け止める。刃同士が激突し、火花が散った。

パーシヴァルは相手の脇腹を蹴った。相手が数歩下がり、そこへ湾刀シミターの柄頭で殴りつける。「獅子の頭」と呼ばれる、独特な形の柄の先端が、見事に相手の右頬を捉えた。何かが碎ける湿った音がし、殴られた相手の口から白いものが飛んだ。折れた歯であろう。

そいつが腰碎けに倒れるのを見届けず、パーシヴァルはもう一人の方へ間合いを詰めた。

その男はパーシヴァルの接近に焦って剣を振ろうとしたが、その時にはパーシヴァルの刀が足を払っていた。倒れた男の鳩尾みぞおちに鞘尻を突き出すと、

「くえっ！」

と、男は奇妙な悲鳴と共に気絶した。

これで、取巻きは全て始末した。あとは、ヴィルジニアただ一人

——
そう思ったとき、聞き慣れた文句が聞こえてきた。

「冷たき痛みを、彼の者に与えよ！」

少し離れたところで、ヴィルジニアがこちらに右手を向けている。その手首には宝石の嵌め込まれた金属製の腕輪——魔装具が嵌められ、その周りでは三つの結晶が浮かんでいた。それは徐々に膨張している。

——こんな街中で、魔術を使う気か！

詠唱の内容から判断すると、肥大化を続ける結晶の正体は、空気中の水分を集め、凝縮し、凍らせて作った氷だ。

そして、詠唱を終わらせたヴィルジニアが、コマンドワードを発する。

「？アイスニードル？！」

ヴィルジニアの周りに浮かんでいた氷の塊が、真っ直ぐにパーシヴァルに飛んできた。針ニードルという名前だけあって、先端が鋭利に尖っている。ただし、大きさは短剣ダガー一本分に等しい。

三本とも一直線に向かってきているために、避けるのは容易である。しかし、もし避けようものなら、自分の後ろの人間に被害が及ぶ。

パーシヴァルは即座に覚悟を決めた。避けることを完全に放棄する。

ヴィルジニアの顔が歪んでいた。どうやら、このことを計算して放ったらしい。

パーシヴァルは湾刀を勢いよく鞘走らせると、一本目を弾き飛ばした。キーン、という甲高い音が空気を振るわせる。

だが、一拍遅れて二本目、三本目が迫る。刀を握った左手を振り切ったために、普通なら反応出来ずにここで残りの二本に貫かれる。相手もそう思ってるはずだ。

——最後まで自分の思い通りになると思うな！

パーシヴァルの右腕が動いた。右手首が捻られ、握られていた鞘が二本目を叩き落す。

さらに左腕が動き、眼前にまで迫った三本目を寸前のところで、柄頭で横から叩く。冷たき針が、その一撃で粉々に砕けた。欠片のいくつかがパーシヴァルの顔を掠る。

ヴィルジニアの目が驚愕に見開かれた。

周りも肅として物音一つ立てるものはいない。

パーシヴァルは刀を鞘に納めると、左の掌を^{てのひら}ヴィルジニアに向けた。

「お返しだ」

そう言ってパーシヴァルは詠唱を始める。

「大気に潜む清廉なるものよ、我が意志に応え、彼の者に冷たき痛みを！」

魔力を込めながら、パーシヴァルは想像する。冷たく、透明な刃が相手を貫く光景を。

空気中の水分が集まり、一本の細長い結晶を形成し始めた。今、パーシヴァルは魔装具を持ってないため、どれだけ詠唱しようと大した大きさのものは作り出せない。

——それでも、十分だ。

今、パーシヴァルの左手の前には、一本の針が出来上がっていた。針と言うには大きく、太いが、先程放たれたものよりも二回りほど小さい。

パーシヴァルはゆっくりと左手を動かし、目標に狙いを定め、コマンドワードを発する。

「？アイスニードル？！」

放たれた棘は目標に向かって凄まじい速度で飛び——ヴィルジニアの右太股に突き立った。

「ぎ、ぎゃあああああ足が！ 僕の足があああああ……」

啞然としていて、氷の針が自分に向けられていることも意識しなかったヴィルジニアは絶叫した。痛みには耐えかねないようで、地

面をもんどり打っている。

「おい、何だこの騒ぎは！」

そこに、野次馬の列を掻き分け、二人の兵士が駆けつけて来た。どうやら、見回りの最中だったようだ。

パーシヴァルが何かを言う前に、足を押さえて蹲うずくまっていたヴィルジニアが、

「僕は、パスメノス・ヴィルジニアが一子、アフティだ！　その乱心者を捕らえろ！」

と、パーシヴァルを指し示しながら命じた。

「何があったのですか？」

兵士の一人が尋ねた。

「その男はパーシヴァルといって、今は謹慎してるはずの兵士だ。だが、何を考えたかその店で暴れ、拳句に職人の一人に怪我を負わせた！　それだけじゃなく、止めに入った我々に対し、刀を振り回して抵抗し、恥ずかしながら為す術すべなく斬られた！　このままではどれだけの被害になるか分かん！　早急に捕らえよ！　無理ならば斬り捨てよ！」

どの口からそんな言葉が出てくるのか、全ての罪をパーシヴァルに押し付けようとしていた。

パーシヴァルが呆れていると、兵士の一人が、

「武器を捨てて投降しろ！」

と、剣を抜いた。

——あんな出鱈目でたらめを信じたのかよ！

パーシヴァルが絶句していると、

「聞こえないのか！　武器を捨てろ！　さもなくば斬る！」と、宣告してきた。

「おいおい、ちょっと話を聞けって……」

パーシヴァルが一歩進むと、

「ええい、抵抗する気か！　已やむをえん、斬り捨てるぞ！」と、もう一人も剣を抜いた。

「ま、待て、俺の話を……」

「問答無用!」

兵士二人が、今まさに斬りかからんとしたとき、

「その勝負、待った!」

と、野次馬の中から声が上がった。

第六話（後書き）

今回の話、恐ろしい文字量になったし、後書き休んでもいいよね？
答えは聞いてn……え、前回休んだから駄目？　そうですか……

< D・W 第四話、第五話作成秘話および裏話 >

……とは言っても、今回書くことはこれくらいです。

友人曰く、「パーシヴァルはロリコン」

友人曰く、「おやっさんはモブキャラ」

感想、意見等お待ちしております。

第七話（前書き）

すっかり間が開いてしまったので、前回までのあらすじを振り返ってみる。

<これまでの？Destiny・Wars？は！>

「その剣をよこせえ！」

深い森の中で、ボルスが手にした一本の剣。
その剣を狙い、襲撃者達がボルスを襲う！
辛くもその剣で襲撃者を退けることに成功するが……

一方、北のとある一国にて――

「ただ今を持って謹慎を命じる」

突如、パーシヴァルに突きつけられたのは身に覚えの無い罪に対する罰であった。

憤然とするものの、結局はその要求を受け入れるしかないパーシヴァル。

しかし、これは上級貴族たちによる陰謀の一端に過ぎなかった。

第七話

ザミエル帝国——グラン大陸北部の大部分を支配するこの国は、軍事大国としてその名を大陸全土に轟かせている。

一年の大半を氷雪で閉ざされる北部地方は、土地が痩せ、ほとんど作物が育たない。そのために、そこに住む人々は鍬や鋤の代わりに剣を、槍を手にとった。

食べる物を、住む場所を求め、略奪してはまた奪われる。いつしか、雪と氷だけの大地を戦火が覆った。力のある者は豪族となり、あるところでは民族として団結し、小さな国が生まれては消えていった。

そのような戦が何十年、何百年と続く中——ザミエル帝国は誕生した。

「これからどうすっかなあ……」

帝都リョートの大通りにて、ボルスは途方に暮れていた。

数年前から着たきりとなっている青い革鎧レザーアーマーの上から、買ったばかりにもかかわらず早くもボロボロになったマントを羽織り、右肩から斜め掛けにしたソードベルトが、背中に愛用の剣を固定している。左肩には、旅の荷物とボルスの身の丈ほどもある包みを一括りにして担いでいた。

「はあ……」

ボルスは何度目になるか分からない溜息を吐いた。夏だというのに、冷たい空気のおかげか口から出る息は白い。

森の中での戦いから一週間経っていた。辛くも盗賊を退けることには成功したものの、受けた被害は決して小さくはなかった。

せっかく剥ぎ取った毛皮は、盗賊の放った魔術によって焼け焦げてしまった。さらには左手に受けた火傷も、深くはないが、じわじわと痛みを放ってくる。森を出てすぐの村で休むことを余儀なくさ

れた。怪我のせいで働くことも出来ず、宿で静養する日々が続いた。その結果、路銀が底を着き始めた。痛みは退いてきたものの、力仕事するほどには回復してない。ボルスは、別の仕事を求め、別の街に移動することにした。

しかし、帝都に着き、仕事を探したものの、自分のような流れ者を雇ってくれるようなところはなく、現在に至った。

ボルスは財布の中身を覗いた。大小合わせて銅貨が十数枚。苦勞して加算してみれば、合計百数十ザランといったところか。旅はるか、今日の宿も怪しい。

旅に出てからというものの、いつも問題となるのは路銀だ。

ボルスが路銀を稼ぐ方法は大きく二つ。

一つは、訪れた村や街で日雇いの仕事を探して引き受けることだ。ただ、職人が持つような専門的な知識を持たないボルスにとって、出来る仕事は限られ、報酬も極々僅かなものである。

そこで、もう一つの手段だ。自分の剣の腕を買ってもらう……つまり、傭兵として自分を売り込むのだ。これまでに多くの豪族や自警団に雇われては、領地を巡っての争いや盗賊の討伐、獣害をもたらず獣の駆除といった仕事に参加してきた。

当然のことながら、命の危険というものが常に付きまとう。だが、それに対する見返りも大きい。報酬だけでなく、宿や食事を貰えることが多かった。命の保障を度外視すれば、ある程度は安定した生活が出来る。

しかし、ボルスはあまり一箇所に長く留まらなかった。そういった性分、ということもあるのだろうが、他にも理由はある。とにかく、ボルスはある程度纏まった路銀を稼ぐと、隊を抜けて旅に出る。そして、新天地で仕事を探し、雇われ、稼いではまた抜ける。彼の旅はその繰り返しだった。

ボルスは思う。自分がやっていることは、つまるところ金目当てに人殺しをしているのに等しいのではないのか。依頼を受け、戦場で人を斬り、金を受け取る。依頼を受ける部分さえなければ、本質

的には、誰かを傷つけ、その人の財産を奪っていく盗人と、なんら変わりはないのではないか――

そこまで考えたところで、ボルスは自分の手が背中中の剣に伸びかけていたことに気付いた。首を振って必死にその甘い誘惑を追い出そうとする。

――きつと、彼女はそんなことを望んじやいない。

脳裏に一人の女性の姿を浮かべたとき、先程の危うい考えは霧散していた。

気を取り直して歩き出すと、街の一角に人だかりが出来ていた。何かを打ち合う音が響き、その度に人だかりがわつと騒ぐ。

気になって人だかりの中に入ると、騒ぎの原因はすぐに分かった。二人の男が木剣で打ち合っている。一方の男は、体格ががっしりとし、薄汚れた革鎧を身に着けた傭兵然とした男で、もう一方は平服を着ているから、この街の住人切りだと推測できる。

喧嘩だろうかと、とボルスが思った矢先に、平服の男の木剣が革鎧男の右腕を掠った。

「おお、見事！ それがし 某の負けじゃな！」

革鎧の男が大仰に叫び、近くに置いてあった台に近づいた。その台の上には皿が乗り、その中には銅貨が二枚入っている。銅貨を二枚とも掴むと、平服の男に差し出した。平服の男は受け取ると、「よっしゃ」と喝采を上げ、人込の中に紛れていった。

「おいおい、あの剣士また負けたぜ」

「これで五回目だ……あいつ、五〇〇ザランも損してるぞ」

「ひょっとしたら、俺でも勝てるんじゃないあ？」

などと、ざわめきが起こる。

ボルスは何となく事情を理解した。

先程のは互いに銅貨を賭けた勝負――つまり、ギャンブルの一種というところか。あの剣士は、それで生計を立てているんだろう……もつとも、負けが続いたら商売上がったりなのだろうが。

そんなことを考えながら見てると、あの革鎧の男が、

「この商売始めてから、ここまで負けが続くのは初めてじゃあ！」
と、芝居掛かった動作で嘆いている。

しばらくして、何を思ったのかその男は懷から財布を出し、皿に銀貨を一枚投げ入れた。

「こうなれば、一世一代の大勝負よ！ 某はそれがし一〇〇〇ザラン賭けよう！ さあ、挑む者はおらんかあ！」

周りの人間がざわつき始めた。

それもそうだろう。いくらなんでも一〇〇〇ザランは大金だ。おいそれと簡単に賭けられるような金額ではない。

「挑戦するなら、止めた方がいいぞ」

振り向くと、一人の騎士が人込に紛れ立っていた。騎士、と判断したのは着ている鎧が、自分の着ているような革鎧とは異なり、板金を繋いで作られたプレート・アーマーだったからだ。

紫色に輝く板金鎧を纏ったその男は、腰に帯剣こそしていたものの、剣を扱う人間としては、少々軟やわに感じる。背丈こそは自分より上だろうが、身体の線が細い。さらに女のように伸ばした黒髪と、整った顔立ちの中でも目立つ碧眼へきがんがその印象を助長していた。

ボルスがそんなことを考えていると、そのことも知らぬ男は続けて言う。

「あの男が戦っているのをずっと見ていたが、たぶんあれはわざと負けているな。その証拠に、立て続けに木剣を振っている割には息も上がってなければ、汗の量も少ない」

あの武芸者に目を戻すと、確かに男の言ったとおりだった。いくら戦い慣れていない平民と試合をしたからといっても、連続して戦えば体力だって消耗する。

第一、先程の聴衆の言葉が本当なら、あの武芸者は負けてばかりいるのだ。あそこまで元気なのは、なんとも不自然だ。

「あの大袈裟な動作も演技か？」

「たぶんな。大方金額を上げて、そこに高を括って挑んできたところを打ちのめすんだろう」

随分とあざとい手だ。

「忠告はありがたく受け取っておく。ま、どの道俺はあいつに挑むことがまず無理だがな」

「何故？」

その質問に対し、ボルスは男を睨みながら答えてやった。

「金が無^ねえ」

答えると、男は一瞬何を言われたか分からないような顔付きになった。

「一〇〇〇ザランも無い、ということか？」

「そういうことだ」

無然として言うと、男は完全に呆れ返った顔になる。

「君、その格好からして旅してるんだろ？　それで大丈夫なのか？」

「大きなお世話だ。そういうあんただって見たところ騎士だろう？」

こんなところで油売ってていいのかよ？」

男は「あゝ」と頭を掻いた。どうやら何か思い至ることがあるらしい。

「まあ、そんなことはどうでもいい」

「どうでもいいって……ちょっと待て。あんた何してんだ？」

男はちやうど懷から財布を取り出したところだった。

「見て分らないか？　あの男の鼻を明かしてやろうと思ってな」

「挑む気かよ。あんた見た感じそんな強く見えんけど」

ボルスはうっかり本音を口にしてしまった。

だが、男の方は機嫌を悪くするわけでもなく、ただハハハと笑い、「だったら、君は自信があるんだろう？」

「少なくとも、あんたよりはマシだと思ってるよ」

男は「そうか」と沈思し、

「なら、代わりに行ってもらおうか」

と、いきなりボルスの手に銀貨を握らせてきた。

ボルスは驚き、

「おいおい、いいのか？」

「いいさ。ただし、分け前は君が三で、俺が二だ。それでどうかな？」

「——いいぜ」

ボルスはニヤリと笑い、担いでいた荷物を預けた。荷物とは別に括ってあった包みを渡したとき、男の顔が一瞬訝しいものに変わったが、特に嫌がることなく受け取ってくれた。

ボルスが人込を抜け、あの武芸者の前に立つと、再び周囲からどよめきが起こる。

「ほう、そなたが此度の挑戦者か！ さあ、賭け金を提示せえ！」

「ああ」

返事をし、ボルスは男から渡された銀貨五枚を皿に投げ入れる。武芸者の目が見開かれた。

「あいつ、五〇〇〇ザラン賭けたぞ！」

人込の中から誰かが叫んだ。武芸者の方は口をパクパクと動かし、「しょ……正気か、そなたは……」

と、尋ねてきた。

「一応な。ま、互いに本気だそうぜ——」

「すげえ、とんでもない奴が現れたぜ！」

「とても正気とは思えねえ！ 狂ってる！」

ボルスの言葉が終わるか終わらないかのうちに、周囲が興奮気味に囃し立て始めた。

「おい、挑戦者が言ってるんだ、てめえも五〇〇〇ザラン賭けたらどうだ！」

「そうだ、賭けろ賭けろ！」

野次馬達はあまりにも無責任な声援を送る。

武芸者は、最初こそ黙って立ったままだったが、ついに耐えかねたか銀貨を四枚投げ入れた。

その様子に、周囲からさらなる興奮が湧き上がる。

「いいだろう……その増長振りを後悔させてやる！」

そう言って、武芸者は血走った目でこちらを睨み付けてきた。そして、二本の木剣のうち一本を投げた。

本性を現したか、と思いながらボルスが木剣を掴んだ途端——
相手はボルスが構えるのも待たずに木剣を振り上げ、打ちかかってきた。

第七話（後書き）

最近、友人から「『梅院暁』の読み方が分からない」と言われました。

一応言っておきますと、「うめいんさとる」が正しい読み方です。実際、マイページの方に読み方は載っているのですが、私は一作品しか連載してないので、たぶんマイページの方は誰も見ないと思うので、この場を借りて言います。

それでは、久々の製作秘話なんかをどうぞ。

<D・W第六話作成秘話及び裏話>

……といっても、書くことはちよつとしたお詫びだけです。

第六話は、とにかく文量が多い話となってしまいました。

大抵いつもなら四千字程度でまとめられるのですが、前回の話の場合、パシヴァルに見せ場を作ろうとしたら、いつの間にかあの量になってしまいました。

今更ながら途中で切つとけばよかったかと思いましたが、そうすると、主人公のボルスがまだ三話しか登場してないにも関わらず、パシヴァルの方が四話も登場することになってしまうので、あのような形となってしまいました。

以後は文の長さには気を付けたいと思います。

第八話（前書き）

最近、活動報告の方でバトンを拾いました。
予告よりも遅れましたが、第八話、お楽しみください。

第八話

グラン大陸北部の大半を支配する軍事大国ザミウル帝国。

この国での騎士は少々特別である。というのも、騎士となるのは大抵が貴族の血筋を継ぐ者なのだ。

そのために、この国で騎士と成るということは、貴族の仲間入りを意味する——もしも成れたら、の話だが。

一般の人間が騎士に成ることは、まずないと言ってもいい。それほどまでに、貴族と平民を隔てる壁があるのだ。

帝国の首都リョートの街の一角にある鍛冶屋の片隅で——

一人の騎士が不貞腐ふてくされていた。

店内の隅にあった椅子にどっかりと腰を下ろし、背もたれごと壁に背中を預け、気だるそうに天井を見上げている。

「なんつう顔してんスカ、パーシヴァルさん」

思わず、といった感じに近くで作業をしていたフォラーズが声を掛けてきた。

パーシヴァルは顔をフォラーズに向け、

「そういうお前こそ、怪我は大丈夫なのか？」

と、逆に聞く。

フォラーズは左腕を布で吊っていた。パーシヴァルの視線はどうしてもそこに行ってしまう。その傷の原因は、無論一週間前に店先で起きたあの騒動だ。

パーシヴァルは、この慌あわただしかった一週間に思いを馳はせた——

——あの日、謹慎中だったパーシヴァルがこの店に顔を出していたところに、帝国の有力貴族の子息であるヴィルジニアの一派が襲ってきた。

彼らの狙いはパーシヴァルだった。

以前、彼らが平民の少女を斬り殺そうとしていた現場に偶然居合わせたパーシヴァルは、その少女を助けるためにヴィルジニアを殴り飛ばした。

そのことを根に持った彼らは、親のコネでパーシヴァルを謹慎に追い込むだけでは飽き足らず、この鍛冶屋を襲撃するという暴挙に出たのだった。

彼らが店で暴れた結果、フローラズが傷を負い、そのことに憤った職人達とヴィルジニア達の間には一触即発の空気が流れた。

その時、パーシヴァルはヴィルジニアの敵意を再び自分に向けさせるために挑発した。職人達を巻き込むわけにはいかなかったからだ。

なんせ、相手は自分の罪を消してしまうほどの権力を持った貴族なのだ。自分はまだ謹慎で済んだが、もし職人達がヴィルジニアを敵に回そうものなら——それこそ恐ろしい結果になる。そんな確信があった。

そして、まんまとパーシヴァルの挑発に乗ったヴィルジニア達を相手にパーシヴァルは乱闘を繰り広げた。互いに剣を抜き、街中にも関わらず魔術を撃ち合うという大乱戦の末に、巡回中の兵士が駆け付けて来た。

そんな中、待ったの声を掛けた人間がいた。彼が兵士達の前に行き、何かを言うと、兵士達は顔を見合わせると、ヴィルジニアとその取巻きを捕縛し——その間、ヴィルジニアは「僕は貴族だぞ！」

僕は悪くない！ 悪くないんだあ！」などと喚き散らしていた——、四人を連れて行った。

パーシヴァルはポカンとその様子を眺めていたが、あの男が歩み寄り、名前を聞いてきた。名乗ると、その男は謎めいた笑みを浮かべ、「その名、覚えておこう」と言い、去っていった。

その翌朝、謹慎を言い渡された時と同じように、上官が宿舎の部屋に入ってきた。

今度こそ辞職^{クビ}か、と内心覚悟を決めていたパーシヴァルに向かい、

上官は言った。

「本日を持って、貴公は第十五騎士団に配属とする」

当然のことながら、パーシヴァルが予期していた言葉と完全に異なっていた。

その後は様々な準備に追われた。さして多くない荷物を纏め、一般兵用の宿舎から騎士用の宿舎に移った。その間何人かの団員と顔を合わせたものの、団長だけはその姿を見せることはなかった。

準備期間として充て^あられた一週間のほとんどがそうやって過ぎ去った中、ようやく騎士団で着る鎧が支給された。

だが、悲しいことにパーシヴァル自身の体格が一般的な兵士の体格と比べて細いせいか、その金属製の鎧が身体に合わなかった。他の鎧がないかと問い合わせても、これが唯一自分の身長に合うサイズだと言われれば泣く泣く引き下がるしかない。

結局、パーシヴァルは鎧を自分に合うようにするために、この店の親方に頼み込んだのだった――

「おい、最後の仕上げが出来たぞ！ 試してくれ！」

店の奥から響いてきた大声に、パーシヴァルの物思いは一時中断させられる。

見れば、ちょうど親方が仕事場から出てきたところだった。

パーシヴァルが椅子から勢いよく立ち上がると、着ている鎧がガチャリ、と微かに金属音を鳴らす。

そこへ親方が調節が終わったと思われる手甲^{ガントレット}を差し出した。パーシヴァルは受け取り、腕に装着してみる。

今、パーシヴァルが身に着けているのは、一般兵時代に着ていたような革鎧ではない。胴まわり、脚、そして腕を加工した金属板で覆ったプレートアーマーである。

支給された鎧は帝国のシンボルカラーである紫に染め上げられ、

左胸の辺りには、鞆に隊章が刻まれた短剣が帯で括り付けられている。

着け終わったところで、手足を動かし、不具合がないか確かめてみた。

「さすがおやっさん、ばっちりだ」

笑いかけると、親方も笑みを浮かべ、

「そうか。あと、こいつは餞別だ。せんべつ受け取れ」

と、サーベルを放り投げてきた。

パーシヴァルは右手で受け取る。

「おやっさん、こいつは？」

「……前にも言ったろ、お前はこんなちっぽけな鍛冶屋の職人に収まる器じゃねえって……どんな剣も、それぞれの形にあった鞆に収まるようにな。その刀は、お前が騎士になるときが来たら、渡そうって思ってた奴だ」

パーシヴァルはサーベルに目を向けた。柄には手を保護するための護拳ナックルガードがついており、製作者の意図ゆえか装飾は控えられ、実用性を考慮した無骨な形状をしている。

左手で柄を握り、ゆっくりと抜くと、緩やかな反りを持つ刀身が露になった。先日使っていた湾刀シミターほどに湾曲していない。

よく見ると先端のみが両刃になっている。これは疑似刃ファルスエッジという、刺突を可能とするための工夫だ。普通、片刃の刀剣は斬るのに適しているが突き刺すことには向かない。

試しに二、三度振ってみると、自分でも驚くぐらい手に馴染んだ。振ることに、店先から入る陽光が刀身に反射し、鈍く輝く。

「大事に使わせてもらうよ、おやっさん」

鞆に納めながら感謝の意を示すと、

「安心しろ、折れでもしたらいつだって叩き直してやる」

親方がニッと口を笑みの形にもっていくのを見て、パーシヴァルも微笑みで返す。

軍刀を腰のベルトに帯刀していると、「そうだ、忘れてたぜ」と、

親方が小さい布袋を取り出した。動かす度にジャラジャラと音を立てる。

「騎士となったら、武具以外にも必要なもんがあるだろ。それはお前が今まで受け取らんかった、この店で働いた俸給だ。大して多くねえが……使え」

「い、いや、使えって言われても……」

一応、受け取って中身を見ると、銀貨が十数枚入っていた。ちなみに、銀貨一枚で一〇〇〇ザラン。大金である。

パーシヴァルは親方の顔を見て、「本当にいいのか」と聞かすが、「男に二言はねえ」

と、親方は頑として受け取ろうとしなかった。

「そういうことなら、早速……」

「早速？　なんでえ、金に困ってんなら、とつとと言えばいいのによお。水臭えじゃねえか」

「いや、さすがにこれは……な。でもこれで……」

突然、パーシヴァルは店の外を向く。

「女の子に声が掛けられる！　ありがとうおやっさ——ぐえっ！」

——最後の「ぐえっ」は親方への感謝の言葉ではない。

パーシヴァルの言葉を聞いた途端、親方が豹変してパーシヴァルの頭を掴んだのである。

「女と遊ぶ金に使うぐれえなら返せ！」

そう言っただけで親方が手に力を込めると、パーシヴァルのこめかみ辺りをギリギリと鉄鋏で挟んだような圧力が締め上げる。

「じよ、冗談！　冗談だってばおやっさん！」

「お前のは冗談に聞こえねえ！」

さらに親方は力を込めた。

パーシヴァルはフォラーズに助けを求めようとするが、当のフォラーズは「またやってるよ、この人は」とばかりに呆れた顔で眺めていた。

——いや、止めるよ！　なに傍観してんだ！

望みを断たれ、最早これまでかとパーシヴァルが半ば諦めたときだった。

店の外から大勢の人間が騒ぐ声が響いてきた。

「なんだ？ 騒ぎでも起きてんのか……出番だぞ、俸給泥棒」

「……なら、放して欲しいんですが」

「おお、そりやすまんかったな……」

一瞬、親方の口の端が上がるのをパーシヴァルは見逃さなかった。

——待て、なんか嫌な予感が……

「そらよ！」

パーシヴァルは、店の外に放り投げられた。

——絶対、あの人の頭には冗談と手加減の言葉がないな。

パーシヴァルは心の奥で愚痴りながらも騒動の場へと向かった。

騒ぎの原因はすぐに分かった。一人の武芸者が賭け試合を行っていたのだ。

しかも、その武芸者は、相手の木剣が少し掠ったぐらいで自身の負けを宣言する。これでは商売上がったりだろう。

ちなみに、パーシヴァルは止める気は毛頭ない。さすがに怪我人が出たりしたら話は別だが、今のところは大丈夫と判断した。

ここで、周りの野次馬達がざわつき始めた。

見れば、件の武芸者^{くだん}が大仰に嘆いた後、賭け金の値を吊り上げたようだ。今まで一〇〇ザラン銅貨を入れていた皿に、銀貨を投げ入れた。

これまでの負けっぷりを見てれば、大抵の人間は「俺でも勝てるかもしれない」と思うところだろう。事実、周囲の人間達は誰が挑むかで盛り上がっている——負けたところばかりに目が向いている人間は。

ふと、視界の隅に一人の男が映った。

その男は、革鎧を着ていたが、どういうわけか青色に染められている。とりわけ派手というではないが、それでも一般的なものに比

べたら目に付きやすい。

背には身の丈ほどの剣を背負い、左肩には荷を担いでいる。が、その荷も奇妙なことに彼の背丈ほどもあるのだ。いったい、何を入れているのだろうか？

短い茶色の髪は、手入れが届いていないのか所々跳ねた箇所があり、鎧にも幾つか傷や解れほつがあることから、仕事を求めて旅している傭兵辺りではないかと見当を付ける。

——後から考えてみても、何故そのとき自分から彼に声を掛けたのかは分からない。

「挑戦するなら、止めた方がいいぞ」

男がこちらを振り向いた。

その男の顔立ちは、思っていたよりも若かった。女を魅了できるような整った色男の顔でもなく、かといって戦いに生きる者特有の無骨さといったものもない。特に言うなれば……精悍な顔つきをしている、としか言いようがない。

そのさしたる特徴のない顔の中で、目に止まったのは、青い瞳だ。青、とは言っても鎧の色とは似ているようで異なる。

それは、例えるならば空の色。いつも同じように見えて、少し目を放すといつの間にか変わっている——だからこそ、目を引き付けて已やまない——そんな色だった。

「あの男が戦っているのをずっと見ていたが、たぶんあれはわざと負けているな。その証拠に、立て続けに木剣を振っている割には息も上がってなければ、汗の量も少ない」

「あの大袈裟おおげさな動作も演技か？」

男が聞いてきた。顔立ちとその声から、大体自分と同年代か、と思いつながら、答える。

「たぶんな。大方金額を上げて、そこに高を括って挑んできたところを打ちのめすんだろう」

ま、俺はまず引つかからないがな、と心の奥底で付け足す。
しかし、次に男が返してきた言葉は、予想外のものだった。

「忠告はありがたく受け取っておく。ま、どの道俺はあいつに挑む
ことがまず無理だがな」

「何故？」

すると、男は無然とした表情で答えた。

「金が無^ねえ」

一瞬、パーシヴァルは何を言われたか分からなかった。

「……一〇〇〇ザランも無い、ということか？」

「そういうことだ」

表情を崩すことなく、答えたことに、パーシヴァルは啞然として
しまった。

「君、その格好からして旅してるんだろ？　それで大丈夫なのか？」

「大きなお世話だ。そういうあんただって見たところ騎士だろ？」

こんなところで油売っていいのかよ？」

うっ、痛いところを突かれた。そういうえば、さっきも親方に「俵
給泥棒」の烙印を押されたのだった。

しかし、親方に言われるのは仕方ないとはいえ、まさか初めて会
った旅人にまで同じようなことを言われるとは……

「まあ、そんなことはどうでもいい」

「どうでもいいって——」

男が呆れるのにも構わず、パーシヴァルは先程親方から受け取っ
た袋を取り出す。

「——ちよっと待て。あんた何してんだ？」

「見て分からないか？　あの男の鼻を明かしてやろうと思ってな」

まあ、さすがにイカサマ（厳密には違うけど）を黙って見逃すの
もいけないか、と思って言った言葉だったが、彼はそう解釈しな
かったようだ。それどころか、

「挑む気かよ。あんた見た感じそんな強く見えんけど」
などと言ってきた。

一応、この国で騎士は、貴族の一員として見なされる。無論、パーシヴァルは成り立てだからそんなに大きい権限を持っているわけではないし、立場を後ろ盾に踏ん返り返るつもりもない。それでも普通の人間はおいそれと騎士に対して暴言を吐いたりしないのだ。

だが、目の前の男は、知ってか知らずか堂々と言ったのけた。これがもし権力を盾に威張っていることしか能のない貴族——例えばヴィルジニアのような——だったら、問題になるところなのだろうが、パーシヴァルはむしろその傲岸ともいえる態度に、呆れることを通り越して笑いが込み上げてきた。

「だったら、君は自信があるんだろう？」

「少なくとも、あんたよりはマシだと思ってるよ」

その物言いにさらに笑いが込み上げてきたが、「そうか」と一言だけ返すに止めた。

そして、この空色の眼をした青年に、いつの間にか興味を覚える自分がいることに気付く。

「なら、代わりに行ってもらおうか」

そう言い、パーシヴァルは取り出した銀貨を男の手に握らせた。

その男は驚き、

「おいおい、いいのか？」

「いいさ。ただし、分け前は君が三で、俺が二だ。それでどうかな？」

「——いいぜ」

と、今度はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

掴み所のない男だ、と思いつながら、荷物を預かる。

ここで、パーシヴァルは表情を変えた。

彼の背丈ほどもあった荷の正体——それは手の感触だけで分かった。分かったのだが——

荷物を預け、身軽になった青年が人混みの向こうへと歩いていく。武芸者を相手に何か問答を繰り返しているようだが、その内容よりも、自分の手にある荷が気になって仕方がない。

手触りから形を判断すれば、これは剣だ。それも、彼の背丈ほどもある。

自身の体格ほどの剣を二本も、それも片方を大事に——まるで誰の目にも止まらないように包んで持っていたことにも驚いたが、それよりも——

ここで、周りが騒がしくなったことで、パシヴアルの思考は一時中断される。

見ると、あの青年が武芸者から木剣を受け取ったところだった。しかし、彼が木剣を構える前に——

あの武芸者は木剣を振りかぶり、青年に討ちかかったのだった。

第八話（後書き）

< D・W第七話制作秘話および裏話……の前に >

最近、私が拝読させてもらっている「黄金の竜」の作者のラーさんからコメントを頂きました。

読んでみると、自分では気づいていなかった悪い点なんかを指摘して頂いたので、大変参考になりました……が、こんなことを書かれちゃいました。

（以下、ラーさんのコメントより引用）

えー、以下は悪い点ではないのですが、ちょっと思ったことについて。

ボルスのキャラには食へのこだわりという設定があるのでしょいか？

「剣」第二話冒頭には面を喰らいました。

いきなり微細な調理シーンがW

ボルスが食にこだわりのある（メシはあったかくないとヤダとか）

というキャラクターで今後も活躍するのなら問題ないのですが、そうでなかったらあのシーンは結局なんだったの？ という印象が残ってしまいます。

（引用終）

……大変申し訳ないことをしました。

件の料理シーンは、かつて友人の一人と『ドロリ』騒動（注1）で散々揉めました……

ちなみに、別の友人は、第二話の料理シーンについてこんな意見

を。

「最初、野宿だし男料理でもするのかなあ、って思ったんだよ。そしたらさあいきなりチーズの融け具合だのパンに乗せるだの……驚いたよ。」

例えるなら、大した材料もないから、適当に済ませるのかなあ……って思ったら、いきなりフレンチが出てきたよ！　みたいなの……」

……ええと、イタリアンなら食べたことあるけど、フレンチはフランスパンしか食べたことないんで、どう返答すればいいか分からないのですが……

とりあえず、あのシーンの意味はと言いますと……

ギャグシーンの代わりです（ナ、ナンダッテー）。

こういうことかという、あの時はボルスしかキャラがいなかったんで、ギャグシーンを入れることが出来なかったんです。

第一話は、狼と戦い、第二話では盗賊と戦ってたわけですから、当然何度も山場が来てしまいます。

ここで、山場の間に何かテンションを落ち着かせられるものを入れようと思い、ギャグシーンの代わりに、ボノボノとした料理シーンを入れたわけです……ですが、多くの人に可笑しい印象を与えてしまったようなので、この場を借りて謝罪します。大変申し訳ありませんでした。

（注1）『ドロリ』騒動……第三話の後書き参照。一言で表せば、料理シーンに十八禁表現が入っているか入っていないかで友人と揉めた事件。

第九話（前書き）

一応、この小説は、剣と魔法のファンタジーです。

第九話

乾いた音が響いた。

自身がろくに構えていなかった状態で放たれた一撃。

それをボルスは自身の頭に達する寸前で――

木剣の柄の部分で受け止める。

武芸者の目が驚愕で見開かれるのが、交差する木剣越しに見えた。

「おいおい、構えるの待ってくれたっていいだろ」

ボルスは軽口を叩いてみたものの、実をいえば、その口調ほどの余裕はない。

今、ボルスは木剣の刀身を左手で握り、右手は掌で柄を押すような形で添えている。

問題なのは、左手の方だ。先程の打ち込みを防御した際の振動で、退いていたはずの痛みがぶり返してきた。

もしこの体勢のまま押し合いを続けたら、明らかに自分の方が不利となる。

長引いたら負け――ならば！

「長引かせなけりゃいいだけの話だろうが！」

叫ぶと同時に右腕に力を込める。軽く曲げてあった右肘を一瞬で伸ばし、相手の木剣の切っ先を逸_そらした。今度は、武芸者の体勢が崩れる。

ボルスは文字通りその隙を突いた。刀身を左手で掴んだまま、柄頭で相手の右肩を突く。

こちらの左腕に鋭い痛みが走った。しかし、この機を逃せば敗北することは、自分がよく分かっている。

よろめいた相手の脇腹、左腿、左肩に向かって立て続けに突きを放つ。ほぼ狙い通りに命中し、その武芸者は地面に転がった。

木剣の柄を右手で握り、切っ先を相手の首筋に突きつける。

「まだやるか？ 別に俺は構わんけど」

「くっ……あんな滅茶苦茶な戦い方で負けるとは……」

「騙し討ちされるよりはマシだろ？」

相手は二の句が告げれなくなったか、齒軋りする。

しばらくボルスが油断なく見据えていると、ついに相手の口から降参の言葉が漏れた。

「某の負けじゃあ……」

それを聞いた野次馬達が騒ぎ出す。

ボルスが切っ先を首から遠ざけると、武芸者は木剣を杖代わりにして立ち上がった。よろめきながら、賭け金の入った皿に向かって歩き出す。

「さあ、この金はそなたのものだ……受け取れえ！」

武芸者は、皿を掴むと、その中身全てを地面に向かってばら撒いた。

それに焦ったのはボルスの方だ。何故なら、自分の払ったのは借りた金だからだ。

「何するんだよ！」

文句を言いつつも、地面に屈み込んで銀貨を拾う。

「そして……これは某からの驕りじゃ、受け取れえ！」

武芸者の叫び声、そして周囲からは悲鳴が聞こえた。

湿った音がした。

周りの喧騒が止んだ。これが、骨が碎けた音だと理解したからだろう。

人混みに視界の一部を遮られながらも、パースビュアルは見ていた。武芸者が銀貨を地面にぶちまけ、不意を突いてあの青年に殴りかかったところを。次の瞬間、誰もが目を疑う光景を。

銀貨を集め終わった青年が立ち上がった。逆に件の武芸者は地面に伏している。

それは一瞬の出来事だった。

青年の頭を木剣が捉える寸前、青年の右手に握られていた木剣が一閃――その一振りが、武芸者の右膝を砕いたのだ。

その早業に、再び野次馬達が騒ぎ出す。

「何の騒ぎだ！」

人だかりの向こうから怒鳴り声が響いてきた。

パーシヴァルは嫌な予感がして、人混みを掻き分けて青年の方へ向かう。

案の定、別の方向から巡回中の兵士が青年の方に向かってるのが見えた。

パーシヴァルが一足早く人混みを抜け、青年に近づく。青年がこちらに気付き、何か言おうとするのを制止し、預かっていた荷を持たせた。

ちようどそこで、兵士達が人混みから姿を現す。

「貴様ら、何をしているか！」

誰何すいかの声に、青年が何かを言う前にパーシヴァルは彼を庇かばうように立ち、

「私は、第十五騎士団所属の者だ」

と、先に身分を明かし、左胸にある隊章の刻まれた短剣を見せた。途端に兵士達が姿勢を正した。

「き、騎士団の方でありましたか……」

その口調も、心なしか、丁寧になっている気がする。

この国の騎士の大半は、貴族の血筋だ。そのために、この国の人間の多くは騎士と貴族はほぼ同一であると考えている。

この兵士達もまた、同様の考えで態度を改めているのだろう……まさか、目の前の騎士が、数日前までは自分達となんら変わらない役職だったとは、夢にも思わずに。

「その、何やら民衆が騒ぎ立てていたものでしたから……何があったのですか？」

もう一人の兵士が、恐る恐る、といった感じで尋ねてきた。その聞き方は、騎士になったばかりのパーシヴァルにとって堅苦しく感

じる。

しかし、この状況はかえって好都合かもしれない。パーシヴァルは咄嗟に、

「うむ、実を言えば、そこに倒れている男が、こちらの方に危害を加えようとしていたのを目にしてな。駆けつけたときには、すでに返り討ちに合っていた。この方の身柄を確保して話を聞いたところ、どうやら金銭に関わる問題で揉めてしまったらしい。その男に怪我を負わせてしまったことを、酷く悔やんでおられてな……」

「な、なんと！」

「では、直ちにその男の身柄をこちらに！ 後のことは、我々にお任せを——」

パーシヴァルは「待て」と片手を挙げて兵士達を制する。二人が黙ったところで、

「その男は、骨を折る大怪我をしている。早く医者に見せないと危険だ。君達には、その男を医者の下まで運んでもらいたい」

「し、しかし、そうすると貴方が身柄を確保した男はどうすれば——」

「安心しろ。彼については、私が身柄を預かる」

二人は、それを聞くと互いに顔を合わせる。

「し、しかし……」

「その男から詳しい事情を……」

兵士達が交互に言うのを、パーシヴァルはわざと苛立っているように装い、

「もう一度言う。直ちに怪我人を運べ。まだ文句があるというなら、怪我の処置を済ませてから、騎士団に直訴すればいい。いつでも聞いてやる」

「い、いえ……恐れ多うございます！」

「も、文句など、滅相も……」

哀れにも、二人の顔色がどんどん青くなっていく。たぶん、夏なのに肌寒い気温だけが原因ではないだろう。

「なら行け。一刻を争う」

「「は、はいっ！」」

二人は倒れている男を拾い上げると、騎士や兵士がこの場に来たことで散り始めていた野次馬達に「怪我人が通るぞ！ 道を開ける！」などと叫びながら走り去った。

それを見届けたパーシヴァルは肩の力を抜き、「ふうっ」と息を吐く。

「よくもまあ、あんな出鱈目が言えたな」

パーシヴァルは背後からの声に振り向くと、

「ま、あれだけ堂々と出来たことに自分でも驚いてるよ」

と、呆れ顔の青年に向かって言った。

「それに、あのまま君が連れて行かれたら、俺が貸した金が戻ってこなくなる」

「そりゃそうだけど……とりあえず、あんたから借りた金と、分け前だ。受け取ってくれ」

そう言って青年が十枚のうち七枚の銀貨を差し出してきたので、受け取る。

「随分と世話になったな。じゃ、俺はこれで……」

と、青年は残りを財布に仕舞いながら立ち去ろうとした。

だが、パーシヴァルは、

「いや、まだ用があるんだ」

と、青年の左手首辺りを掴んだ。

青年の顔が一瞬強張ったのを見て、パーシヴァルは確信する。

「やっぱり、君も怪我をしているようだな」

青年の目が見開かれる。

左腕の袖を捲り上げると、赤く腫れ、所々に潰れた水ぶくれのある傷が見えた。

「この様子から、傷そのものは何日か前に出来たが、完治してない、といったところか……近くに、俺の知り合いがやってる店がある。そこでなら治療できるだろう」

「いや、これ以上あんたに世話を掛けるわけには……」

それを聞いたパーシヴァルは笑みを浮かべながら、

「そう言われても、先程彼らに言ってしまったからな……君の身柄は俺が預かる、と。このまま放ったらかしにしたら、俺の責任力を問われてしまう」

と、有無を言わさず連れて行こうとする。

すると、青年は慌てて、

「わ、分かった、分かったから引っ張るな！ 痛いし、恥ずかしい！」

と、手を振り解^{ほど}こうとするので、「これは失礼」と、パーシヴァルは手を放した。

先導のために青年の前を歩きながら、パーシヴァルは考える。

今見た傷……あれは、大きさから見て炎系統の魔術による火傷だろう。

そして、先程の戦いで彼の見せた実力……一体、彼はどのような旅を続けてきたのだろうか。

彼の青年に対する疑問が、さらに深まるパーシヴァルであった。

第九話（後書き）

< D・W 第七、八話製作秘話および裏話 >

気付けば、前回は料理シーンの言及だけで終わってたんで、第七話分も含めて……

第七、八話は、同じ場面をボルスとパーシヴァルそれぞれの視点で描いています。

何でこんなまどろっこしいことをしたかと言うと……読み返してみたら、第六話までにそれぞれのキャラの容姿についての記述が無いことに気付いたからです。

いくらなんでも、料理シーンに力入れというキャラの容姿を無視しちゃうのも酷すぎるんで、ちょうど二人のキャラを出会わせただ、それぞれのキャラに相手の方の容姿を説明してもらおう、と思ったわけで……はい、分かっています。自分の文章力の無さが招いた結果と言うことは……

< その後の料理シーンについての進展 >

最近、帰省した際の母との会話より……

私「最近さあ、私の書いてる小説で、料理している場面について思いつき突っ込まれちゃったんだよね」

母「ふーん、どんなん書いたの？」

私「えーと、ただ単に、主人公がベーコンとチーズを炒めてただけだって。フライパンと、油を取り出して……」

母「ちょっと待ちや。自分、今何て言うた？」

私「（……何でうちのおかんいきなり関西弁になっとるん？）え、

だから、フライパンと油……」

母「おかしいやんけ！」

私「何が？」

母「野宿してる人間が、何でフライパン持っとんねん！」

私「突っ込むところそこ！？」

母「もう、野宿での料理なんて、その辺の棒っ切れに材料ぶっ刺して、焚き火で焼きゃあいいんじゃない！」

私「何千年前の調理法だよ！　いくらなんでも、そこまではいいかないでしょ……ちゃんと、包丁で切って……」

母「包丁とまな板、どっから出した！」

私「突っ込むところそこ！？」

母「ハ○ジのお爺ちゃんはなあ……山小屋に住んでるってのに、鉄の棒の先にチーズ刺して、暖炉で温めるんだ……そして、トロリと融けてきた段階でパンに乗せるんだ……肉なんかも、ナイフで削り取って、なめるように……」

私「なんか論点ずれてませんか！？」

母「うるさい！　とにかく、ハ○ジのお爺ちゃんだってそうだったのに、なんでボルスは立派な調理器具があるんだ！　ハ○ジのお爺ちゃんを見習え！　ハ○ジのお爺ちゃんを！　フライパンや包丁など、邪道だ！」

私「何回ハ○ジのお爺ちゃん言うねん！　どんだけアルプスの少女が好きなんだよ！」

……とまあ、こんな会話がありました……

さてさて、次回から、ボルスの料理はどうなることやら……

（注…この小説は『剣と魔法のファンタジー』です）

第十話

パーシヴァルが店に戻ってきた頃には昼時になっていた。中に入ると、親方が出迎えてくれた。

「お、やっと戻ったか。ちょうどお前宛てに客人が――」

と、そこまで言ったところで、親方はパーシヴァルの後ろに続く人間に気付いたらしく、

「そいつは？」

と聞いてきた。

「まあ、その騒ぎでちょっと知り合ってね……左腕に酷い火傷を負ってるんだがちょっと見てくれないか？」

パーシヴァルは青年を店の中に招き入れる。

親方は「どれどれ」と青年の傷を調べると、奥に向かって、

「おい、誰か火傷用の軟膏なんこうとさらし布持って来い！」と、怒鳴った。

親方が青年に椅子を勧め、ちょうど座ったところで、フォラーズが薬と包帯を右腕に抱いて（左腕は吊っているから使えない）持ってきた。

「おお、すまねえな……って、他の連中はどうした？ 怪我人に運ばせるほど手が込んでんのか？」

「ああ、皆仕事そっちのけで客の相手っスよ。ずっと鼻の下伸ばしっぱなしでさあ」

フォラーズが肩を竦める。

親方は「馬鹿共が……」と毒づきつつ、フォラーズから薬を受け取った。

「そういえば、さっき客がどうこうとか言ってたな。誰か来てるのか？」

「おっと、忘れてたぜ。お前に客だ。フォラーズ、戻るついでに呼んで来い」

「その必要はありません」

凜とした声が響いた。

パーシヴァルは親方との問答をやめ、声のした方を見る。

暗い店内が明るくなった気がした。

その女性は、自分よりも年は何歳か上だろうか、毅然とした態度で立っている。

淡い褐色の髪を後頭部で束ね、目は髪とほぼ同じの明褐色で、全体の雰囲気と合わさって少々お堅い印象を与えてくる。

——ところで、その後ろにはぞろぞろとこの店の職人衆が熱っぽい顔で付いて来ていた。フォラーズの言うとおり、本当に仕事をしていたらしい。

「貴方が、パーシヴァルですね？」

「そうですが……デートのお誘いでしょうか？」

パーシヴァルがいつもの癖で軽く返答したところに、親方の拳が頭に炸裂した。

「痛っ、何も殴ること無いだろ、おやっさん！」

「うるせえ！ 大体、お前はだな——」

パーシヴァルが親方に文句を言うのと、すかさず親方も応酬する。

二人が言い争いを始めたことに、周囲はキョトンとした反応を示した。ただ一人フォラーズだけは「またか」と言いたげな顔をし、

「親父もパーシヴァルさんもやめろって。客の前だろ」

と、止めに入る。

すっかり熱が入ったか、背後からパーシヴァルを羽交い絞めにし、首を締め上げていた親方が、

「おっと、いけねえ、いつもみてえにやりすぎっちまったぜ」

と、パーシヴァルを解放した。

パーシヴァルは咳き込みながらも、

「失礼、お見苦しいところをお見せしました……」

と、件の女性に謝りつつ立ち上がった。

その女性は「はあ」と気の抜けた返事をしたが、すぐさま元の気

を引き締めた表情に戻り、

「申し遅れましたが、私は第十五騎士団所属、ミライナ・ハフスタ
ー……貴方と顔を合われるのは初めてですね」

女性が名乗ったのを聞いて、今度はパーシヴァルがポカンとした
顔つきになってしまった。

よく見れば、帝国に属することを示す紫の上衣に、隊章が刻まれ
た短剣を左胸の位置に括りつけている。

「女の騎士は珍しいですか？」

「はっ……い、いえ、ただ、初めて見ただけで……」

少々歯切れの悪い回答をしつつ、パーシヴァルが慌てて言い訳を
考えていると、

「ああ、気にしないでいいですよ。実際、第十五騎士団でも私を含
めて二人しかいませんし」

と、先程とは打って変わり気さくな口調でミライナは言った。そ
の顔には、微かに笑みが浮かんでいる。

パーシヴァルが何と返答しようかさらに迷っていると、ミライナ
が「さて、用向きですが」と続けようとしたので、咄嗟に姿勢を正
す。

「団長からの出頭命令です。私と一緒に城に来ていただきます」

「パーシヴァル、お前また何かやらかしたのか」

パーシヴァルが何か言う前に親方が口を挟んだ。さすがのパーシ
ヴァルもムツとして、

「信用無いなあ。ここ最近の問題になるようなことはしてないぞ」

「ここ最近は、ねえ……」

あろうことかフォーラズまでもが呆れた顔で口を挟んでくる。ど
うやら、この店での自分への信頼というものは、いつの間にか底辺
まで達しているようだ。しかし、何が原因なのだろうか。先程のミ
ライナへの不謹慎な発言か、その前の金を受け取った際の発言か、
はたまたこの間の――と、心当たりが多すぎるのが悩みどころであ
る。

パーシヴァルが延々と考えていると、

「それほど心配はいらないでしょう。そもそも、彼は団長の推薦で配属が決まりましたし……」

「推薦！ こいつが？」

ミライナの言葉を聞き、親方が指差しながら素っ頓狂な声を上げた。

パーシヴァルは首を傾げた。

「俺、いや私は一度も団長に会ったことはないはずですが？」

「……いい加減、その口調止めたらどうっすか？」

フォラーズが今度は駄目出ししてきた。

「いえ、推薦なら、最低でも一度は会ってるはずですが……とりあえず、ご同行願えますか？」

「……了解しました」

腑に落ちないものを感じたものの、まずは会った次第かと考え、パーシヴァルはミライナに連れられ店を出た。

「よし、終わったぞ」

この店の主と思われる壮年の男が宣告したのを聞き、ボルスは頭を下げた。

この店まで連れてきたあの騎士が、女騎士と共に出て行った後も、ボルスは治療を受けていた。

現在、ボルスの左腕には、緑白色の軟膏が塗られた上から包帯が巻かれている。薬を塗られた際は傷口が染みたものの、今は動かしなくてもあの焼け付くような痛みはそれほど酷く感じない。

「迷惑を掛けた」

「なに、困ったときはお互い様って奴よ。さ、頭を上げな」

ボルスは言われた通りにした。すると、改めて店内の様子が目に飛び込んできた。壁には剣や槍、盾などが掲げられ、陳列棚にも大小様々な剣が所狭しと並んでいる。中には手甲や兜なども置かれて

ガントレットヘルム

いた。

鍛冶屋だろうか。

そんなことを考えていると、目の前の男は、

「さて、ちょうど昼時だしな……おい、その馬鹿共！」

と、先程出て行った女騎士を目で追って店頭まで来ていた男達に向かつて怒鳴った。

「いつまでそのだらしねえ面を世間様に晒してんだ！ とつと飯にして仕事に戻るぞ！ 今日の食事当番はどいつだ？」

すると、一人が「あっ」と声を上げた。それを聞き逃さず、

「あ、ったあ何だ。レド、お前まさか……」

と、睨みを利かせる。その眼光は、まるで獲物に狙いを着けた猛禽類のようだ。

レドと呼ばれた男は、

「す、すまねえ、親方！ 許してくんな！」

と、床に額を擦り付ける。

親方と呼ばれた男の怒号が再び飛んだ。

「馬鹿野郎！ 女に現抜^{うつつ}かして仕事忘れるったあどんな了見だ！」

「ひいっ！ す、すまねえ……」

「すまんも糸瓜^{へちま}もあるか！ お前、この仕事何年続けてんだ！」

どん、と親方が机に拳を下ろした。みしり、と机が悲鳴を上げる。

「親父、落ち着けて！」

「フオラーズ、お前は黙ってろ！」

ついに立ち上がった親方を、その息子と思わしき人物が止めに入る。

さすがに黙って見てるわけにはいられないので、ボルスは控えめながらも口を挟んだ。

「なあ……」

「客人、こいつは身内の問題だ。黙っててもらえねえか？」

「いや、まあそうなんだろうけど……」

少し迷ったものの、一つの提案を出した。

「どうだろう……手当ての礼もあるし、軽いものでよければ俺が作るけど……駄目かな？」

「……は？」

親方とフォラーズは互いに顔を見合わせた。

ボルスは自身の荷物の中から愛用の包丁の入った包みを取り出した。

厨房に並べられた材料を確認する。丸く焼かれたパンが人数分に、ベーコン、カブ、そしてこの地域の特産であるチーズ——これらのもので出来るものを考える。

（この時間になっては、スープを煮込む暇は無いな。それに昼も仕事があるようだから手早く済むものじゃないとな）

しばらく材料と睨めっこしていたボルスだったが、「よし」と独りごちると、包みの中から用途に合った包丁を選んで取り出す。

ここ最近ともに手入れしてなかったためか、刃が少し荒れていた。

「砥石を借りたいが、かまわないだろうか？」

「おお、砥石なんぞ腐るほどあらあ。レド、持って来い！」

親方に命じられたレドが慌てて砥石を取りに行く。

ボルスはレドが持ってきた砥石の中から、特に目の細かいものを選び、砥ぎ始める。

その様子をジッと見ていた親方が、

「ほお、大したもんだ」

と言ったが、研ぐことに集中しているボルスの耳には入らない。

ようやく砥ぎ上がった包丁を手に、ボルスはまな板に向かう。

「行くぜ」

「剣術の稽古じゃねえや」
ヤットウ

誰かがぼやいたが、「黙ってろ」と親方に叩かれた。

ボルスはフライパンを火に掛けた。熱を帯びるまでの間に、下拵したてしちえを済ませておく。

まず、パンをそれぞれ真ん中から真二つに切り分ける。次にベーコンを手頃な大きさにカットし、カブを薄く輪切りにし、チーズをスライスする。

フライパンの上に手をかざすと、温まってきたのが分かった。ベーコンを次々と敷くと、熱せられた油が跳ねる。

表面をカリカリに焼いたベーコンをフライパンから切ったパンの片割れに移すと、まだベーコンから出た油と肉汁の残るフライパンにカブを置いていく。塩を少量ふりかけ、頃合を見て引っくり返すと、雪のように白かったカブが狐色に変わっていた。

先程ベーコンを乗せた上にチーズを乗せ、そこへさらに焼き上げたカブを乗せた。もう一方のパンをその上に乗せれば、熱々のベーコンとカブに挟まれ、トロリとけ出したチーズの香ばしい香りが食欲をそそる、特性創作バーガーの完成だ。

出来上がったものを大皿に盛っていると、周りの職人達はおおつと感嘆の声を上げた。

「味は保証できんが、腹の足しぐらいにはなと思う」

と、ボルスが言った途端に、レドが大皿を抱え、

「すまねえ、この恩は一生忘れねえ！」

そう言い残して料理を運んでいった。他の男達もそれに続く。

ボルスは嘆息すると、使った道具の片付けに入った。フライパンに残った油を古布で拭き取り、軽く水洗いをする。水を切って元あった場所にしまった後、さて持ってきてもらった砥石をどうしたものかと思案し始めたとき、左腕を吊った男が入り口に立っているのに気付いた。確か名前は……

「ええと……フォラーズ、だったか？　一緒に飯食いに行ったんじや？」

「いや、食卓にあんたが来てなかったから親父が呼んで来いってね」
ボルスは「ふうん」と首を捻ったが、

「ちようどいい。この砥石はどうすればいいんだ？」

「ああ、それはそこに置いといてくれりゃ後で勝手に戻しときまさ

あ。それよりも……」

「分かった」

そう言い、最後に自分の包丁をしまうと、フォラーズに連れられボルスは隣の部屋に向かう。

「お、やつと来たか」

部屋に入ると、他の職人達はすでに食べ終わったのか親方一人だけがいた。

「この人、ご丁寧に自分が使った道具片付けてたんスよ」

「ほお……一度あいつらにお前さんの爪の垢でも煎じて飲ましてやりてえな」

「やめた方がいい。腹を壊すだけだ」

ボルスが言うと、フォラーズが呆れ顔で、

「親父、この人には冗談が通用しねえみてえだ」

「違えねえ」

と、親方が笑いながら席を勧めてきた。

ボルスが座ると、卓上に置かれた大皿の上に一個だけバーガーが残っているのが見えた。

はて、人数分作ったはずだが、とボルスが首を傾げていると、

「ああ、こいつはお前さんの分だ。食いねえ」

と差し出してきた。

思わずボルスは親方の顔を見た。

「手当てをしてもらった上に、食事まで世話になるのはさすがに……」

「何言ってるんだ。もともとこいつはお前さんが作ったもんだ。お前さんが食って何が悪い。」

それに、いつもは一緒に食ってる騎士の自覚が無え馬鹿は、今頃城で美味いもんたらふく食ってんだろうよ。それは、その馬鹿の分を代わりに食べるとでも思ってくんな」

……彼が言う馬鹿と言うのは、あの騎士のことだろうか。

だが、そこまで言われては言い返せない。ボルスはその厚意を受

け取ることにし、「頂きます」とバーガーに噛^{かじ}り付いた。カブの苦味が、チーズとベーコンの旨みを引き立てて中々美味だ。

「しかし、たったあれだけの材料でここまで美味しい料理が出来るもんなんっスね。いったい、どこでそんなん覚えたんスか？」

「野宿が多いんでね」

フォラーズが興味津々といった感じに聞いてきたのをさらりと流す。

「ほお独学ってわけか。それにしちゃ、包丁の砥ぎ方にしろ使い方にしろ中々のもんだったぞ」

ボルスは今度は黙ってバーガーを噛るだけに止めた。

正直、この話題には触れてほしくない。

ボルスが黙々と食べる様子をジッと見続ける親方だったが、不意に「ま、どうでもいいか」と呆気なく言う。そこに特に気分を害した様子もない。

ボルスは食べる手を止め、無意識のうちに目線で相手に問いかけていた。

いいのか、と。

相手はその意図を察したのか、ニヤリと笑みを浮かべ、

「鍛冶屋の男は余計な詮索なんぞしねえのよ。てめえから言いたけりや言えばいい、言いたくなけりゃ黙ってりゃいい……簡単だろ？」

ボルスは最後の一欠けらを口の中に放り込んだ。

咀嚼^{そしゃく}までの間に考えた末、この男なら信頼が置けると判断した。

ボルスは今度は言葉にして親方に問う。

「鍛冶屋か……不躰^{ぶしつけ}は承知だが、あんたのその腕と心意気を見込んで頼みがある、いいか？」

親方は、笑みを崩さないまま言う。

「何度も言わせんな。鍛冶屋の男は余計な詮索はしねえ。ただ相手の出す仕事が気に入っちゃ黙って引き受ける。たったそれだけのことよ」

第十話（後書き）

第九話については、特筆することもないので、製作秘話については休みます。

代わりにお知らせ的なものを……

<『第一回 戦闘シーンを書こう』企画>

活動報告の方を読んでいる方は知ってると思いますが、クロワツサン氏が開催している『第一回 戦闘シーンを書こう』企画に参加しています。

これは、各々が自作の小説、あるいはオリジナルでキャラを一人ずつ出し、バトルロワイヤル（基本は一对一だけど）を行い、その戦闘シーンを各々が書いてその描写の良さを競い合う、という企画です。

まあ、簡単に言えば、世界観は『仮面ライダー○龍騎』、戦闘ルールは『大乱闘スマッシュブラザー○ズ』に準じたもので、キャラの勝ち負けじゃなく、実況の優劣を競う、というものです。

すでに、参加表明をした何人かはすでに書き上げ、クロワツサン氏のページにある会場に載っています。

さて、私も参加表明をした以上はキャラを一人参加させねばならぬのですが……

参加キャラを一通り見たら、能力、性能が恐ろしいことに……

とりあえず、「戦車の主砲を打ち込んでも無傷」の時点で何かが決定的におかしいです。

だって、考えてくださいよ。うちの小説のボルスやパーシヴァルで、一体どうやってそんな相手を倒せと。うちの子達はちよっと剣術が使えるだけです。

試しに、友人数名に「生身で戦車の主砲の直撃に耐えられる人間を、剣で倒すにはどうしたらいいか」ってメールで聞いてみたんですよ。

以下が返ってきた回答です。

・少し早いエープリールフルか？ 設定組み直さないとネタキヤラ直行だぞ。

——私だって嘘だって信じたいよ。でも紛れもない真実なんだよ。
・そんなP●装甲を持った敵には光の剣、すなわちビームサ○ベルが有効だと（以下略）

——いや、モビルスーツじゃねえし。

・爆発の衝撃と斬撃は違うと思うが。

——いや、もはやこれはそんなレベルじゃないだろ……

（次は母からの意見）

・斬鉄剣を使えばいいじゃない。

——母上、ルパン三世の見過ぎです。

（結論）

普通の剣でも倒せる可能性はあるが、出来ることならビームサ○ベルか斬鉄剣で挑んだ方が無難（ただし、両者共に入手困難）。

………いつそのこと、鍛冶屋の親方を参戦させようかなあ………

第十一話

「第十五騎士団所属ミライナ・ハフスター、命令によりパーシヴァル同道の上出頭しました。入室の許可を」

ミライナが扉の両側に佇む^{たたず}二人の兵士に告げると、一方が「暫時お待ちください」と言い残し、部屋に入っていた。

待っている間パーシヴァルは考えていた。

面識はなくとも、第十五騎士団団長に纏^{まつ}わる噂ぐらいは聞いたことがあった。

アムビシオン・フェルナンドーかつては第十五騎士団副団長の職に就いていたが、前任の団長が行方知れずとなり、その後周りの強い推薦もあって後任となった男だ。

着任当時は、彼に関するかなり黒い噂が流れたと聞く。

だがそれも、彼の手腕とカリスマ性によるものか、第十五騎士団の規模が大きくなり、彼を支持する人間が増えていったことでやがて消えていったらしい。

「入室の許可が出ました。お入りください」

ここで、パーシヴァルの思考が途切れた。

気が付けば、先程の兵士が戻ってきている。

ミライナがすでに歩き出していたので、それに続くこうすると、

「失礼ながら、お腰のものを預からせていただきます」

「……これは失敬」

ある一定以上の位の人間に一般の騎士や兵士が城中で謁見する場合、所属を示す短剣を除き武器を持ち込むことは固く禁じられている。

パーシヴァルは軍刀^{サーベル}を外すと兵士に渡し、部屋の中に入った。

男はこちらに背を向けて立っていた。

執務室には採光のためか大きな窓があり、男の顔は窓の外へと向

けられている。

「第十五騎士団ミライナ・ハフスター、出頭しました」

「同じく、第十五騎士団パーシヴァル、出頭しました」

再度名乗るミライナと合わせ、パーシヴァルも名乗る。

男がこちらを振り向いた。

顔は窓からの逆光によって分らないが、着ているのは当然ながら帝国の象徴たる紫の長衣であり、襟元や裾には高い地位を示す銀のラインが走っている。左胸には、自分達が身に着けているのと同じ短剣が固定されている。

「足労をかけたかな？」

男の声を聞き、パーシヴァルはどこかで聞いた声だと思った。少なくとも一度、この男とはどこかで会っている。

男が動いた。窓の傍から、壁際にある机まで歩き出す。

机の後ろの壁には、九つの首を持つ大蛇——ヒドラの紋章が描かれた巨大な紫の布が張られている。伝説では、ヒドラは一つの首を切り落としても、傷口から二つの首が生えてくると言われる不死身の怪物であり、この国では第十五騎士団の旗印として知られていた。男が席に着いた。

そこでもうやく男の顔が判別できるようになる。

彫りの深い顔立ち、整えられた銀髪——

「君と会うのは二度目だな……一週間前のことを覚えているだろうか？」

男の言葉に、パーシヴァルはハッと気付く。

一週間前、パーシヴァルがヴィルジニア一派と街中で乱闘騒ぎを起こした際、ヴィルジニアの姦計によって兵士達に連行されかけたパーシヴァルに助け舟を出した人間がいた。

今、目の前にいる男こそが、まさにその恩人ともいえる人物であることに、パーシヴァルは気付いたのだった。

その衝撃から立ち直る前に、さらに続いた言葉がより大きな衝撃を伴ってパーシヴァルに追い討ちを掛ける。

「ようこそ、第十五騎士団へ……パーシヴァル・ライトナイツ君」

パーシヴァルは目を見開く。

——何故、その姓を知っている！

パーシヴァルは滅多なことでは自身の姓を他人に明かしたことはない。唯一、親方だけが知りえることだ。

それに——五年前、親方に二度目の弟子入りを志願したときに、パーシヴァルは家を捨てた。そのことを後悔したことは無い。自分よりも出来のいい弟がいたし、家は彼が継ぐべきだと——ひよつとしたら、父もそう思っていたのかもしれない。

家と決別した以上は、ライトナイツの名を名乗ることは許されない。そう自らに言い聞かせ、誰にも話さなかったことを——何故、二度しか会っていないこの男が知っている？

パーシヴァルの心内を知ってか知らずか、フェルナンドは口の端に笑みを浮かべている。逆にミライナは呆然とパーシヴァルを凝視していた。どうやら、彼女の方は今初めて知ったようだ。

そのまま、どれ程の時間が過ぎただろうか。ほんの数瞬か、それとも何分も費やしてしまったのか。受けた衝撃の大きさに、時間の感覚がほぼ麻痺してしまっていた。

「どこで、その名を……」

ようやくパーシヴァルは口を開いた。

相手は、特に表情を崩すことなく、

「君の事は調べさせてもらったよ、パーシヴァル君。もつとも、君を我が騎士団に迎えようと考えたときには、君から教えてもらった名前しか知らなかったがね。いやはや、私も驚いた」

などと平然と言う。

そのことが、パーシヴァルの中の得体の知れない不安を増大させているとも知らずに。

そもそも、何故自分について調べたのか、どのように調べたらその情報まで行き着いたのかが不明だ。

「ここのところ、雑務に追われて正式な挨拶が遅れてしまったが、

これからは我が騎士団の一員として、君の働きに期待してるよ、パーシヴァル君」

このとき、パーシヴァルとフェルナンドの目が合った。

その灰色の瞳からは、研ぎ澄まされた刃のような鋭い光が放たれている。

それを見た瞬間、心臓を鷲掴みにされたような錯覚が起きた。

まるで、自分が蛙で、目の前の人物が、途轍とてつもなく巨大な大蛇のような――言うなれば、それは自分よりも遥かに強大なものに対して抱く、恐怖にも似ていた。

フェルナンドは今度はミライナを呼び、何事か命じていたようだが、その内容が耳に入っても頭で理解が出来ない。

謁見が終わり、退室時に自分が何を言ったのかも思い出すことが出来ず、その後城の食堂で食べたものの味さえも分からなかった。

第十一話（後書き）

< D・W第十話制作秘話および裏話 >

前回で、ようやくD・Wにも女性キャラが登場しました……あ、登場人物紹介の方も、そのうちに更新します。

しかし、十話でやっと登場とか、それまでこの小説はただけ男臭い小説だったんだ……

で、男臭さを解消するために、ボルスの料理シーンをまた投入してみたんですが……またもや、友人には不評でした。

いったい、何が原因なんだろう。主人公が料理してるのが問題なのか、男が料理しているのが問題なのか、はたまた『剣と魔法のファンタジー』なのに料理をしているのが原因か……

答えは永久に謎のままですね……

第十二話（前書き）

活動報告の方で、久々にバトンを拾ってきました。

第十二話

ボルスは自分の荷に括り付けていた、自身の背丈ほどある包みを手に取った。

覆っていた布を解くと、親方が「ほおっ」と呟く。

「この剣を見て欲しいんだ」

ボルスは机の上に置いた。

それは、彫ってあった文字から？デスティニー？と名付けた、剣だった。結果として、ボルスはずっと持ち歩いていたことになる。

親方は差し出された剣を手取るが、持ち上げた瞬間、訝しげに首を捻る。目を細め、あらゆる角度から眺めると、ゆっくりと鞘走らせた。

抜き身の刃を仔細に見ると、

「？バスタード？の一種か」

「？バスタード？？」

聞き慣れない言葉を耳にし、ボルスは思わず聞き返す。

「？雑種？って意味っスよ」

答えたのは親方ではない。いつの間にか顔を見せていたフォラーズが、親方が剣を見ている後ろから眺めている。

「お前さんも剣士の端くれなら、剣の大まかな分類ぐれえできるだろう？」

「ああ、？斬る？剣と？突く？剣……だっけか？」

「それじゃあ、満点はやれねえなあ。フォラーズ、説明してみろ」

「俺っスか？」

ボルスと親方の問答を黙って聞いていたフォラーズが、突然話を振られたことに驚いた。

「何慌ててんだ。この程度のこと言えねえようじゃ、一人前は遠いぞ」

「言えねえってわけじゃねえよ。ただ急に指名してくるもんだから、

びつくりしたただけだ。

えっと、剣の分類について、だったか。さっきあんた……と、そういうや、あんたの名前を聞いてなかったな」

「ボルスだ」

「ボルスさんか。さっきボルスさんが言ったのも別に間違いってわけじゃない。ただ正確に言うなら、？斬る？のが得意な剣と？突く？のが得意な剣、ってこってス」

「得意？」

「ま、？斬る？のが得意な剣ってのは、？斬る？ことを前提にはしているが、実際別に突き刺せないわけじゃない。大抵の剣にはちゃんと切っ先があんだからな。ただ、？斬る？ことを考えたら、刃の部分で頑丈にしねえといけねえから、太くて厚い刀身ばかりになっちまう。」

逆もまた然り……？突く？方に拘りこたわやあ刀身が細くなっから、斬れないことはないが、そっちには向かない、と……こんなところでどうだ、親父？」

「ま、合格にしてやっか」

親方は嘆息し、再び剣に目を戻す。

「さて、問題のこの剣についてだが……フォラーズ、この間石屋が売り付けてきた砥石持って来い」

「この間のって、形が悪くて安値で売り付けられたあれっスか？」

「それ以外に何がある？ いいから持って来ねえか」

フォラーズが奥へと走っていき、親方は剣を手にしち上がる。

何をするのか、と訝しがっていると、

「本来なら、客の武器を勝手に振り回すのは鍛冶屋としては御法度なんだが……ま、こうした方が手っ取り早いんでな。許してくんな」
その言葉で、なんとなく相手が何をしようとしているのか分かった。

ちょうどフォラーズが砥石を抱えて戻ってきた。

「よし、そこに置け」

「え、いや置けって……」

「いいから置け」

二度も命じられたフォラーズが渋々と床に砥石を置いた。

それはボルスの目から見ても、きちんと加工されていないことが分かった。大抵は直方体かそれに類する形のはずだが、側面に奇妙な凹凸が付いている。

一方で、親方は剣を両手で握り、上段に構える。肩幅程に両足を広げ、どっしりと固定している。下半身がしっかりと上半身を支えていることで、決して揺れることがない。幾ら探しても付け入る隙すら見つからなかった。

ボルスの感心も束の間^{つか}だった。

親方が頭上に掲げられていた剣を砥石に向かって振り下ろした。

刃と砥石がぶつかり合い、薄暗い店内の中に火花が飛ぶ。

それと同時に悲鳴も上がった。

「何やってんだ親父いいい！ そんなことしちまったら、剣も砥石も駄目になっちまうだろおおおお！」

フォラーズが親方の行為を非難する中、親方もボルスも黙っていた。二人の視線は、どちらも砥石に注がれている。

その様子に気付いたか、フォラーズが喚くのを止め、砥石に目を向けた。その目が驚愕に見開かれる。

それもそうだろう。なんせ、砥石が真っ二つになっていたのだから。

親方が片割れを手にし、

「おっ、結構手ごろな大きさになったな」

と、切断面を確かめている。

ボルスが見る限りでは、無駄な傷ひとつなく、あの凹凸は綺麗に切り落とされていた。

それに見とれていたフォラーズが思いついたように、

「そうだ、剣、剣の方は？ 刃こぼれでもしてたら取り返しがつかんぞ！」

と、慌てて親方から剣を引^ひつ手繰^{たく}ろうとする。

それを見たボルスは、むしろ落ち着いて、

「ああ、たぶん大丈夫じゃないか？ この間それより大きな剣を叩き切^きって、傷も付かんかったし」

「……え？」

それを聞いたフォラーズが間の抜けた声を上げ、手を止める。

親方は剣腹を丹念に調べていたが、

「確かに、刃こぼれはおろか傷ひとつねえな。それにしても、剣をぶった切るたあ随分と剣呑な話だな」

「まあ、な……」

ボルスは考えた。この親方は深くは聞いてこない。しがし、ボルスが親方に頼みたかったのは、あの剣を調べ、その正体について少しでも近づくことだ。ここは、入手の経路を話すところそが近道になるだろう。

ボルスは腹を括^{くわ}った。

「実はな、その剣は最近拾^{ひろ}ったものなんだ」

「拾^{ひろ}った？」

「ああ、しかもその剣は、かなり曰^{いわ}く付きのものに思える」

「ほお……」

ボルスはこれまでのことをひとつ残さず話した。森の中で、行き倒れの男がいたこと。彼がその剣を持っていたこと。その日のうちに盗賊が襲^襲ってきたこと。その盗賊の狙^{ねら}いがその剣だったことを。

この話をしている間、フォラーズは声を上げたり、頻繁に表情を変えていたが、それとは対照的に親方は特に表情を崩^{くずれ}すことなく黙^{もく}って聞いていた。

すべて話し終えると、しばらくの間沈黙が場を支配した。

そこへ恐る恐る、といった感じにフォラーズが口を開く。

「な、なんか途方もない話っスね」

「だろうな。でも事実なんだ」

そう言い、ボルスは荷物の中から腕輪を取り出し、卓上に置いた。

「これは、その盗賊の首領が使っていた魔装具だ。これとあの剣が証拠、つてのは駄目か？」

あの剣とは、無論デステイニーのことだ。

ボルスは、盗賊の生き残りを逃がす際に、もしもの場合に備えて魔装具を取り上げていた。

「まあ、ここまで見せられちゃあ、お前さん^{めえ}の話を否定するわけにはいかねえな」

ずっと黙って成り行きを見ていた親方もようやく口を開いた。

「とりあえず、剣の話に戻すぜ。話を聞いた限りじゃ、こりゃあとんでもねえ代物のようだ」

「そういえば、さっきから気になってたんだが、？バスタード？って結局どういうことだ？」

「おっと、その辺の詳しい説明がまだだったか。さっきフローズが言ったとおり、剣つてのは？斬る？か？突く？、どっちかに傾いちまうもんだ」

ボルスは頷く。

「だが、この剣つてのはどっちにも偏ってねえ……どっちの特性も持つてる、いや優れてる、と言うべきか。つまり、？斬る？ためだけの剣でも？突く？ためだけの剣じゃない……どっちでもない……言わば、雑種、すなわち雑種の剣——バスタードソード」

「バスタードソード……」

「そうだ。まあ、俺も実物見るのは初めてだがな。

だが、この剣の本質はそこじゃねえ。こいつは図体こそ両手用の大きさだが、持ってみれば片手でも十分に振れる。その秘密は刀身にある……ちょっと、お前さんが背負ってた剣を抜いてみてくれ」

ボルスは先程料理する際、背負っていた剣を外していた。壁に立てかけておいた愛剣を手に取り、鞘から抜いて机の上に置く。

「こっちも中々な業物だな。大きさはこっちと似たようなもんだが……見ろ、刃の厚さが全然違う」

親方の言った通りであった。ボルスが肌身離さず持ち歩いている

剣に比べ、今親方が持っている剣は、遥かに刀身が薄いのだ。

「まあ、言わんでも知ってると思うが、斬ってる途中で^へ押し折れでもしたら、そりゃあ剣としての役割を果たしてねえよなあ。だから、刃を丈夫にしなきゃならねえ。そのためにはどうするか？　普通は、刀身を太く、厚く作るんだ」

「でも、そんなことをしたら、結局のところ剣自体が大きくなって、重くもなるんだろ？　それに刃を厚くしたんなら、斬り難くなるじゃないか？」

ボルスが親方の問いに対し答えると、親方は「そのとおり」と相槌を打つ。

「だから、俺達鍛冶屋は頑丈さと重さ、そして切れ味なんかを天秤に乗せてちょうどいいところを見極める」

口ではさらっと言っているが、それは口に出すほど簡単ではない、と思った。

ボルスは鍛冶に詳しいというわけではない。だが、その苦労をなんとなくは感じ取れた。

身近なところで例えるなら、野宿の際にやっている料理なんかが分かり易いだろうか？

たとえばスープを煮込むとき。具材は当然ながら食べやすい大きさに切るのだが、問題はその大きさだ。あまりに小さくし過ぎると煮詰めている途中でスープに溶けてしまいうし、逆に大き過ぎると火が通りにくくなる。

最初の頃はそのバランスを見極めるのに失敗したもののだが、何度か続けている内に自然と身に着いてきた。逆に言えば、そういったものを見極めるには、気の遠くなるような反復と経験を積むしかないのだ。

ボルスは親方の手元の剣――デステイニーに目を戻す。

あの剣はどうだろうか？

あれだけの薄さにも関わらず、一般の剣にも負けないどころか、それらを凌駕する切れ味を誇る。重量も抑えられることで、使い手

の負担も少なくて済む。

今、目の前にいる男は、永い間鍛冶に携わり、技術や経験を身に付けてきたのだろう。そんな人間から見たらあの剣はどう映るのだろうか？

あまり言いたくはないが、先程の驚愕や発言を聞く限り、あれほどの剣を打ったことはないのだろう。

そのことを考えれば、親方の心中は穏やかではないだろう……
そんなことを思ったボルスは、親方の顔を窺^{うかが}ってみたが——当の親方は何故かそれほど深刻そうには見えない。

自分のことをあまりに顔に出さないのか、などとボルスが考えていると、

「もつとも、この剣は使い手によつほどの力量がなけりゃ、使い物にならないな。振り回す前に、振り回されるのがオチだ」
などと、謎めいたことを親方が言い出す。

「おいおい親父、あんまりいい加減なことを言うなよ。話を聞く限りじゃ、この剣は、よく斬れて、丈夫で、軽い。この三拍子が揃ってるのに、何がいけねえんだよ？」

フォラーズが尋ねると、親方は鼻を鳴らして、
「そんな考えじゃ、まだまだだな。ボルス、だったか？ お前さんの方はどう思うよ？」

「悪いが、俺は頭はよくない」

と、ボルスが肩を竦めると、

「ハハハ、奇遇だな、俺もだ。それでも、これだけは言わせてもらうぜ。」

便利ってだけで優れてるって言えるんなら、この世の中はもっと単純で分かり易くなってるぜ」

「……時々親父って、訳分からんこと言うよな」

「喚くな、半人前。何事も経験だ、経験！ もっと精進しやがれ！」
親子のやり取りを見て、とりあえず一つだけ分かったことがあった。

親方の鍛冶屋としての矜持は、簡単には碎かれないようだ。そう示せるだけの力強さと言うべきだろうか……ボルスはそのことを感じていた。

「さて、この剣について俺から言えるのはここまでだな。むしろ、鍵を握るのはこいつを狙った盗賊の方か……何でもいい、なんか手がかりになるようなことはねえのか？」

そう言われ、ボルスは「そういえば」とあることを思い出した。

「あいつら、誰かに雇われていたような……」

「雇われてた？　なんでそんなに分かるんだ？」

「奴らのリーダーが言っていた……雇い主が、金の代わりにこの魔装具を渡した、って」

「ほほう」

一同の目が一斉に机の片隅に置かれた魔装具に向く。

「つてことは、これを辿ればその雇い主が分かるかもしれないねってことか！」

「そういうことになる……か？」

「でも生憎だったな。俺は魔装具は専門外だ」

「……打つ手なし、か」

はあっ、とボルスと親方は二人して溜息を吐く。

先程の親方の言葉で不貞腐れながらも事の成り行きを見ていたフローズが、

「ちょっと、それ見せてもらっていいっすか？」

「ん？　ああ……」

ボルスがフローズに魔装具を渡すと、早速調べ始めた。

どれだけ経っただろうか、あちこち調べていたフローズが、

「大体、見当が付いたな」

などと言い出した。

「なんだと！」

親方が素っ頓狂な声を上げ、椅子を倒して勢いよく立ち上がる。
「どういことだ、フローズ！」

「落ち着けて。ちゃんと説明するって」

フォラーズは一つ空咳をすると、

「まず、腕輪そのものは銀製だ。これだけで結構絞れる」

「銀？　それが何だってんだ？」

「親父、銀ってのは貨幣としての使用価値があるから、本来は魔装具なんかの材料には出回らねえんだよ」

「そ、そうなのか？」

「ああ。しかも、銀ってのは神聖な金属だなんてイメージがあっからな。御伽話おとぎばなしなんかにもあるだろ？　銀の武器で悪魔を追い払っただなんだって」

「え、そんなあったか？　なあ、ボルスよ？」

「俺に振るなよ。俺だって、そういうのには疎いんだ」

「……さっき、経験がどうこうって言ってたのは、どこのどなたでしたっけ？」

「う、うるせえ、先を続けねえか！」

親方が怒鳴ると、

「へいへい……さて、神聖な金属だなんて言われるぐらいだ。それを使うのも、大体想像つかねえかねえ？」

そのときボルスが「あ！」と声を上げた。

「お、ボルスさんは分かったみてえだな」

「い、いや……だが、仮にそうだとしても、何で剣を欲しがるんだ？　なんかの間違いじゃないのか？」

「間違い？」

「うーん……そうだ、例えば信心深い貴族かなんかが真似て銀で作った、とか」

「おお、確かにその線もあるな！」

ボルスの言い分に、親方も賛同する。

「ま、そう思うのは仕方ねえか……だけど、極め付けがこれだ」
そう言ってフォラーズはある一点を指し示す。

そこは腕輪の内側で、身に着けているときは絶対に他者の目から

は見えない部分だ。

フォラーズが指した場所には、大小二本の線が、直角に交じり合った紋が彫ってあった。

「おい、こいつは……」

親方が絶句する。

それもそうだろう。何故なら、それが意味するものを知らない人間は誰一人としていないのだから。

ボルスは身震いした。

それは、決して夏なのに肌寒い、この国の気候だけが原因ではない……

第十二話（後書き）

友人から、「後書きの無い小説は、皮の焼けていない魚みたいなものだ」と言われました。

……なら本編は価値無しかい。

<D・W第十一話制作秘話および裏話>

第十一話にて、ついにパーシヴァルの上官であるフェルナンドが出てきましたね。

これで、第六話の最後にパーシヴァルを救ってくれたのが誰か、何故パーシヴァルが騎士団に配属替えになったか、が分かったと思います。

さらに、パーシヴァルの本名も明かされました。これらが一体どんな意味を持つのか、徐々に明かされていくことと思います。

……え、思いの他今回の後書きが普通？ ネタやれって？

無理言わないでください。そう簡単にネタが思いつくわけ無いじゃないですか。

あの『ドロリ』事件以降、やたら後書きを楽しみに見に来る人が増えてますが、はつきり言って、普段の私にはユーモアの欠片もありませんよ。

あの後書きだって、私が面白いんじゃないんです。友人の発言が面白いんです。そちらの理解の方をよろしくお願いいたします。

※『ドロリ』事件……第三話後書き参照。端的に言えば、第二話のボルスの料理シーンに『ドロリ』なる表現が入ったために、友人とこの小説が十八禁か否かで揉めた事件。壮絶な死闘の末、件の表現を無くすことで決着が着いた。

第十三話

鬱蒼^{うつそう}と茂る森の中は、小鳥のさえずりを除けば静かなものだ。

だが、その森の中では、いつもとは違う異様な光景が繰り広げられていた。

「？レイ？」

コマンドワードと共に放たれた一筋の光線が、男の胸を貫く。

「げえええええ！」

男の絶叫が静寂を引き裂いた。驚いた鳥達が、次々と枝から飛び去っていく。

男の胸からは黒い煙が出ていた。肉の焦げた臭いが辺りに広がる。男は倒れた。だが、倒れているのは一人だけではない。他にも何人かの男達が地面に身を伏せている。身体の一部を焦がしている者、あるいは切り裂かれたもの、身体の内から血を流している者……その死に方は様々だ。

「ひ、ひいいい……」

そんな光景を見て、悲鳴を上げる者もいた。

二人の男が、地面に尻餅を着いている。彼らの着ている革鎧は、倒れている男達の血を浴び、真っ赤に染まっていた。手を下したのは決して彼らではない。

倒れている死体を見下ろしている別の集団がいた。全員が白い法衣をまとい、胸元には十字架が染め抜かれている。その中にただ一人、法衣ではなく純白の鎧を装着し、杖を持つ代わりに腰に帯剣していた。彼の鎧にも十字架が刻まれており、その姿はさながら白の集団を守る騎士、といったところか。

普通なら、彼らを見れば多くの人間が拝めるのだが、幸か不幸かそこにいるのは白の集団と、それに怯えている男二人だけだ。

集団のうち一人が動いた。先程胸を撃ち抜かれた男の傍に立ち、持っている杖の上端に右手を添える。杖に仕込まれた細剣が抜かれ

——男の首に突き立った。

倒れた後も続いていた、男の痙攣が止まった。

仕込み剣を収めると、他の者達も一緒に男達に歩み寄る。地面は赤い海当然になり、辺りには血の臭いが漂っているのにもかかわらず、彼らは落ち着き払っている——否、関心を向けていない、というべきか。

凄惨に死に絶えている男達と、それを気に留めることなく毅然^{きぜん}と立っている法衣の者達……果たして、第三者から見たらどちらが異様に見えるのだろうか。

「う、うわああああ！」

男の一人が、半狂乱になって走り出した。少しでも早く、自分に迫る脅威から逃れるために。

——もつとも、逃げ切れたらの話だが。

「? エアスラスト?」

別の法衣が、抑揚の無い声で魔術を放った。

森に一瞬、突風が吹いた。

風が止むと同時に、男の足も止まる。

次の瞬間、男の頭が地面に転がった。一拍遅れて、傷口から鮮血が噴き出し、地面を赤く染め上げた。血走った目が、見当違いな方向を見ている。

「さあ、残るは貴方のみ……」

法衣の集団の中から、騎士が歩み出した。腰の剣に手を添え、迷い無い歩調で男に近づく。

その時、男が耐えかねたように、

「ま、待ってくれ! 剣の、剣の在り処^{あか}を教えるから! い、命だけ……」

と叫び出す。

騎士がぴたりと足を止めた。

「在り処?」

「そ、そうだ。確かに、今は俺達の手元には無い……だ、だが今持

つてる奴は知っている!」

男は、生き延びたい一心で、必死になって主張した。

「詳しく話さない」

「お、俺達が宝物庫からあの剣を盗んだ後、仲間の一人が勝手に持ち逃げしたんだ!　すぐにジーンの旦那とデニムの旦那が追いかけて仕留めたが、その時には別の奴の手に渡っていた!　俺達はそのつから取り戻そうとしたが、そいつが滅法腕の立つ野郎で、旦那達はおろかりーダーまで返り討ちにされちゃった!」

「それで、貴方達はおめおめと逃げてしまった、と?」

「し、仕方ねえだろ!　相手は木一本を剣で切り倒すような野郎だ!　俺だって、木に足挟まれてもう駄目だと思ったよ!

だが、どういうつもりか、あいつは俺を助けた。その上、見逃してもらっちゃったんだ、こっちは戦う気は失せるし、また襲ったところで殺されるに決まってる!　なのに、何であれ以上戦えってんだ!」

「言いたいことは分かりました。では、その男の特徴は?」

「それは……暗かったから分かりにくかったが、そいつが着てる鎧がやたら派手な色をしてたな」

「派手?」

「ああ、あいつの鎧は、どういうわけか青色してやがった……あんな色、いざ戦いになったら弓や魔術の好いのだろうに……」

「他には?」

「……そういや、助けられたときに、ちらっと顔を見たが……目の色が……」

「目の色?」

「目の色も青かったな……それも、よくあるような緑掛かった色じゃねえ、本当にその中に青空が広がってるような……」

「そうか」

騎士はただ淡々と応える。

それに気付いてないのか、男の方は、

「な、なあ、全部話したんだ、命は助けてくれるんだろ？」

などと未だに懇願していた。

一方で、騎士の関心はすでに男から離れ始めていた。

「なあ、おい——」

「神は言っている……」

唐突に騎士は口を開いた。

男の方かというと、命を助けてもらえるのだと思い、今は下卑た
笑いを浮かべている。

しかし、次の言葉を聴いた途端、その表情が凍り付いた。

「己の役割の果たせぬ者に、生きる価値は無い」

その時になって、ようやく男は悟った。

元より、自分を生かせるつもりが、相手の心内になかったのだと
いうことに。

騎士が右手を男に向ける。その腕には、銀の腕輪が嵌められてい
た。

「ひいつ、ま、待て——」

「その命、神に返しなさい！」

男がさらに何か言おうとするが、すでに手遅れだった。

騎士の右手に魔力が集中する。彼の脳裏には、断罪の業火が、愚
かな背教者を焼き払う光景が想像されていた。

そして、その口から最後の宣告が発せられた。

「威き焰よ、汝に触れし者に制裁を与え、彼の者に安息と言う名の
牢獄を……？イグニートプリズン?!」

「い、嫌だ、死にたく——」

男の言葉は最後まで続かなかった。

男の周りに幾条もの炎の柱が上がり、それらが肥大しながら螺旋
を描き、男を飲み込んだ。

「ぎやあああああ！」

男の命乞いが、断末魔に変わった。

当の騎士は、元々そこには何もなかったと言いたげに男に背を向

け、

「終わりました」

と、自分の属する白の集団に向けて言った。

その中から一人が、

「ご苦労」

と労う。

その男の服装も周りと同じ白の法衣だが、よく見れば他の者と比べ材質が上であることが分かる。口元には、豊かな髭を蓄えていた。「今、あの剣を持つ者が分かっただけでも良しとするが……その者、一体何者か……」

「閣下」

男が呟き同然に言ったことに、法衣の中の一人が反応する。

「なんだ」

「青の鎧と聞き、一つだけ心当たりがございます」

「ほう」

男は髭を弄りながら、目線だけで「続けろ」と命じる。

「その者、もしかしたら？ランツクネヒト？やもしれません」

「聞き慣れぬ名だな」

「ここ一、二年で名が通り始めた傭兵です。噂によれば、青い鎧を着て自身の背丈ほどの剣を振り回し、一心不乱に相手に斬りかかる、命知らずな剛の者とか」

「評判は？」

「良いとも悪いとも言えません。彼の者は一箇所に留まろうとせず、頻繁に雇い主を替えるそうです。時には、前日まで使っていた相手が、次の日には敵になるほどとも……」

その一方で、雇われている間は、先に述べたような己の命も顧みぬ戦い方をすることから、そこを評価している者もいるようです」

「ふん、なんにせよ、高だか相手は傭兵だ。信仰心よりも金への執着心の方が強い……違うか？」

男の言葉に、口出しする者は一人もいなかった。

「まあいい……とにかく、そやつを捜し出して、剣を返してもらおう……いざという時は、始末しろ」

「〔御意〕」

一斉に応えると同時に、白の集団は森から姿を消した。

そこに残ったのは、無残な姿になった盗賊達の成れの果てだけであつた。

第十三話（後書き）

< D・W第十二話制作秘話および裏話 >

前回の話は、ほとんどボルスと親方の会話で終わりました。

第十二話冒頭のボルスの台詞「この剣を見てくれないか？」について、友人からいろいろ言われました。

以下、友人との会話の一部です。

友「この台詞だが、もうちょい他の言い方があったんじゃないか？」
私「そうか？」

友「たとえば……指で剣腹を弾いて『良い音色だろ？』って聞いて……」

私「（すでに嫌な予感がしている）聞いて？」

友「死ぬ間際にこう言うんだ……『あの剣をキシリア様に届けておくれよ……あれは……良いものだ』と」

私「初代ガ●ダムのマ・クベじゃねえか！ 知ってる奴何人いるんだよ！ 第一、キシリア誰だよって思われるじゃねえか！」

友「ダメか」

私「ああ」

友「なら、こうだ……『この剣が……この剣達が俺の剣だ！』」

私「それ『お前達が俺の翼だ！』のパロディだろ！ 第一、剣の数増えてんじゃない！」

友「これもダメか……なら、『俺が剣だ！』」

私「またガ●ダムのパロディかよ！ しかも、意味分からなくなってるし！」

友「この剣と契約して、魔法少女に——」

私「言わせねえよ！」

友「なら、件の台詞のままでもいい。そして、すぐに親方の台詞！」

私「？」

友「すごく……大き——」

私「下ネタじゃねえか！」

……最後の文と同時に、何人かのファンが離れていった……

次回、第四章へ教団へ

第十四話（前書き）

<これまでのDestiny・Warsは！>

「ようこそ、第十五騎士団へ……パーシヴァル・ライトナイツ君」

謹慎の身から一転、騎士へと昇格したパーシヴァルは、ついに謎に包まれていた騎士団長の正体を知る！

「この剣を、見てくれないか？」

一方、ボルスは？Destiny？を鍛冶屋に持ち込み、情報を入手しようとするが、そこには驚くべき事実が隠されていた！

「その命、神に返しなさい！」

そして、その剣を求め暗躍する謎の集団！

その出会いは果たして？偶然？なのか、それとも――

第十四話

「この村から出て行け！」

老若男女問わず、集まった全ての人間が次々と石を投げる。

彼らの矛先は、一人の青年に向けられている。

青年は自分に向かって投げつけられる石を、避けようともせず
に黙って身体で受け止めている。そのうち、一つが頭に当たった。

赤い線が一筋、青年の頬を伝って地面に滴り落ちる。

それでも無言で耐え続ける青年の視線の先には、青年と同じ青い
革鎧を身に着けた男がいた。

その男はまるで異物を見るような無感情な目で青年を睨み付けて
いる。

そして、その口から放たれた言葉は、周りの罵声よりも遙かに越
えるほどの怒りが込められていた。

「お前なんかが、俺達に関わるべきじゃなかったんだ……お前のよ
うな——」

カチッ、という音が空気を震わせた。

打ち付けられた火打石から火花が飛ぶが、竈にくべられた薪に火
が点く様子は無い。

着ている服から綿埃を取り、薪の上に乗せる。本来なら火口（柔
らかい布に油やアルコールなどを染み込ませたもの）を使うのだが、
どこに置いてあるか分からないので、綿埃を代用としているのだ。
さらに何度か火打石を打ち付けるものの、まったく変化は見られ
ない。

少々イラつきながら、もう一度打ち付けようとしたとき、

「?ファイア?」

と、背後からの声と共に、薪に着火した。

振り向くと、この店の親方が立っていた。今のは、親方が魔術を

用いたのだろうか。

「随分と早いなボルス。さすがにあんな部屋じゃ眠れなかったか？」

——昨日、ボルスは親方達に剣を見てもらった後、空き部屋があるから泊まったかどうかと親方に勧められた。最初こそ断ろうと思っていたものの、宿を決めていなかったことと、彼の押しの強さもあり、結局その好意に甘えることにしたのだった。

「そんなことはない。ただ、こういう仕事してると、どうしても朝が早くなるんでね」

などとボルスはとぼけてみるが、実際のところは少し異なる。

普段野宿してばかりのボルスからすれば、屋根の下で寝られればマシな方なのだ。特に今回は使っていない部屋とはいえ、手入れをされ、寝具を借りれたのだから、条件としては最高であるといえる。

だが、それだけの好条件にもかかわらず、熟睡することは出来なかった。

その原因は自分にも分かっていた。昨夜見た夢の内容——それは未だに脳裏にチラついている。

「いけねえ、寝坊しちまった！」

「ドジが！ 今度こそ親父にクビにされるぞ！」
慌しい足音と共に厨房に駆け込む者がいた。

「よお、今朝は随分と賑やかじゃねえか」

「ひえっ！」

そこに親方がいるとは思わなかったのか、レドが悲鳴を上げた。

「お、親父、いやこれには訳が……」

その隣では、フォラーズがあれこれと言ひ訳を考えている。

親方は嘆息し、

「まあいい。今日は勘弁してやっから、とっとと客人と替われ」

「「へ？」」

二人は間の抜けた声を上げた。そしてようやく鍋を煮込んでいるボルスに気付いたようだ。

「きゃ、客人！ いったい何を……」

「ん？ カラス豆とレンズ豆があつたからスープにしたんだが……ひよっとして、豆嫌いだった？」

「い、いやそんなんじゃない……と、とにかく替わりますから、客人はゆっくりしててくださいえ！」

そう言つてレドがボルスからお玉をひったくる。

「ああ、あんま慌ててかき混ぜたりすんなよ。豆つてのはゆっくりじっくり煮詰めないと味がスープに溶けないんだ」

「分かりやした！」

ボルスは一息つくと、

「さて、パンとか無いけど、どうすりゃいいんだ？」

「ああ、パンは毎日行きつけの店で一日分買ってくるんすよ……じやなくて！ あんた朝っぱらから何してんスカ！」

フォラーズの問いに対し、ボルスは胸を張って堂々と答える。

「料理」

「見たら分かるっス！ 問題なのは客人のあんたが何で料理してんのかってことっス！」

「ああ、そっち？ やっぱり、他人の俺が台所を弄いじくるのはよくなかったか……すまない」

「いやいやそうじゃなくて！」

フォラーズがあれこれと叫んでいると親方が、

「まあ、いいじゃねえかフォラーズ。本人がやりたくてやってることなんだしよお」

「そういう問題でもないだろ親父！ 俺達がやらなきゃならんことを客人に押し付けてんのが問題って言つてんだ俺は！」

「おいおい、俺は別に押し付けられた覚えは——」

「客人は黙つててくれ！ 話がややこしくなるから！」

あまりにも多く喋り過ぎたせいか、フォラーズがゼエゼエと肩で息をし始める。

「まあ、落ち着けてってフォラーズ。ただ単に客人が義理堅いってだけだろ？」

「義理堅い？」

「おうよ。昨日だって手当ての礼だって昼食作ってくれたじゃねえか。今朝のはさしずめ『一宿一飯の恩義』ってところか？」

親方はそんなことを言いながらボルスの方を見た。

「いや、そんなつもりは……」

「ま、聞かれて『はい、そうです』なんて答えを期待しちゃあいねえよ。ただ、働きてえってんならやらせてやらあ。とりあえず、服用意するから着替えてもらうぜ。あと、パン以外にも買わなきゃならんもんもあつから、荷車を使ってくれ」

「本気かよ親父！」

「どうせお前は腕え怪我してんだ。人手があつた方が助かるだろ？」

「そ、そりゃあそうだが……」

「それとも、お前がお目当てのパン屋のマリーちゃんに会うのに、別の男がいると邪魔か？」

「げえっ！ お、親父何でそれを……」

「知らねえと思つてたのか？ お前のことはお見通しだ」

さらに、スープを混ぜていたレドが、

「ああ、ちなみにマリーちゃんは恋人が出来たみたいだぜ」

と、フォラーズに追い討ちを掛ける。

「何い！」

「ほお、初耳だな。相手は？」

「大通りの宿屋の一人息子だつてさ。なんでも、そいつが腹あ決めて告白したら、マリーちゃんの方も実は想いを寄せてたとかで。ま、俗に言う相思相愛って奴だな」

「嘘だああああ！」

フォラーズは、まるでこの世の終わり、とでも言いたげな絶望し切った表情で断末魔を上げた。声が止むと、そのまま横倒しに床へ突っ伏した。

「お、おい大丈夫か？」

ボルスは思わず声を掛けたが、当のフォラーズの方は、

「お、終わりだ……は、ハハハ……」

などと呟いている。その目も、どこか虚ろだ。

ボルスは親方の方を向いて指示を仰ぐが、親方は黙って首を横に振った。

「そんな……」

「悲しいけどこれ、失恋なのよね」

レドがぼそりと言うが、フロラーズの耳に届いているが、正直怪しい。

「まあ、しばらくすりゃ元に戻るだろ。さて、服貸すから付いて来い」

「あ、ああ……」

親方とボルスが出て行き、厨房に残ったのはスープを煮込み続けるレドと、倒れたままのフロラーズだけだ。

「二人とも行っちゃいましたよ。いつまでそのままだい気ですかい？」

レドが顔も向けずに声を掛ける。

フロラーズはむくりと起き上がると、

「慰めてくれたっていいじゃねえかよお！」

と叫んだ。店中にその声は響くものの、誰も応えようとはしなかった。

第十四話（後書き）

< D・W第十三話制作秘話および裏話 >

——更新した後、友人と行った会話——

私「ちなみに、胸を貫かれたのが、第二話でボルスに鳩尾を突かれた盗賊で、首を刎ねられたのが焚き火に頭から突っ込んだ奴で、最後に燃やされたのが第三話でボルスに助けられた盗賊ね」

友「へえ……って、分かるかあ！」

第十五話

フォラーズが、店の主と値段で掛け合っている。ボルスはその様子を荷車にもたれかかりながらのんびりと眺めていた。

やがて、互いに決着が着いたのか、フォラーズが品物を右腕で抱えてこちらに戻ってきた。

周りでも、朝食の材料を買い求める者、あるいは店で出す品の原料を選ぶ人間と店主との交渉が行われ、賑やかだ。

「さて、これで全部だ。そろそろ戻るぜ」

「分かった」

荷を乗せ、ボルスは荷車を引いて歩き出す。

「そういや、ボルスさんって、何で旅してるんスか？」

「ん、ただなんとなく、だ。一箇所に留まるのが好きじゃないんだな」

ボルスは曖昧に答える。

「ちなみに、今まではどんなところに？」

「まあ、東の方ばかりに行ってたかな」

「東の方って、ちょっと前まで紛争が絶えなかったっていう？」

「物知りだな。ま、おかげで食うのには困らなかったな」

北部地方は大半をザミル帝国が支配しているものの、東部は未だに覇権を巡り小国同士が衝突を続けていた。

「聞いた話じゃ、？教団？の支配が届いてねえ国もあるらしいっスね」

「……昨日も思ったが、そういう話って、どこから？」

「ああ、うちは鍛冶屋の上に武具を中心に取り扱ってるから、客は大抵城の兵士か傭兵とかだね。世間話してるとそういった情報を耳にすることもちよくちよくと——」

そんなことを話していると、後ろから男が「ごめんよ」と二人を追いつ越そうとした。危うくフォラーズにぶつかりそうになり、

「おい、危ねえな」

と、フォラーズが男に文句を言った。

男の方は「すまん」とそのまま走り出そうとしたが、ボルスはその背に向かつて尋ねる。

「急いでるみたいだが、何かあったのか？」

「いや、この先で？教団？が演説やってるらしくてよ、それを見に行くところなんだ」

そう言い残し、男は走り去っていく。

ボルスとフォラーズは顔を見合わせ、

「噂をすりゃあ何とやら……どうする、ボルスさん？」

「どうって……まあ、あれの一件もあるしな……」

「よっしゃ、遅れた理由は俺から親父に説明しとくぜ」

二人が行き着いた広場では、人だかりができ、その向こうでは白い法衣を着た集団が立っている。

「聞かれよ、神に愛されし者達よ！　そして神に力を与えられし者達よ！　

我らが身に宿りし力は神の力……これを？魔力？と呼び、恐れを抱く者もいるだろう！　

しかし、恐れる必要はない！　何故なら、この力は神が我らを愛している証……我らは、この神の恩恵に感謝し、祈りを捧げ、正しき道を歩めばいいのだ！　

そうすれば、神はいつまでも我らを見守ってくれるだろう！」

法衣の中でも中央に立っている男が熱弁を振るう度に、周りの民衆からは歓声が上がった。

彼らの着る法衣には十字架が染め抜かれ、教えを説き続ける男の手首には、銀色に輝く腕輪——魔装具が嵌められている。

神の教えと称して延々と民衆に演説する教団、そしてその言葉を熱心に聴く人々——彼らを遠巻きに見ながら、ボルスはウンザリと

していた。

教団——それは、このグラン大陸で最も巨大な宗教団体のことである。

人間は生まれたときから大なり小なり？魔力？という力を持つ。それによって人々は奇跡とも言うべき力を使い、それを戦闘目的に発展させた？魔法？なるものも作られてきた。

そんな中、「魔力は本来神の力であり、我らは神から力を与えられた」という考えを持ち出し、拝め始める集団が現れた。

神から与えられた力なのに、何故魔力か、といえば、その力は正しい方を誤れば魔にも邪にもなるから……ものは言い様による、ということだ。

だが、その主張は多くの者に受け入れられた。

何故なら、魔力を持たない人間そのものがほとんどいないからだ。その集団は信者を増やし、特に迫害を受けることもなく組織は巨大化、ついにはその集団が自治する都市までもが誕生し、他国の政治にすら影響を与える存在となった。

その頃には神の教えを伝える者——教団なる名前が付けられ、人々の心に根強い支配力を植え付けていた。

しばらくそんな光景を眺めていたが、ボルスは一つ溜息を吐くと、

「そろそろ行くか。あんたも仕事あるだろ？」

「なあに、今のところ俺一人かけたところで問題はねえさ」

そう言ってフォラーズは首から吊った左腕を揺らす。

「それに……昨日俺が言ったことの確証も大体掴めたる？」

「まあな」

ボルスは再び人混みの向こうで演説している男——正確には、その男が身に着けている銀の魔装具に眼を向けた。

その時だった。

「天誅！」

怒声とともに雪崩込んでくる影があった。

驚いて声のした方を見ると、何人もの男達が、武器を構え、教団の人間に向かって駆けていく。

「うおおっ、邪教に裁きを！」

「我らに自由を！ 正義を！」

「その罪、死で購ええええ！」

彼らは叫びながら持っている武器を振り回した。教団の演説を聴いていた民衆がそれに巻き込まれる。

集団がついに法衣の面々に達し、剣が振るわれた。白い法衣が鮮血によって真っ赤に染まるのが、遠くからも見て取れた。

悲鳴が上がった。辺りに集まっていた人々が我先にと逃げ出す。

その間も、乱入者達は「天誅」と異口同音に叫び、教団の人間だけでなく、集まっていた民間人にまで襲い掛かった。

悲鳴と怒号が交錯する中、教団の一人が叫ぶ。

「？魔法不能者？め！ 神に抗うか！」

その言葉に、ボルスは身を固くした。

人間は、生まれたときから魔力を持ち、それを利用して魔法を放つ。

だが、例外もいた。

魔力が極めて少ない、あるいは元から持っていないために、魔法が使えない人間がいた。

人々は、畏怖、そして蔑視を込めて彼らをこう呼んだ――魔法不能者、と。

やがて、彼らは社会から見放された。

魔力は神の恩恵と謳^{うた}う教団の威光が強くなるにつれ、彼らへの風当たりも強くなっていく。職も、食べ物も、住む場所も無くした彼らの怒りの矛先は、全てを奪った世界へと向くことになる――

「……さん！ ボルスさん！」

肩を揺さぶられ、ボルスはハツとなる。

「魔法不能者の暴動っス！ このままじゃ巻き込まれる！」

フォラーズがその顔に焦りを浮かべ、必死に訴えかけてくる。

「あ、ああ……」

フォラーズに引っ張られるままに、ボルスが足を動かそうとしたその時だった。

ほとんど逃げていったのか、疎^{まば}らになった人混みの間から、男の一人が剣を振り上げているのが見えた。

彼が見下ろす先には、這い蹲^{すま}って必死に男から距離を取ろうともがいている女性の姿があった。女性はその顔に恐怖を浮かべ、それと対照的に男の方はニヤついている。

ボルスは男の意図するところを察した。

「やめろおおおおお！」

ボルスはその瞬間、フォラーズの手を振り払い、男に向かって走り出した。

第十五話（後書き）

> D・W第十四話制作秘話および裏話<

……ついカッとなってやってしまった。だが、私は謝らない。

> 教えて！ 梅院先生！<

はい、始めました、新コーナー「教えて！ 梅院先生！」
こちらでは、読者の皆様から送られました質問に対し、ネタバレにならない程度に答えるコーナーとなっております。

というわけで、まずは友人のHさんからの質問です。

Q 第十四話で名前だけ出た「マリーちゃん」の元ネタは何？

A 元ネタ？ ありません。

強いて言うなら、適当な名前が思い浮かばなかったので、本当に資料を読んで適当な名前を付けました。

ということ、これからも登場する予定はまずありませんし、萌え要素なんて一マイクロモルも期待してはいけません。

……というわけで、また来週！（逃げた）

> 告知<

新コーナー「教えて！ 梅院先生！」で紹介する質問を募集して

おります。

コメントにでも書いてくだされば、可能な限りお答えいたします。
どしどし応募ください。

第十六話

「やめろ！」

ボルスの叫びに気付いた男が声の方向に顔を向ける。

その時には、ボルスの右拳が男の顔に向けて突き出されていた。殴られた男が吹っ飛ぶ。

ボルスは倒れている女性を起き上がらせ、

「逃げろ！」

「え、あの……」

「早く！」

その女性はボルスの剣幕に驚いたか、その場から走り出した。

不意を突かれた男は、気絶したのかそのまま起き上がる気配がない。

一方で異変に気付いた男達がこちらに向かってくるのが見えた。

ボルスは反射的に右手を背中を伸ばしたところで、今自分が剣を持っていることに気付く。

今ボルスが着てるのは、いつも身に着けている革鎧レザーアーマーではない。鍛冶屋の親方から借りた作業着である。

仕方なく素手のまま構えようとするボルスだったが、あることに気付いた。

相手の顔は、こちらが抵抗し一人倒しているのにもかかわらず、笑っている。それに合わせ、武器の構えも隙だらけだ。要はこちらが一人で、かつ武器を持っていないことに油断せましているのだ。

先頭の男が、こちらに切っ先を向けながら迫せまってくる。突き刺すつもりか。

ボルスは敢えて避けようとはせず、むしろ男に向かって駆け出す。突然のボルスの行動に意表を突かれたか、男は慌てて切っ先を突き出す。しかし、特に狙いが定まっていなそれを回避するのは容易だった。逆に攻撃が避けられたことで体の泳いだ男の足に右足を

引っ掛けると、男は呆気なく転ぶ。

今度は二番手が上段に振りかぶって突っ込んできた。

だがボルスは焦らない。

男が剣を振り下ろす寸前に、両手で男の両手首を掴む。速度が乗る前に止められた結果、男とボルスは奇妙な態勢で睨み合うことになった。

男がボルスの腹に蹴りを放ってきた。

ボルスは蹴り飛ばされた―――ように見せかけ、男の足が当たる直前にその身を背後の地面に投げた。ただし、掴んだ手だけは放さずに。

そうすることで、自身へのダメージを最小限に抑えると同時に、蹴られた勢いを足して、相手の両腕に体重を掛ける。ボルスに引っ張られるようによろめいた相手の腹に、今度はボルスが右足を掛けた。地面に背中が着いた時、勢いそのままに相手を投げ飛ばす。さらにその反動を利用して後転し、片膝立ちの姿勢で上体を起こした。その手にはいつの間にか奪い取っていた剣が握られ、それを一閃する。

ボルスに斬りかかろうとした三番手の男が、左足を斬られ、その場に倒れた。

ボルスは剣を逆手に握ると、背後に突きを放つ。

「げええええええっ！」

肉を断つ感触とともに絶叫が響いた。

振り向くと、最初に突っ込んできた男の鳩尾みぞおちを剣が貫いていた。

男の断末魔を聞いたか、さらに何人かの男達がこちらに向かってきた。

ボルスは刺した剣を手放すと、すでに絶命している男の手から剣をもぎ取る。

その時、新たな喚声が上がった。

見れば、鎧を着た兵士達が駆け付け、次々と魔法不能者達に斬りかかる。中には、紫の板金鎧プレートアーマーを着た騎士の姿もあった。

ボルスを囲んでいた男達が慌てだす。

「くそ、こんなにも早くに来るとは！」

「どうする？」

「撤退だ！」

男達が動こうとするとところに、ボルスが進路を塞ぐ。

「邪魔をするな！」

男の一人が叫んだ。

ボルスとしては、軍が駆け付けた時点でこの場を去るつもりだった。だが、ここでこの男達を逃がせば、さらに被害が広がるだろう。

ボルスは剣を構えた。

男達がボルスに殺到したとき、

「大地の怒りよ、汚れし者達に裁きを——」

と、詠唱するものがいた。

ボルスはその声に危険を感じ、咄嗟とつさにその場から離れようとする。しかし、遅かった。

次の瞬間、ボルスが先程までいた地面が破裂した。襲い掛かってきた男達はおろか、ボルスもその衝撃に巻き込まれ、地面にその身を打ち付ける。

「どうだ、魔法不能者ども！」

白い法衣を着た、教団の一人が杖を振り上げ、喝采を上げた。

どうやら、男達が集まったところをまとめて魔法で片付けようとしたらしい——引き付けていたボルス諸共もろども。

予想通りの結果だったのか、法衣の男は喜んでいいる。そのためだろうか——背後から迫る男に気付いていない。

「死ね！」

男の握る剣が白い法衣を切り裂いた。斬られた男は、何が起きたのか分からない、とその顔が語っていた。

さらに、さっきの魔法を受けたはずの男達の内何人かが身体を起こす。

「くそ、舐めた真似を……」

男達の様子からして、それほど効果はなかったようだ。

一方、ボルスは身体のアチコチを打ち付けたせいか、すぐには動けそうになかった。

男達はボルスに近づき、

「こいつのせいで同士が何人もやられた。どうせなら、撤退する前にこいつを見せしめにしないか？」

「そりゃあいい」

と、剣の切っ先を向けてきた。

——ガラにもないことをした報いか。

ボルスが覚悟を決めかけたとき、ボルスと男達の間、何かが飛来した。

男は咄嗟に剣で弾きながら、

「何者だ！」

と、誰何の声を上げる。

ボルスの目線の先には、紫の鎧を身に着けた、長い黒髪の騎士が立っていた。

暴動の鎮圧に派遣された兵士に混ざり、パーシヴァルを含め騎士団から何人か駆け付けていた。

だが、パーシヴァルは教団に対する反乱であると聞いたとき、内心やる気を無くしていた。というのも、パーシヴァルはそれほど教団に対する信仰を持ち合わせていなかった。正直なところ、教団の問題に巻き込むなど叫びたくなったほどである。

よって、ほかの騎士達が魔法不能者達に積極的に挑む中、パーシヴァルは一人、後ろで巻き込まれた民衆の避難に努めていた。民衆が襲われれば、適当にあしろう程度のことはしたものの、基本的に自分から闘うようなことはせず、逃げ遅れた人間の避難を優先させていた。

そんな中、突然の爆発音が響いた。

何事かと見てみれば、見知った顔を見つける。

躊躇^{ちゆうちゆう}の末、他の兵士を捉^{つか}まえては残りの避難を任せ、単身駆け付けたのだった。

しかし、どういうわけか、その青年は昨日着ていた青い革鎧ではなく、いつも行く鍛冶屋の作業着（もつとも、少し前まで自分も着ていたが）を身に着けている。

「なんだ貴様、たった一人で、まさかヒーロー気取りでもあるまい？」

男の一人がせせら笑った。こちらが一人で来たことに余裕を感じているらしい。

パーシヴァルは嘆息しつつ、答えてやることにした。

「別にそんなつもりはないね」

ま、助けるのが妙齡の美女だったら話は別だが、と付け加える。

だが、そのふざけた答えに、相手は苛立ったようだ。

「ちっ、こいつから片付けるぞ」

全員の注意がパーシヴァルに向かった。

パーシヴァルは、柄に手を伸ばしてこそいないものの、いつでもサーベルを抜けるように身構えている。

――さて、どうしたものか。

一応、支給された魔装具を装備しているものの、あまり強力な魔法を使うことは出来ない。あの青年を巻き込む可能性があり、そもそも相手が詠唱する時間を与えてくれるとは思えない。

魔法不能者は魔法が使えない。だからこそ、彼らの戦い方は単純明快で、相手よりも先手を取り、そのまま力押しで倒す――要は、魔法の詠唱をしようものなら、詠唱が終わる前の無防備な状態を狙ってくる。

パーシヴァルは魔法を使うために、右手を上げ魔力を集中させ、口を開く。

そこで相手が動いた――パーシヴァルの詠唱が終わる前に仕留めようと。

しかし、パーシヴアルの口から出た言葉は詠唱ではなかった。

「?ストーンブラスト?!」

コマンドワードである。

そもそも、魔法を放つ際になぜ詠唱を行うのか?

それは、言葉にして出すことで、魔法のイメージをより強固にするためである。

魔法を放つためには、自身の持つ魔力を意図的に体内外に働きかけなければならぬ。だが、その「意図的に」というのが難しい。大抵の初心者はそので躓く。

そこで、魔力を働かせる際に、実際に発動した光景を脳裏に浮かべる。そうすることで、魔力の働きを自分の思う通りにコントロールしようとするのだ。

しかし、それだけでは足りない。想像という精神力だけでは、安定した制御が行えず、強力な術を使うことが出来ない。仮に使えたとしても暴発という危険が付きまとう。

その想像を実際に言葉にすることで、強固なものにし、安定した制御が可能となるのだ。

パーシヴアルのコマンドワードにより、地面から数個の石礫が跳んだ。

詠唱をせずに放ったそれは、通常より遙かに小さい。当たったところで、大した打撃を与えられないだろう。

だが、パーシヴアルの狙いは当たった。

相手は、詠唱なしで魔法を撃つとは思ってもみなかったのだろう。大した威力を持たないのにもかかわらず、出鼻を挫かれた。

そして、少なからず勢いを減じた男達に向かい、パーシヴアルは猛然と襲いかかる。

一人目に当て身を喰らわせ、二人目が剣を振るのに合わせて、軍刀を鞘走らせた。右腕の腱を斬られ、剣を落したその男の顔面に、

軍刀の護拳ナックルガードを叩き込む。

三人目が斬りかかってくるのを身体を捻りながら回避しつつ、回し蹴りを相手の腹に繰り出した。相手が仰け反ったところに、右手で頭を掴み、

「地面とキスでもして……な！」

と、地面に叩き付ける。それで相手は昏倒する。

しかし、四人目の斬撃は避け切れず、刀で受け止めた。鏢迫り合つばぜあいしつつも、非力なパーシヴァルが徐々に押され始める。

「どうした！ 最初の威勢の良さはどこに——」

突如、男の表情に苦痛がよぎった。それに合わせ、一瞬男の力が弱まる。

パーシヴァルはその隙を突いた。瞬間的に左手に力を込め、男の剣を押し返す。

男はその顔に焦りを浮かべつつ、剣を振りかぶり、パーシヴァルの脳天に落そうとした。一方で、パーシヴァルはその時には男の首目掛けサーベルを一閃させる。

それが、生死の境を分けた。

男の剣がパーシヴァルに届く前に、サーベルの刃が男の首筋を捉とらえる。血飛沫ちしぶきが飛び、男の剣は無益にパーシヴァルの横を流れた。

パーシヴァルは血振りをし軍刀を鞘に納める。そこでようやく氣付いた。

男の右足には、別の剣が刺さっていた。

ある種の予感がし、あの青年の方を見れば、いつの間にか立ち上がろうとしている。

周囲を確認すれば、騒ぎはほぼ治まりつつあった。

近くにいた兵士に倒れている男達の後始末を任せ、青年の方へ近づく。

「借りが出来たか？」

パーシヴァルが聞くと、

「……借りを返したただけだ」

と、素気なく答える。

パーシヴァルの予想通り、あの男の足に刺さった剣は、彼が投げたものだろう。

どう礼を言おうか言葉に詰まっていると、

「ところで、そろそろ行っていていいか？　親方達の朝飯を待たせているんだ」

と、青年が別の方向を向く。それに釣られ、パーシヴァルが視線を向けた先には、荷車とそれに隠れるようにしているフォラーズの姿があった。

パーシヴァルは笑みを浮かべ、

「そういえば、俺も朝食を食べ損なっていたな」

「どうするんだ？」

パーシヴァルは思い付いたままを口にする。

「一緒に行つて、おやつさんに恵んでもらおうかな。おやつさんのところは犬所帯だし、城に戻つても報告を優先されそうだし」

「そうか」

そう言つて、青年は荷車の場所まで戻ると、荷車を引いて歩き出す。パーシヴァルは慌ててそれを追い、肩を並べつつ騒ぎが終わつた後の街を歩き始めた。

第十六話（後書き）

< D・W第十五話制作秘話および裏話 >

前回の話では、物語中で重要な単語が二つほど登場しました。

D・Wではほとんどの人間が魔法を使える、という設定にしているので、魔法に関する単語が結構出てきます。

ときどき難しいものもあるかもしれませんが、質問してくだされば一つ一つ答えていきたいと思っています。

< 教えて！ 梅院先生！ >

ついに二回目を迎えました、「教えて！ 梅院先生！」のコーナーです。

このコーナーでは読者の皆様からの質問に答えていきます。

いつもお世話になっているラーさんからの質問です。

Q （十五話の後書きで）ついカッとなってやってしまったのは、「悲しいけど……云々」というレドの台詞のところですか？

A. いえ、第二段落以降全部です。

前半は、誰かの夢を見せ、少々シリアスになるか……と思ったらあのザマですよ。ちょっとふざけすぎましたね……

ちなみに、問題のレドの台詞は明らかに某有名アニメのオマージュです。

というわけで、次回もお楽しみに！

第十七話（前書き）

<最近の日課>

- ・ 大学で、六時まで残り、夕飯を学食で食べる。
- ・ マンションに戻るも、部屋の中が外よりも暑い。
- ・ 節電しなければならないので、近所のマクドナルドへ。
- ・ 現在、炭酸飲料が全サイズ百円なので、それを頼む。
- ・ 飲みながら、小説orレポートを書く。
- ・ 休みの日の場合、昼から近所のガストに行って、ドリンクバー飲みながら小説orレポートを書く。

第十七話

パーシヴァル達が店に着くと、親方がそわそわと落ち着きなく店頭をウロウロとしていた。

「親父、すまねえ、遅くなった」

「フォラーズ！ 一体お前どこほつつき歩いて――」

そこで、親方はフォラーズの後ろにいたパーシヴァルに気付いたらしく、

「お前、今時分は登城しているはずだろ？」

「まあ、ちよつといろいろと……」

パーシヴァルは先程起きた騒ぎを要約して伝える。

「なるほどな……なんか騒がしいと思ったら、そんなことがな……」

「で、戻ったところですぐに食事にありつけそうにないんで、おやつさんところで相伴しょうばんに与あずかないかなあ、と」

親方は「呆れたぜ」と呟き、

「まあ、うちは大所帯だ。一人ぐれえ増えたところで何とかならあ。お前ら、とつとと飯にすつぞ」

フォラーズとあの青年が荷車を引いて裏口に向かった。

「もう少ししたら飯になつから、その辺で油売つとけ」

と言に残し、親方も奥に消える。

さすがにまだ店は開いてないので、店頭の商品などは並んでいない。
い。

店の中に入り、椅子に座ろうとしたところで、机の上に大きな包みが置いてあることに気付く。

その包みには見覚えがあった。

「いくらなんでも、不用心だろ……」

それは、昨日あの青年に会った時に、彼が持っていたものだ。あの青年が武芸者に挑もうとした際に預かったので、よく覚えている。

――そういえば。

パーシヴァルはこの荷を受け取った時に感じた違和感を思い出していた。

少々気が咎めたものの、結局好奇心が優った。荷を覆っていた布をはがす。

その中身はパーシヴァルの予想通り、一本の剣だった。それも、かなり巨大なものだ。ひよっとしたら、自分の身長とあまり変わらないのかもしれない。

だが、パーシヴァルの興味は別のところにあった。

パーシヴァルはその大剣を片手で持ち上げる。

そう、この剣は大きさに反し、軽いのだ。今まで親方に従事し、数々の剣を見てきたが、この大きさでここまで軽い剣は見たことがない。

ここまで来たら、もはや湧き上がってくるものを抑えることは出来ず、今度は鞘を払う。

露わになったのは、鈍くも美しく――その中に確かな存在感を示す、白銀に輝く刃だった。

ごくり、とパーシヴァルは喉を鳴らす。

普通、このような剣は折れないように刃は厚めに作られているはずだが、その剣はその常識が通用しないほどに薄い。そのためか、刃の鋭さが際立ち、切っ先に関しては、突けばどんな槍も凌駕するほどの威力を想像させる。

飽くことなく眺めていたパーシヴァルだが、視界の端にあるものが留まった。

プレートアーマー

それは板金鎧の胸板の一部である。なんでそんなものがあるかと言えば、親方は古くなった武具や鉄くずなどを元値よりはるかに安い値段で買い取り、それを鍋や包丁などの日用品に叩き直して売っているのだ。元は鎧だった板も、あちこちが凹み、刻み込まれている傷がその歴史を物語っている。

このとき、パーシヴァルは試し切りをしたい欲求に駆られた。

パーシヴァルは左手に剣を保持した状態で、板金に右手をかけた。

次の瞬間、その板は宙を舞い、パーシヴァルの両手は剣の柄を握り締める。

パーシヴァルの口から裂帛^{れっぱく}の気合が漏れ、その巨大な刃が一閃された。

パーシヴァルの手に、金属同士の衝突による衝撃が伝わる。

店内にいくつかの音が響いた。ぶつかった金属の鈍い音——そして、切り裂かれた板が床に落下した音。

パーシヴァルは剣の刃を丹念に調べる。仮にも鎧に使われていた部品を切ったにも関わらず、刃こぼれ一つ起こしてない。

その強度にパーシヴァルの胸の奥に、驚愕、あるいは戦慄ともとれる感情が浮き上がる。

剣腹を指でなぞって傷を確認してみるが、傷は無い代わりに何かが彫ってあった。どうやら、文字のようだ。その文字を一つずつ読み上げる。

「? D ?、? e ?、? s ?、? t ?、? i ?、? n ?、? y ?……」

——? D e s t i n y ?

その言葉は、古代グラン語で「運命」を意味する。

パーシヴァルは今度は落ちている板を拾い、切断面を調べた。まるで水面に薄氷が張ったばかりのように、滑らかで傷一つ無い。

脳裏に、別の剣が浮かんた。

その剣はライトナイツ家に代々継がれた業物であると同時に、パーシヴァルにとっては絶望の象徴だった。

あの剣に触れたときから、あの剣を超える剣を求めるようになった。

家を捨て、親方に弟子入りし、自分の手で作ろうとまでしたのだ。それは、憧れであり、夢であり——呪いだった。

今、目の前にあるのは、自分が求めたものに違いない——無限に広がる砂漠の中で、一粒の宝石を見つけたような歓喜が、パーシヴァルの身体を包み出す。

——欲しい。

胸の奥底から湧き上がる感情を抑えることは、予想以上に困難だった。喉から手が出る、とはよく言ったものだ。もっとも、そんなことするぐらいなら、もっと早く全てを投げ出して両手を伸ばしている。

激しい渴望の炎に身を焦がしながら、パーシヴァルは思った。

——これは、偶然か？ それとも、この剣の名の通り……

「客人の荷物に何してんだ、お前は？」

その声にパーシヴァルはハッと我に返る。

見れば、親方が眉間に皺しわを寄せ、こっちを睨にらんでいた。パーシヴァルは慌てて剣を鞘に納める。

「騎士様とあろうお方が、他人の武器を物色するのはまずくねえか？」

親方の声は静かではあったものの、明らかに抑えられないほどの怒気が含んでいた。親方はこういったことを極端に嫌うのだ。

「す、すまない、おやっさん……つい……」

思わず、情けない声が出た。

それを聞いた親方は嘆息し、

「ま、お前の気持ちも分からんでもないけどよ」

と付け加えた。

パーシヴァルは名残惜しく剣を見つつ、

「こんな業物、おやっさんには悪いけど、滅多にあるものじゃない……一体、彼はどうやって手に入れたんだ？」

と、疑問を口にする。

とてもじゃないが、あの青年のように一傭兵どころか、その辺の貴族も持っていそうにない。

親方がすぐに種明かしをしてくれた。

「拾ったらしいぞ。ただし、それ目当ての盗賊のオマケ付だ」

そう言い、親方は卓上から何かを投げた。受け取ると、それは腕

輪型の魔装具だった。

「これは？」

「盗賊の頭領が持っていたらしい。なんでも、そいつ自信も依頼主からもらったとか……内側を見てみる」

パーシヴァルは首を捻りつつ、言われた通りにした。

だが、すぐにその理由に思い至る。遅れながら、その腕輪が銀で出来ていることに気付いた。

「おやっさん、これを渡した奴が、あの剣を狙ってる、ってことだよな？」

「そうだろうな」

親方の言葉こそ平静としたものだが、パーシヴァルは同じようにする余裕がない。

腕輪の内側には、大小二本の線が垂直に交じった——十字架が刻まれていた。

銀、そして十字架——この二つのことから考えられることはただ一つしかない。

この魔装具を渡し、あの剣を求めた者——その正体は。

「教団！」

第十七話（後書き）

< D・W第十六話製作秘話および裏話 >

……先程、かなりの長文を書いたのにもかかわらず、サーバーが繋がらずに消えたんで、今回は休みます。

同理由により、質問コーナーも休みます。

次回、第五章〈名前〉

第十八話

「昨日は大活躍だったようね、パーシヴァル」

あの暴動の翌日、場所は城中の食堂。

いつものように訓練を終え、昼食を摂っている最中に背後から声をかけられた。

パーシヴァルはゆっくり咀嚼そしやくすると、振り向きつつ、

「いきなり御挨拶ですね、ハフスターさん？」

声の主は、淡い褐色の髪を後頭部で束ねた女性で、同じ色の瞳でこちらを見据えている。

細くて整った顔立ちと、鍛えられながらも均整の取れた体形から、美人と称してもいいかもしれないが、普段の彼女はその真面目すぎる——悪く言えば、堅苦しい——言動がその輝きを何割りか損なっており、パーシヴァルとしては勿体なく感じる。

「ミライナでいいわ。そこ、空いてる？」

パーシヴァルは首肯しつつ、立ち上がり、エスコートしようとしたが、ミライナは片手でそれを制すと、そのままスタスタと歩いて行き、席に着いた。

パーシヴァルは残念そうな顔を作り、再び椅子に腰かける。

ミライナその行動を見てクスクスと笑い、

「貴方は女性に手の早い人間なのかしら？　それとも、私だけ？」

「婦女には紳士であるべきでしょう。それも騎士ならなおさら、ね」

「あら意外、騎士だって自覚あったのね。ならちゃんと報告はして欲しいものだわ」

さらりと漏れた毒舌から、彼女が何の目的で話しかけてきたか分かった。

（またお小言か）

彼女は、騎士としては新人であるパーシヴァルのお目付け役でもある。

最初こそ、パーシヴァルは直属の上官が女性であることを喜んだものの、すぐにその気持ちはどっかに飛んだ。

薄々感づいていた——というより、少なからず自覚はあったが、自分は理想の騎士には程遠い性格らしい。世間一般の騎士と比べれば（当然個人差はあるが）、自分はかなりの問題児のようだ。

ただ、それがどうした、というのがパーシヴァルの見解でもある。元々パーシヴァルが軍に入ったのは金銭の面で親方に迷惑をかけたくなかったからだ。親方が元あった店を閉め、この地方に移ろうとした時に、パーシヴァルは家を捨て、付いていった。一度は弟子入りを拒んだ親方も、その時は黙って受け入れてくれた。

だが、鍛冶技術を教えてもらうことと世話になることは別である——パーシヴァルはそう思っていた。そのために、最低限な生活のための金は自分で稼ぐことにしていた。

「——それに、これは貴方のために言っているのですよ。あのままじゃ、貴方の功績も……って、聞いてますか！」

ミライナの怒鳴り声。適当に聞き流していたパーシヴァルはうっかり「ん？」と間抜けな声を出してしまう。

「……貴方には、本当に呆れました」

相手の声が、一段と低くなった気がする。

爆発寸前だな、と他人事のように思いつつ、どう宥めようかと考えている時だった。

「失礼ながら、第十五騎士団のパーシヴァル殿であるますか？」

ちようどいいタイミングで、一人の兵士が声をかけてきた。

パーシヴァルが肯定すると、

「第十五騎士団のフェルナンド団長がお呼びです」

「団長が？」

パーシヴァルが席を立とうとすると、

「待ちなさい。団長の下へは私が連れて行きます。貴方は任務に戻りなさい」

と、ミライナがその兵士に命じた。

兵士は敬礼し、その場を後にする。一方でミライナは、「いい機会です。団長にも叱って頂きましょうか」などと言う。

パーシヴァルは思わず溜め息を吐いた。

ミライナによって連行されたパーシヴァルは、扉の前にいる兵士に武器を預け、団長の部屋に入った。

「第十五騎士団ミライナ・ハフスター、パーシヴァルを連れて参りました」

「……同じくパーシヴァル、出頭しました」

団旗のかかった壁の近くに立っていた男は、彫りの深い顔の中で、鋭く光る目を向ける。相変わらず、

執務室にいたのはフェルナンドではなかった。

会議のために置かれている大きめの机に二人、明らかに軍の関係者ではない人間がいた。

一人は胸に十字架が描かれた白い法衣を着ていた。そのことから、彼が教団の人間であることが分かる。

もう一人は、胸に十字架こそあったが、身に着けているのは鎧だった。その男はその神官を守るように立っている。

「あちらは教団のヤコブ大司教、その後ろに控えているのが、教団騎士のヨハネ殿だ」

フェルナンドが二人を紹介した。

ヤコブと呼ばれた男が立ち上がった。大司教というだけあって教団の中でも高い地位にすることが分かるほど、男の着ている法衣は上質なものであった。

「そうですか、この者が……神の名のもとに礼を申そう」

「礼？」

正直、教団に礼を言われるようなことをした覚えがない。

「昨日の教団に対する魔法不能者の暴動のことよ。貴方が首謀者を討ち取ったのよ」

パーシヴァルが首を傾げていると、横からミライナが耳打ちした。しかし、パーシヴァルにはそんな実感がない。なぜなら――

「民を守ることが、騎士の務めですので」

だが、相手はそれを額面通りに受け取ってはくれなかったようだ。「いえ、貴方のおかげで、憎き背教者達が数を減らしたのです。神もきっと貴方を祝福しているでしょう」

あくまでもにこやかに言うヤコブ大司教――もつとも、眼は笑っていない。ちなみに、大司教の言う背教者とは魔法不能者のことだ。「光栄です」

パーシヴァルは形式的に恭しく頭を下げた。

終わりそうにない問答に嫌気が刺した、というのもある。

自分の都合にいいようにしか解釈しようとしなない相手が、滑稽だとも思った。

そんな本心を表情に出さないように顔を上げれば、大司教が満足そうにしているのが（そもそも、礼を言われた側ではなく礼をした側が相手の反応に満足するのも奇妙ではある）目に入る。

これで用が終わった、とばかりにパーシヴァルは敬礼し、踵を返そうとしたが、

「さて、それでは本題に入ろうか」

と、フェルナンドが言い出したので、足を止める羽目に陥る。

あれは本題のついたかったのか、などと思いつつ、仕方なくパーシヴァルは再び姿勢を正した。

「すでに私は大司教から伺っている。後程全員に到達するつもりではあったが……この二人には先に到達してもよろしいですか？」

「フェルナンド殿の配慮に感謝する。」

では、私の口から説明させてもらうが、よろしいか」

「ご随意に」

まるで、打ち合わせたかのような会話をし、本題とやらを大司教がし出した。

「我らが教会の宝物庫に盗賊が入った。」

そして、恐れ多くも宝物庫に安置されていた宝剣を盗んでいきおった」

「剣？」

パーシヴァルからすれば、魔法を崇める集団が「宝剣」と呼ぶような武具を持っていることが意外だった。

「そうだ。ヨハネ」

「はっ……これが、その宝剣を模写したものです」

今まで口を開こうともしなかった教団騎士が、前に出ると、大きな羊皮紙を広げて見せた。

そこには一本の剣が描かれていた。

描いた人間はよほどの腕だったのだろう。柄から剣先まで丁寧に描かれている。

パーシヴァルはその絵を眺めながら、別のことを考えていた。

——この絵の剣を、自分はどこかで見た気がする。

「盗賊の正体は分かっているのでしょうか？」

ここでミライナが素朴な問いを投げかけた。

「実は、盗賊の一味のうち何人かを捕えたが、宝剣を持っていないかったのだ。

だが、聞き出したところ、今宝剣を持っている者についての情報を得ることが出来た」

「失礼ですが、その者の特徴をお聞かせ願えますか？」

再びミライナが問いかけ、

「うむ、探索のためには必要であろうな」

そう言い、ヤコブ大司教はその人物の外見的特徴を話し出した。

服装は、青い革レザーアーマー。

髪の色は茶色。

そして、瞳は空のような——青色。

それだけの特徴だけで、すでにパーシヴァルの脳裏には一人の青年が浮かび上がっていた。

それは、隣に立っているミライナも同様だったらしい。

たぶん、一昨日のことを思い出しているのだろう。パーシヴァルが彼を店に連れてきた時、彼女もその場に居合わせていた。

「パーシヴァル、ちょっと聞きたいことがあるのだけど？」

だから、ここでパーシヴァルに話が振られてことも自然な事ではあるだろう。

「何でしょうか？」

パーシヴァルの立場上、無視することは出来ない。

そして、他の人間も二人の問答に注目していた。

「一昨日、貴方が連れていた人物のことだけど……」

詰んだ、と思った。少なくとも知っているのが自分だけだったら隠すことは可能だったかもしれない。

「店の中が暗かったから、確証が持てないのだけど……」

何故か、言い訳がましいことを言い出す。

「彼の瞳の色、何色でした？」

さらに肝心な部分が疑問形だった。

一瞬、パーシヴァルは啞然とした。

「……緑、でした」

だが、この好機を逃すほど、パーシヴァルは馬鹿ではなかった。

「……緑？」

ミライナの声が硬いものに変わった。

「はい。」

暗い場所などでは青と勘違いすることもあるでしょうが、私が日中、外で見たところ、紛れもなく緑でした」

あえてパーシヴァルは自分の意見を通すことにした。

ミライナは懐疑的な目で睨み付けてくる。

パーシヴァルも内心では冷や汗をかいていた。

（さて、どう出るか……）

これはある種の賭けであった。

いくらなんでも、先程の発言を額面通りに受け取るには無理のあるとパーシヴァルも思っていた。

パーシヴァルが見守る中、ミライナは少し考えるような素振りを見せ、

「なら、別人の可能性もありますが……その方の行方は？」

と、わざわざ違いかもしいれないと言いつつ、本物の可能性を考えるのはさすが、と言ったところか。

「さて、あの後すぐにこちらに出頭だったので、彼がどこへ行ったかまでは……」

「そうですか。」

申し訳ありません。あまり有力な情報とは言えませんでした」

ミライナがフェルナンドへ向き合い、目を伏せながら言う、

「いや、気にする必要はない。君達は数ある可能性の一つを示してくれたに過ぎないのだから。」

騎士団には追って通達する。君達は一旦下がりましたえ」

フェルナンドが命じ、パーシヴァルとミライナは執務室を後にする。

このとき、ずっと控えていた教団騎士がパーシヴァルに注目していたことに、幸か不幸かパーシヴァルは気付かなかった。

「大司教様」

二人が出て行った後、最初の発言はヨハネからだった。

「どうした？」

「あの男、何かを隠しています」

あの男、とは無論パーシヴァルのことだ。

「話題に上がった男も気になりますし、もしかしたら、あの剣について何かを知っているかもしれません。」

命令を下されば、すぐさま聞き出してみせますが、いかがいたしましょう？」

口調そのものは落ち着いている——ただし、今のセリフにはいくつか単語が抜けていた。例えば、「力づくで」など。

「いや、お前の出番はないだろう——なあ、フェルナンド殿？」

二人が出て行った後、沈黙を保っていたフェルナンドが、ようやく口を開く。

「……お望みとあれば、あの者に監視を付けますが？」

「ふふふ、さすがにフェルナンド殿は話が早い」

ヤコブ大司教は笑みを——こちらは、パーシヴァルに向けていたものとは、まったく違う——を浮かべつつ、

「あの剣を早く我が手の内に納めたいものよ」

「取り返す、の間違いでは？　あの剣は盗賊に盗まれたものなのですから」

「ふ、ふ、すべてを知っていながらそう言うとは、フェルナンド殿も人が悪いな」

互いに声こそ出していないが、笑い出す大司教と騎士団長——そして、再び口を閉ざした教団騎士がそれを見ながら控えていた。

第十八話（後書き）

後書きは、後から追加します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2718/>

Destiny・Wars

2011年8月11日03時22分発行